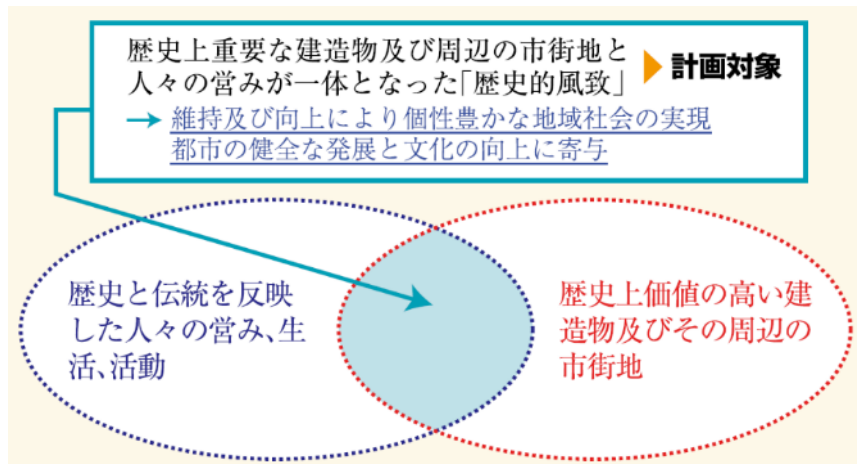


第2章 上田市の維持及び向上すべき歴史的風致

歴史的風致の分布状況

歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義（歴史まちづくり法第1条）されている。



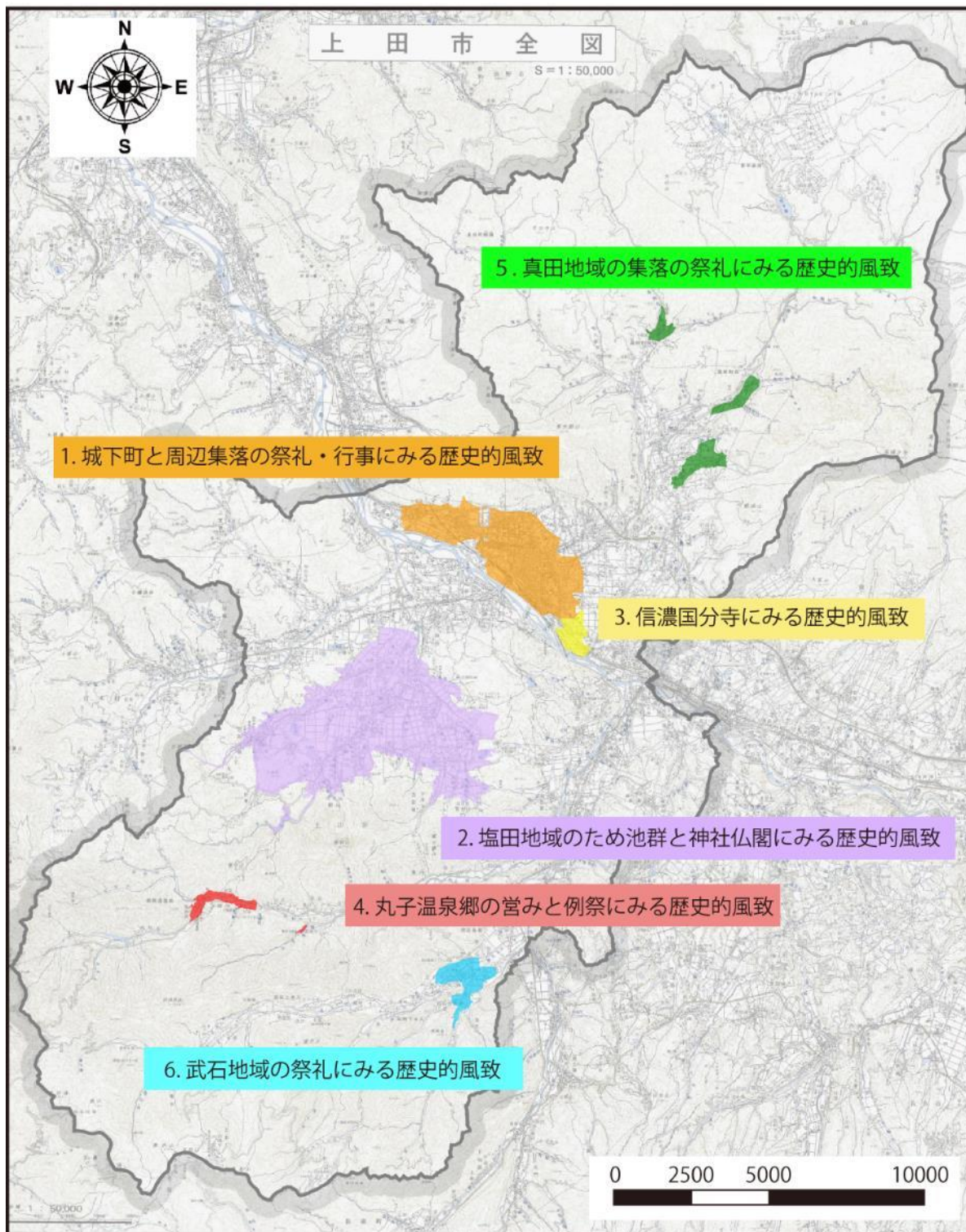
「歴史的風致」の概念図

上田市には、上田城跡をはじめとする遺跡や、神社仏閣等の歴史的建造物が各所に点在し、また、地域に根差した民俗芸能や年中行事等が現在まで受け継がれている。これらの歴史的建造物と人々の活動とが、一体となって歴史的風致を形成している。

本章では、上田城の築城により形成された城下町周辺の風致のほか、市内の各所で受け継がれてきた営みに着目して6つの風致を取り上げる。

上田市の維持向上すべき歴史的風致一覧

No.	名称
1	城下町と周辺集落の祭礼・行事にみる歴史的風致
(1)	上田城と城下町
(2)	周辺集落
2	塩田地域のため池群と神社仏閣にみる歴史的風致
(1)	塩田地域のため池群と雨乞い行事
(2)	霊峰に囲まれた塩田平の神社仏閣群
3	信濃国分寺にみる歴史的風致
4	丸子温泉郷の営みと例祭にみる歴史的風致
5	真田地域の集落の祭礼にみる歴史的風致
6	武石地域の祭礼にみる歴史的風致



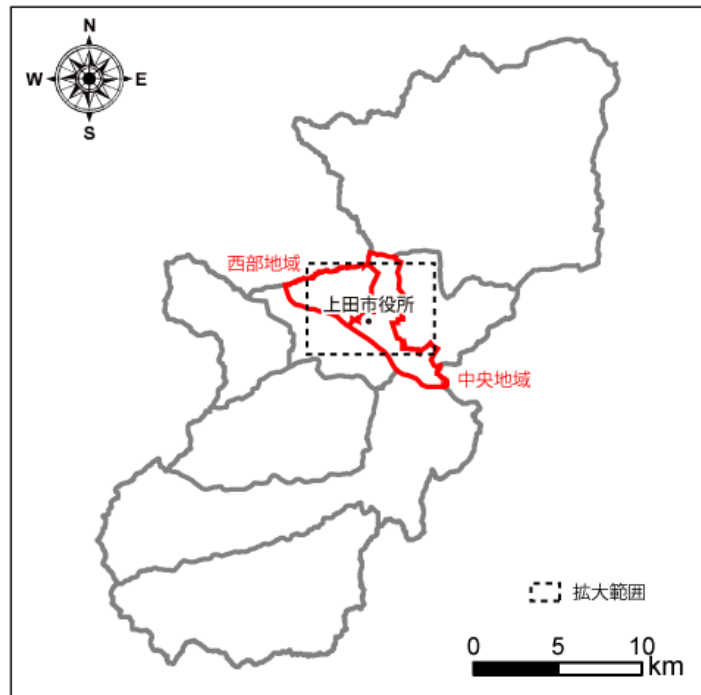
上田市歴史的風致位置図

2-1. 城下町と周辺集落の祭礼・行事にみる歴史的風致

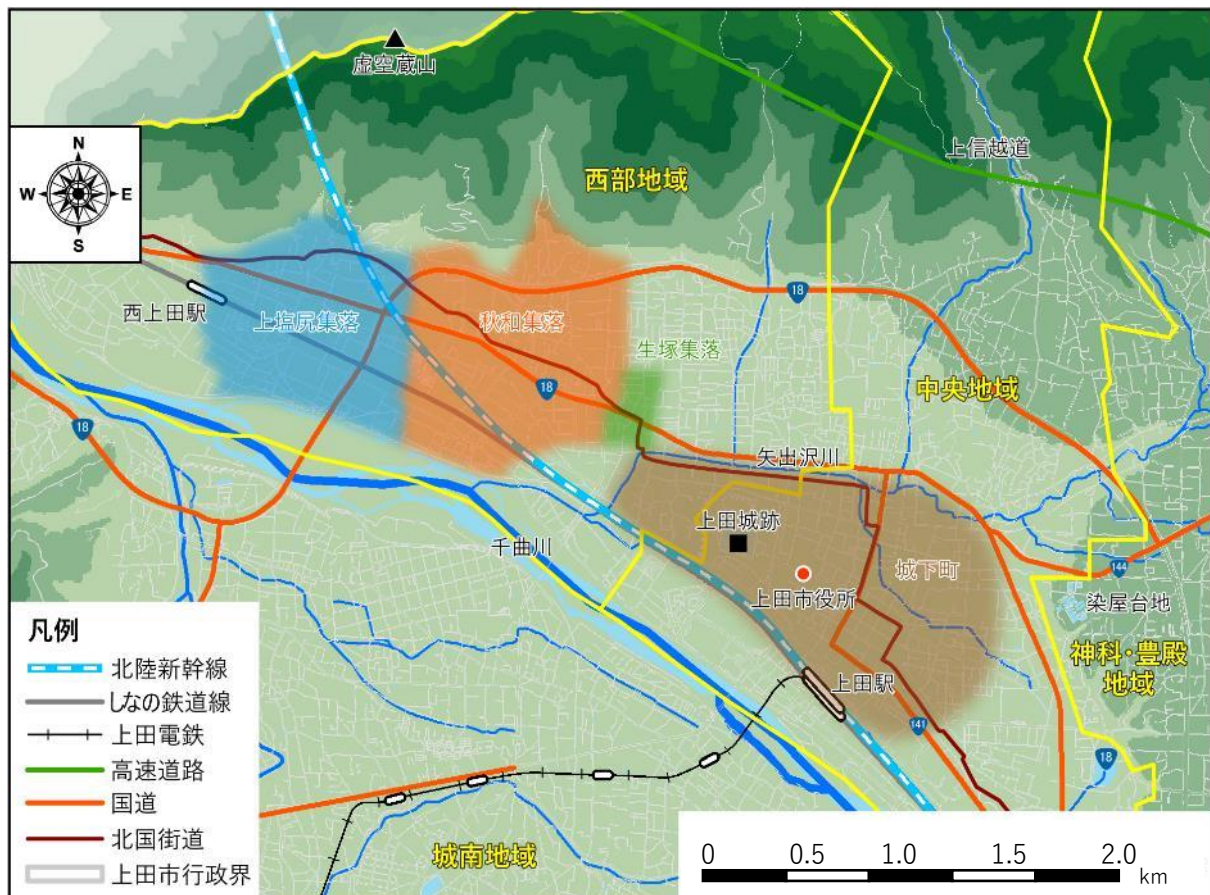
はじめに

本計画において上田城下町（以下、城下町）地区は上田市役所が位置する中央地域の西側から、矢出沢川の南側の地区で、上田城の築城と北国街道の整備によって形成したとされた地区及び近代にそこから拡大した西側の地区とし、周辺集落は城下町の西に位置する生塚、秋和、上塩尻集落として位置づけた。

生塚、秋和集落は、上田城の築城にともない「城下囲の村」として成立した集落で、その集落を結ぶように北国街道が整備された。



城下町及び周辺集落の位置する地域



城下町及び周辺集落位置

上塩尻集落をはじめとする西部地域一帯は病害に強い桑の栽培が可能であったため、幕末には養蚕や蚕種製造の一大産地となった。近代になると早くから敷かれた鉄道網によって、城下町と西部地域は養蚕と製糸の拠点として一体的に発達し、「蚕都」と呼ばれるほどの繁栄を見せた。

これらの地域には、武家屋敷や町屋、養蚕家屋や製糸場施設などが残されている。また、城下町では神輿が市街地を巡る「信州上田祇園祭」や、史跡上田城跡の花見など、多くの人々が集まり賑わいをみせる。また、周辺集落においては集落に根付いた祭礼行事が続けられており、伝統や季節の訪れを感じさせる。



城下町の町並み（房山地区）



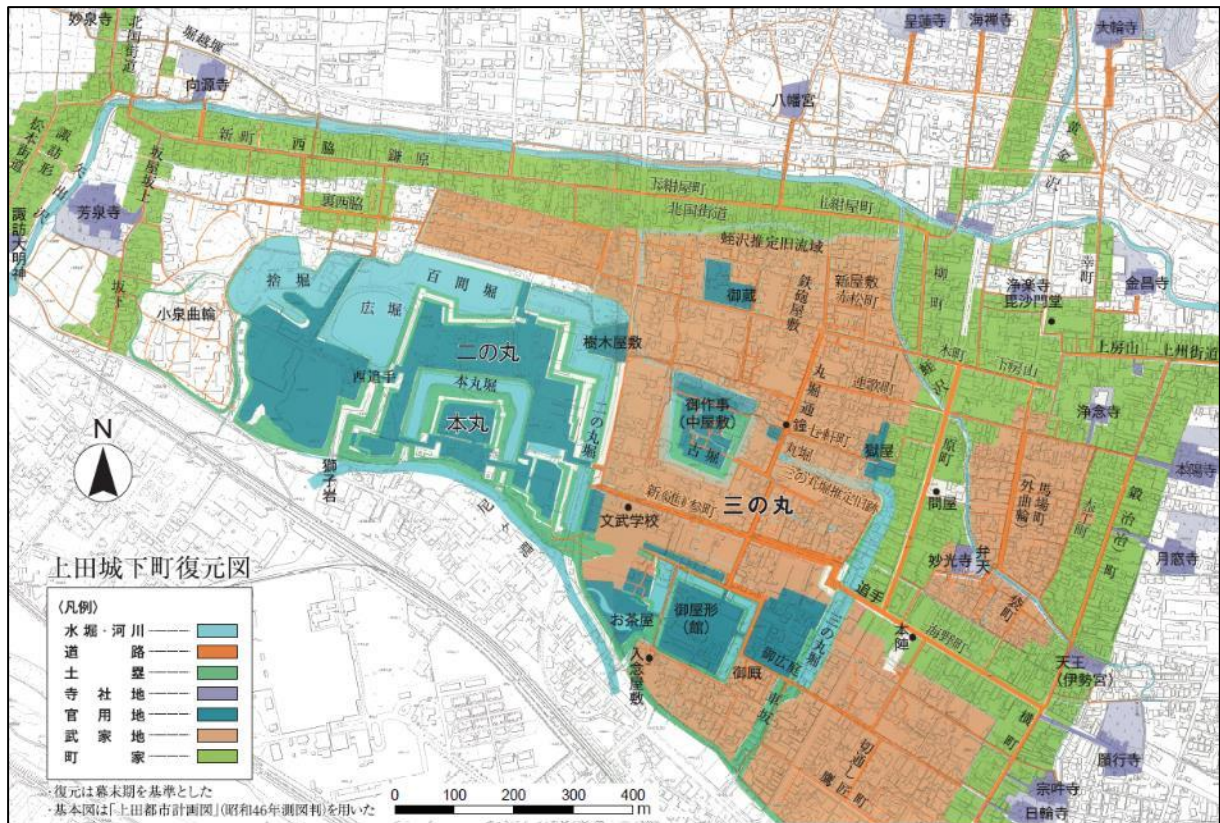
周辺集落の町並み（上塩尻集落）

（1）上田城と城下町

ア. 上田城と城下町の概要

上田城は、関ヶ原の戦い後破却されたが、仙石忠政により復興された。破却前の縄張りは定かではないが、忠政の文書等から基本的な位置は踏襲されていると考えられている。忠政は二の丸の外について、破却前からあったとされる矢出沢川を惣構え、小泉曲輪を西の守りとして、藩主居館が置かれた東側には堀と虎口を設けて三の丸とした。

城下町は真田氏が、かつての本拠があった真田地域の原野郷と真田氏ゆかりの海野郷から人々を移住させ、三の丸東側に「原町」と「海野町」を本町として形成、両町は北国街道の宿場の役割が課せられた。城下町は徐々に整備・拡大され仙石氏統治期にほぼ完成したとされる。城下町の周辺には常田や房山などの城下囲いの村が形成され、城下町ではないものの、短冊状の地割が行われるなど、「町化」されていった。

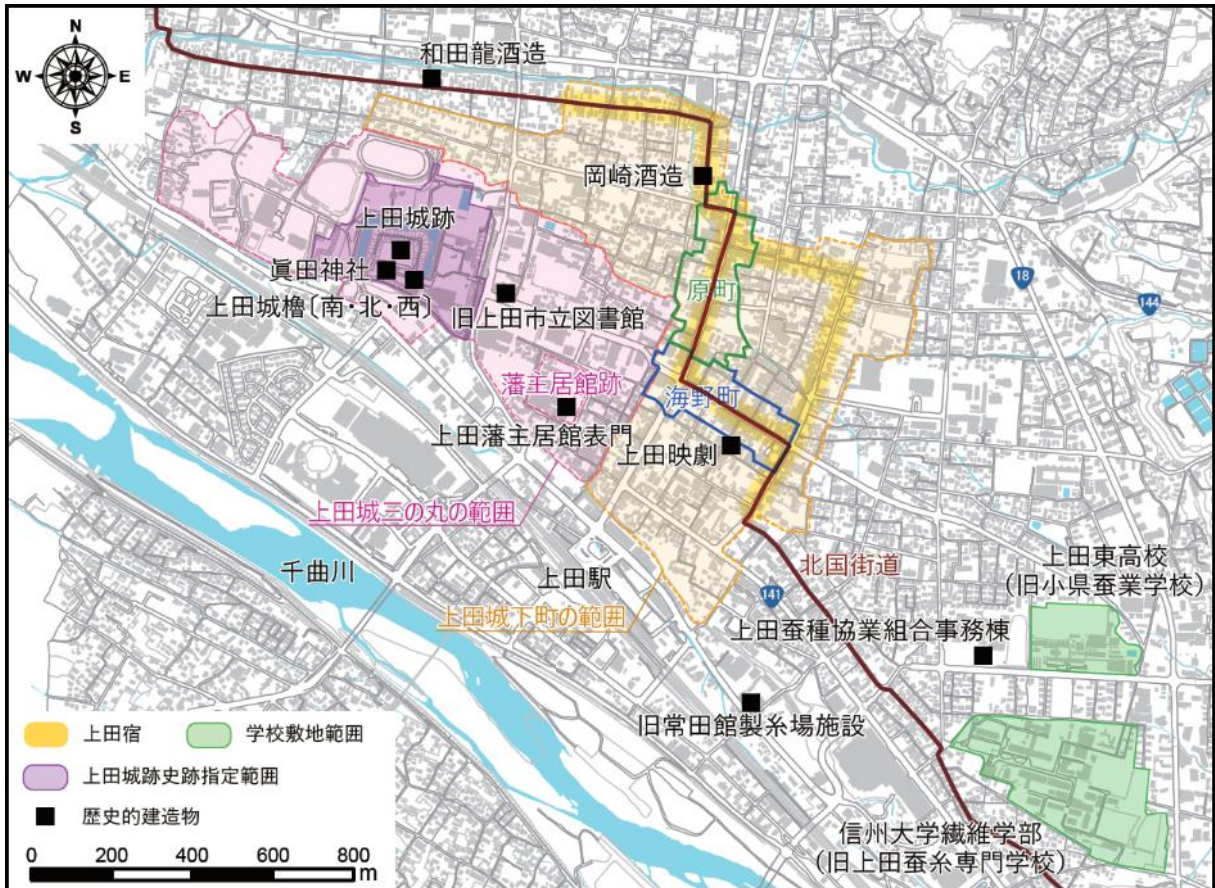


上田城と城下町の範囲

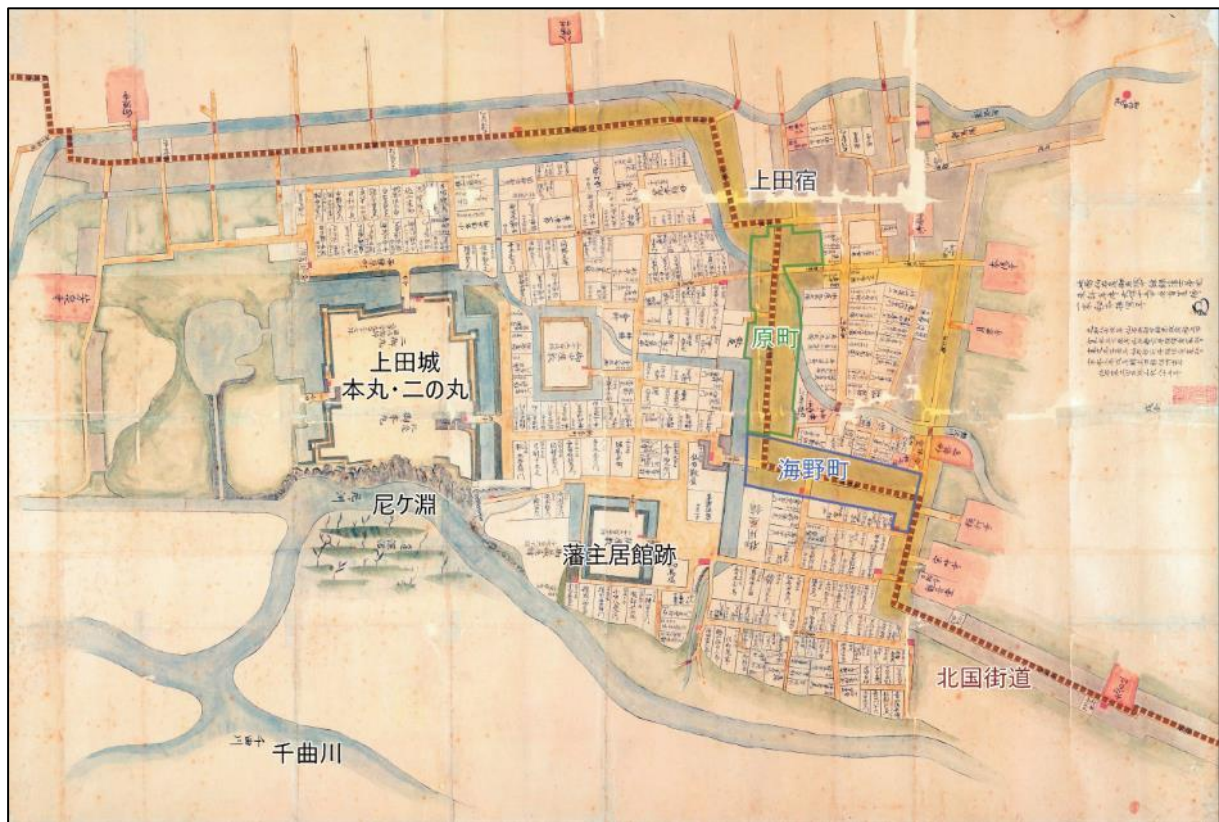
明治・大正時代には、上田駅を中心に蚕種・生糸の生産・輸送拠点として発展した。小県蚕業学校（現上田東高校）や全国唯一の官立上田蚕糸専門学校（現信州大学繊維学部）が開校されるとともに複数の映画館も開設され、教育・文化の面での発展を見せた。今でも上田蚕種協業組合事務棟や信州大学繊維学部講堂をはじめとする大正期の洋風建築物が多く残されており、上田らしい独特な景観・町並みが形成されている。

城下町では祇園祭が行われてきた。時代によって変遷はあるが、現在は城下町地区及び周辺の町（自治会）から出される神輿が、中心地市街地を巡る行事となっているが、町から出される神輿は、大星神社内の弥栄（八坂）神社で祈祷のちに練りだすなど、祇園祭の起源は受け継がれている。

また、城下町の要である上田城は、明治期以降公園として市公会堂や動物園、競技場などがつくられ、広く市民に利用されてきた。桜の花見や春の祭りは、多くの観光客でにぎわう城下町上田を代表する行事に発展している。



現在の城下町



元禄 15 年(1702)城下町絵図

イ. 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 上田城跡 (国の史跡 昭和9年(1934))

(イ) 上田城 (南櫓、北櫓、西櫓) (県宝 昭和34年(1959))

千曲川の^{あま}尼ヶ淵と呼ばれる崖端に天正11年(1583)に築城された。段丘上が「上田」と呼ばれたことから、「上田城」と呼ばれる。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで真田氏が与した西軍が敗れると城は破却されたが、領地は長男の真田^{のぶゆき}信之が治めることとなった。信之は徳川氏をはばかって城の修復はせず、三の丸に^{きよかん}居館を構えて、^{はんせい}藩政を執った。



日本博覧図 松平神社之図 (明治20年(1887))

出典：上田市立博物館

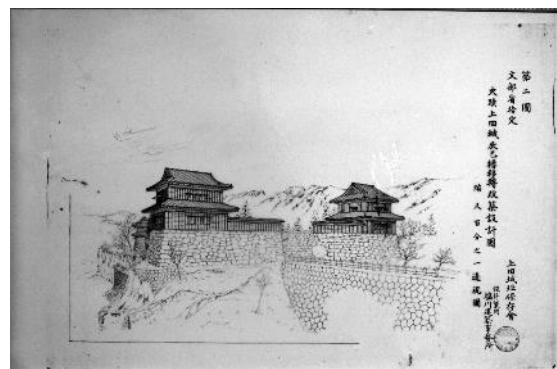
元和8年(1622)、仙石忠政が^{せんごくただまさ}入封すると上田城の再建を行うが、途中で没したため、堀や石垣のほか、本丸内に7棟の櫓を建てたところで中断された。その後未完成のまま、明治維新を迎える。

明治初期、上田城本丸、二の丸には東京鎮台第二分営が置かれたが、その後払い下げられ、建造物は西櫓1棟を残して解体され、2棟は城下町北方に設置された^{ゆうかく}遊郭へ移築され、貸座敷として利用された。その後は敷地の寄付もあり、本丸・二の丸の公園化が進められ、昭和2年(1927)には二の丸東側の堀底に上田温泉電軌北東線が敷設された。



戦前の上田城

昭和9年(1934)、本丸・二の丸部分が文部省指定の史跡となる。^{ゆうかく}遊郭に移築された2棟の櫓は、市民によって昭和17年(1942)に買い戻され、現在の南・北櫓として昭和24年(1949)に再建された。忠政により再建されて以降現在の位置に残りつづけ、宝物庫や博物館として利用されてきた西櫓と南・北櫓は、昭和34年(1959)県宝に指定された。



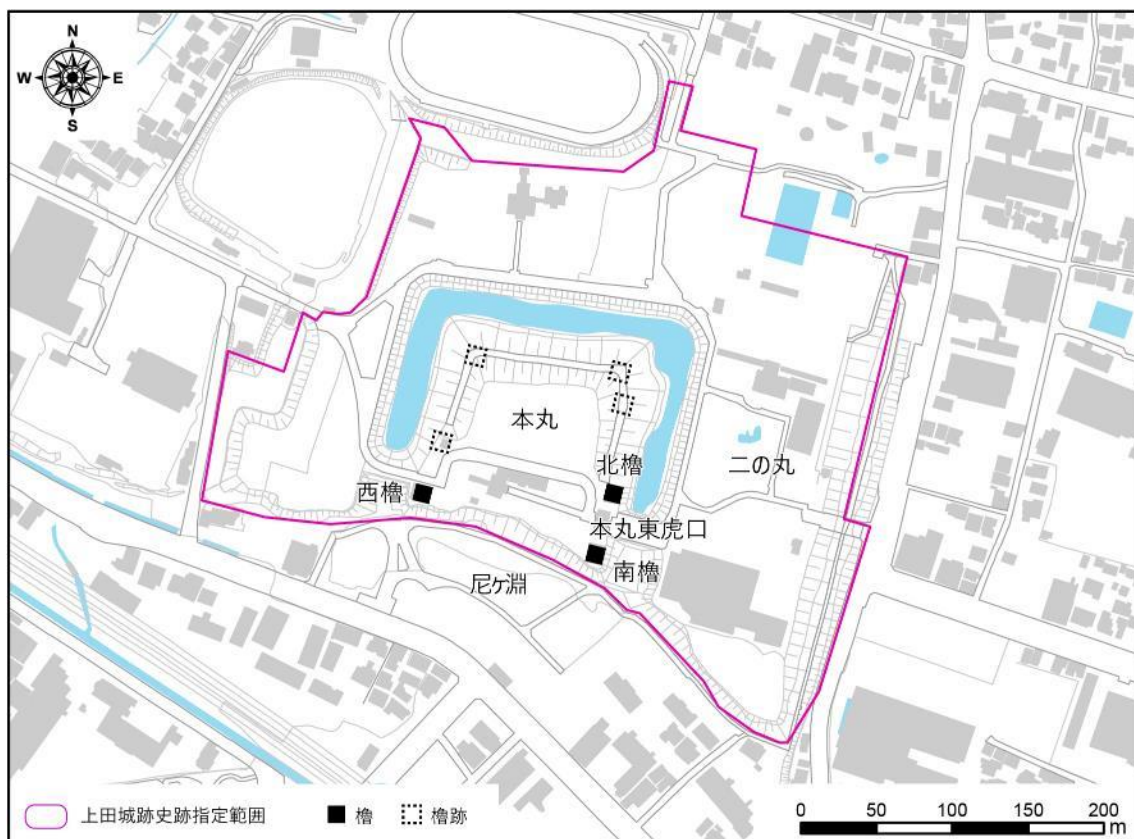
櫓移築設計図

公園化が進められた本丸・二の丸は明治時代以降、桜の名所として親しまれ、現在も多くの花見客が訪れている。また、市街地にありながら広いスペースが確保できることから、観光名所であることと相まって、多くのイベントが開催されている。

平成6年（1994）には本丸東虎口に櫓門が復元され、市民をはじめ多くの人々が集まる現代のイベント会場の背景に、約400年前をしのぶ光景が広がるようになった。郷土の歴史に誇りを持つ市民性に大きく寄与している。



上田城本丸東虎口（左：昭和40年（1965）／右：平成6年（1994））



上田城跡の史跡指定範囲と櫓位置図

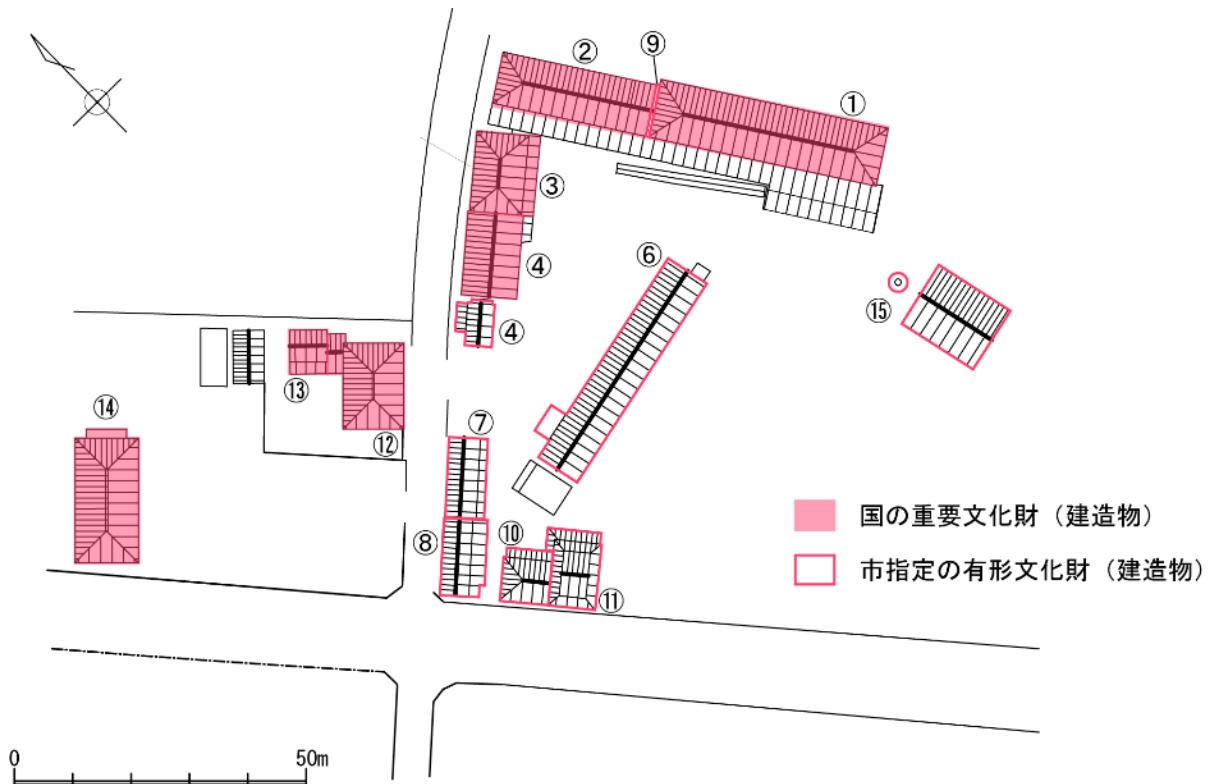
(ウ) 旧常田館製糸場施設

(国の重要文化財 平成 24 年 (2012) ,市の指定文化財 平成 22 年 (2010))

明治 33 年 (1900) に創業した笠原工業の製糸場施設。当時は優秀な工女を雇うために、敷地内に劇場や病院、郵便局等も建てられていた。昭和に入り製糸業が衰退し、機械化によってその役目を終えると、笠原工業は発泡スチロール製造に転換した。木造建築である繭倉庫は現在まで残され、製造された発泡スチロールの保管庫として利用されつづけている。現在は次ページの表のとおり、創業から昭和初期までに建てられた建物のうち 15 棟が現存しており、祇園祭では神輿が隣接の道路を通り、その掛け声が響き渡る。



旧常田館製糸場施設 (①五階繭蔵倉庫 他)



旧常田館製糸場施設建物配置

番号は次ページを参照

旧常田館製糸場施設一覧

番号	名称	建築年	西暦	文化財の分類
①	五階繭倉庫	明治 38 年	1905	国の重要文化財
②	三階繭倉庫	明治 38 年	1905	国の重要文化財
③	五階鉄筋繭倉庫	大正 15 年	1926	国の重要文化財
④	撰繭場	大正 15 年ごろ	1926	国の重要文化財
⑤	守衛所	昭和初期	-	市の有形文化財
⑥	事務所棟	大正初期	-	市の有形文化財
⑦	創業者住宅	明治 33 年ごろ	1900	市の有形文化財
⑧	倉庫	大正初期	-	市の有形文化財
⑨	二階建繭倉	建築年代不明	-	市の有形文化財
⑩	風呂場・食堂棟	大正期	-	市の有形文化財
⑪	炊事場	大正期	-	市の有形文化財
⑫	事務所兼住宅	明治 41 年	1908	国の重要文化財
⑬	文庫蔵	明治 41 年	1908	国の重要文化財
⑭	四階繭倉庫	明治 45 年	1912	国の重要文化財
⑮	煙突及びボイラー等	昭和 11 年	1936	市の指定文化財

表中の赤色は国の文化財指定物件を示す。

(エ) 上田映劇 (未指定)

明治以降、養蚕で栄えた上田では当時流行していた映画館が多く営業していた。そうしたなか、大正 6 年 (1917) に城下町の東側、北国街道の南側で「上田劇場」として営業を開始した。現存する建造物は行政資料から、大正 6 年 (1917) のものであることがわかる。1 階には座敷と花道がつくられ、天井は関東大震災で焼失する前の帝国劇場と同じ造りである格天井が現存している。平成 23 年 (2011) に定期上演は終了となったが、平成 29 年 (2017) に NPO 法人により定期上演が再開されている。映画等のロケ地としても利用されており、平成 26 年 (2014) に公開された映画「青天の霹靂」では、建物の外観や周辺看板等により、昭和 40 年代の浅草が再現された。

建物の前面にはどこか懐かしい昭和の雰囲気を感じられる路地が残っており、祇園祭では神輿や見物客が行き来し、また、主会場から近い場所にあることから神輿の担ぎ手の掛け声や熱気が伝わる。



上田映劇



「青天の霹靂」撮影時の様子

(オ) 岡崎酒造 (未指定)

古い町並みが残る柳町に建つ寛文5年(1665)創業の酒蔵。旧北国街道に面した部分には格子窓が並び、奥の酒蔵も近世の様子をよく残している。祇園祭では樽神輿用に酒樽をいくつかの町に提供している。現存する建造物は行政資料から、少なくとも明治元年ごろ(1868または1869)のものであることがわかる。



岡崎酒造

(カ) 和田龍酒造 (未指定)

旧北国街道沿いに位置する明治20年(1887)に創業した酒屋。創業当時から建っている土蔵造りの酒蔵兼店舗や門がよく残っている。祇園祭では樽神輿用に酒樽を北大手自治会に提供している。現存する建造物は行政資料から、少なくとも明治元年ごろ(1868または1869)のものであることがわかる。



和田龍酒造

(キ) 旧上田市立図書館 (市指定の有形文化財 平成5年(1993))

『上小郷友会月報』(大正2年(1913)2月28日発行)によると大正2年(1913)に上田男子小学校同窓会が当時蚕糸業によって大きな富を得ていた一般市民の寄付を集め、同4年(1915)に明治記念館として建設された。壁面も屋根も凹凸が少なく、軒の出を小さくし、軒がないように納め、そこから上に続く屋根をマンサード屋根※として壁面と屋根を一続きのようにみせている。壁面のパネル状の装飾は、19世紀末から20世紀初頭に隆盛した



旧上田市立図書館

アール・ヌーヴォー様式の流れを汲んだ意匠で、長野県を代表する大正期の近代建築と評される。

明治記念館は、当初から図書館として作られたもので、大正12年(1923)に市に寄付され、上田市立図書館として昭和45年(1970)まで使われていた。その後、市役所分室となり、昭和60年(1985)7月から平成20年(2008)まで石井鶴三美術館として利用されてきたが、現在は閉鎖中である。上田城跡と祇園祭の主会場を結ぶ沿道に位置し、また観光案内所に隣接していることもあり、往来する人々の目に留まる機会が多い。

※傾斜方向の中間部に傾斜角度が切り替わる折れ部が設けられた屋根

(ク) ^{うえだ さんしゅくぎょう かいし りょう}上田蚕種協業組合事務棟 (国の登録有形文化財 平成9年(1997))

上田蚕種協業組合は、大正5年(1916)に地元の蚕種家が出資して上田蚕種株式会社として設立したのが始まりである。登録時の調査によると事務棟は翌大正6年(1917)に建てられたことがわかっている。最盛期には現存する事務棟のほかに採卵室の建物が左右対称に3棟ずつ並んでおり、年間22万箱が出荷されていた。事務所は木造2階建て、外壁が木骨下見板張り、窓に三角破風(ペディメント)をつけた端正な意匠で、大正時代の事務所建築の外観をよく残す。入口上方には蚕をシンボル化した意匠が用いられ、内部は竿縁天井を用いるなど純和風となっている。現在でも蚕種製造が続けられており、蚕都上田の産業景観を今に残す貴重なものである。祇園祭では前面道路を神輿が通過し、当時の賑わいを想像させる。



上田蚕種協業組合事務棟

(ケ) ^{おおほし}大星神社 (未指定)

城下町地区の北部に位置する。旧^{ぼうやま}房山村、旧山口村の^{うぶすながみ}産土神で、里宮が約1km南方に建つ。現在の社殿は寛保元年(1741)の再建と伝わるが、前に建つ常夜灯には宝永2年(1705)とあり、近世中期の様子を今に伝えている。

境内の北西側には^{やきか}弥栄(八坂)神社があり、祇園祭では一部の町が境内で神事を行う。



大星神社

(コ) ^{しなののおおみやま}科野大宮社 (未指定)

城下町地区の東部に位置する。創建年代は不明だが、古代の信濃国府と強い結びつきがあったと考えられている。真田氏や歴代上田藩主の信仰も厚く、現社殿は万延元年(1860)に上田藩主^{まつだいらただなり}松平忠礼が再建したものであると伝わる。境内の常夜灯には正徳4年(1714)とあり、近世中期から後期の様子を今に伝えている。

境内社として八坂社があり、祇園祭では一部の町が境内で神事を行う。



科野大宮社

(サ) 上田藩主居館表門 (市指定の有形文化財 昭和 44 年 (1969))

上田藩主の居館は、現在の長野県立上田高等学校の敷地にあり、表門・土塀・堀等に往時の姿をとどめている。表門は藩主松平忠政時代の寛政 2 年 (1790) にその前年に焼失した居館とともに再建されたものである。前面には 4 本の太い角柱が並び、中央間には大板扉を釣り、左右には潜りの扉がつけられ、後部の控柱は 16 面に削った通し梁でつないでいる。創建当時の様式がよく保たれており、長野県下最大規模の薬医門として貴重な存在である。祇園祭で神輿が前面道路を通る様子は歴史を感じさせる。



上田藩主居館表門

(シ) 眞田神社 (未指定)

上田城跡の櫓門をくぐった本丸跡地に建つ神社。廃藩置県のあと上田城が民間に払い下げられたのち、城跡内本丸跡に旧上田藩主松平氏の祖先の霊を慰め、一家の安泰を願うために「松平神社」として明治 12 年 (1879) に建立された。戦後、真田氏、仙石氏、そして松平氏の歴代藩主を合祀するかたちで昭和 28 年 (1953) に「上田神社」に改名したが、市内にあった同名他社と紛らわしいことから、昭和 38 年 (1963) に「眞田神社」と再度改名し現在に至る。平成 20 年 (2008) ごろ拝殿の屋根に破嵐を載せたため、絵葉書にある明治 40 年 (1907) ごろと様子が一部異なるが、全面改修などは行われておらず、当時の面影を感じることができる。



眞田神社



絵葉書 松平神社

松尾町三井書店 明治後期発行

(ス) 小松姫の墓（市指定の史跡 昭和 45 年（1970））

城下町地区の西部に位置する芳泉寺ほうせんじに建つ。初代上田藩主真田信之の正室である小松姫の墓で、高さ 3 m 余りの宝篋印塔ほうきょういんとうの塔身と下壇石しもだんいしに姫の経歴が刻まれている。その終わりには「元和七年三月廿四日*施主信之」と記されている。徳川四天王の一人である本多忠勝の娘であり、多くの逸話も残ることから、花見で上田城跡を訪れた観光客が、足を延ばして訪れることも多い。

※元和七年は 1621 年



小松姫の墓

(セ) 仙石家霊廟（市指定の史跡 昭和 56 年（1981））

小松姫の墓と同じく芳泉寺ほうせんじに建つ。仙石家 2 代上田藩主仙石正俊まさとしの霊廟を中心に、祖父の秀久ひでひさとその側室や長子の久忠ひさただの霊廟が建つ。内部の正俊の墓は総高 188 cm のやや大型の五輪塔で、没年である延宝 2 年(1674)ごろの建立とされている。秀久のものは総高 202 cm の船形石塔であり、どちらの霊屋も瓦葺かわらぶきの宝形造である。仙石氏統治時代は現在につながる城下町の整備や、藩内の灌漑(ため池や堰)事業を積極的に行っており、観光客のみならず市民も多く訪れている。小松姫の墓とともに、花見で上田城跡を訪れた観光客が、保福寺道が通る諏訪部集落すわべの散策を兼ねて立ち寄る様子がみられる。



仙石家霊廟

ウ. 歴史的風致を形成する活動

(ア) 信州上田祇園祭

① 現在の祇園祭

信州上田祇園祭（以下、祇園祭）は、毎年7月の行事で、中心市街地を舞台に神輿やお舟の天王山車が出される。祭りの中心は神輿で、主に城下町地区の町が参加し、町ごとに製作した神輿を担いで中心市街地を回る。お舟の天王山車は、横町の伊勢宮から祭りの中心地まで曳行され、祭りの間安置される。

疫病退散・厄災消除を祈願する夏祭りとして、京都の八坂神社などから全国に広まったものの一つと考えられるが、現在ではその目的も薄れ、地域住民の生活に溶け込んだ慣習として受け継がれている。



神輿



お舟の天王山車

a. 神輿の準備

およそ1週間前から町中の住民が公民館等へ集まり神輿の組立や装飾などの準備作業が行われる。神輿には神殿を乗せる宮神輿と、酒樽を乗せる樽神輿の2種類がある。宮神輿は保管の際に外した担ぎ棒を取り付け、樽神輿は酒樽を組み上げ担ぎ棒を取り付け、毎年神輿に仕立てている。

樽神輿に利用される樽は、老舗酒蔵から提供を受けており、事業者の協力も得ながら神輿は準備される。近年ではおよそ10の町が樽神輿を担いでいる。そのうち、下房山自治会



下房山の樽神輿

は、岡崎酒造の銘柄「亀齢」の樽を使った樽神輿を担いでおり、神輿の準備作業が始まると岡崎酒造から樽を運び出す光景がみられるようになる。また、北大手自治会でも樽神輿は担がれており、これには和田龍酒造の銘柄「和田龍」の酒樽が利用されている。

このほかにも、その町で営む事業者は協賛金やお酒を寄付し、また、当日の賄食を地元自治会へ振舞うなどして町の盛り上がりの一助を担っている。神輿には事業者名が書き込まれた提灯も掲げられる。

b. 神輿の練り回し

多くの町から 40 あまりの神輿が練り出し、練り回る。当日は日中に弥栄（八坂）神社がある大星神社や科野大宮社などで町ごとに神事が執り行われ、町内を渡御した神輿は、夕刻になると主会場となる中心市街地へ向かう。神輿が集まるにつれ複数の担ぎ声が重なり、祭りの雰囲気は一段と高まる。



祇園祭会場の様子

夜になると祇園祭会場である中心市街地周辺では、多くの祭り参加者が縦横無尽に歩き回る。祇園祭会場では町ごとに勢いのあるパフォーマンスが行われ、多くの見物客と共に一番の盛り上がりを見せ、その余韻を残しながら祭りは終了する。祭りの時間が終わると、神輿は各町へと戻り、寄付を受けた商店や家々の前で練る光景もみられる。

c. 町の様子

当日は法被^{はっぴ}に身を包んだ住民の姿が、露店が立ち並ぶ中心市街地をはじめ、祇園祭に参加する町の各所でみられる。

日中は町ごとに神輿を担いで町内をまわる。子供神輿を出す町では元気な声を上げて神輿を担いで歩きまわる子供たちの姿もみられる。各町の自治会館の周辺にはたくさんの人が集まり、子供や担ぎ手の声が鳴り響く。



祇園祭に集まる人々

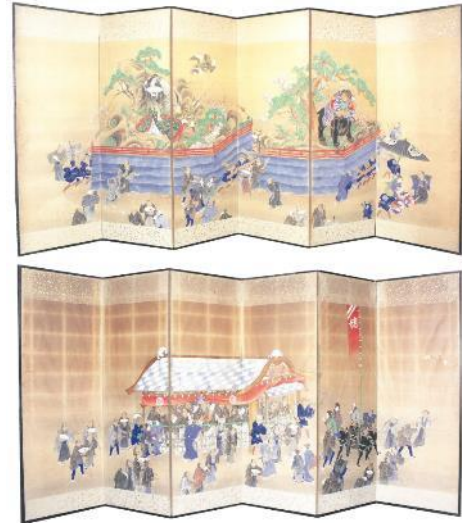
夕刻、各町から主会場の中心市街地へと担がれる道中、旧北国街道沿いに店を構える岡崎酒造や和田龍酒造、上田藩主居館表門の前を神輿が通る様子は、歴史的建造物や町並みやとあいまって趣深い。また道中には、旧常田館製糸場施設や上田蚕種協業組合事務棟、上田映劇、旧上田市立図書館などの近代化遺産も点在する。神輿が通り、担ぎ手の声が響きわたり賑わう様子は、蚕都上田として大いに盛り上がっていた時代を想起させる。そのほか、神輿を担がない町の住民も、露店で買い物や、大声を上げて神輿を担ぐ人々の迫力を感じるために足を運んでいる。なかには浴衣に着飾った人々の姿もみられる。

② 藩主家と町人による祇園祭

祇園祭の起源は不明だが、一説には真田昌幸が上田城を築城した際、疫病その他から都市を守るため、牛頭天王を祀った天王宮を勧請したことが始まりとされる。この祭りは町人だけでなく、藩主家も関わる重要なもので、藩主が真田氏から仙石氏、松平氏へ移り変わっても継続して行われた。上田藩主が松平氏となった宝永3年(1706)以降、特に多くの資料が残っており、その様子うかがえる。宝暦2年(1752)5月5日の祇園祭について後述する。

また、市の有形民俗文化財「祇園祭礼屏風」には、文久3年(1863)の祇園祭に、当時の城下町の有力者である原町の呉服商浜田屋伊助が、子の誕生を祝して出した山車の様子が詳細に描かれている。その後、明治時代になると、町人の祭りとしての祇園祭は徐々に縮小されていった。

現在の中心行事である神輿担ぎが始められた時期は不明だが、大正13年(1924)の写真に神輿が写っていることから、その当時から続くものと考えられている。



き おんさいれいびょうぶ
祇園祭礼屏風

a. 宝暦2年(1752)5月5日の祇園祭

朝7時から8時ごろ、藩主屋敷で練り物と踊りを披露するため、参加者は揃って武家地と町人地の境である大手門を抜け、上田城近くの御屋形(現上田高等学校)の裏門前を通り表門へむかう。表門前で藩主の松平忠順と藩士たち、裏門前で藩主の娘などの女性たちが上覧した。練り物には、車輪付きの山車や神輿のように担ぐ笠鉾がある。

まず、海野町のお舟の天王山車などの練り物、つづいて原町のお山の天王山車などの練り物、それが終わると海野町の踊りと常田村の獅子舞、最後に原町及び房山・山口村の踊りと獅子舞が披露され退散する。藩主上覧後、参加者たちは大手門を抜けて町方へもどり、海野町、原町で踊ると、昼食のためか一度休憩をはさんだ。その後は、再び原町で踊り、紺屋町、土橋、鍛冶町、横町、常田村の順で城下町を踊り練り歩いた。すべて回り終わる午後5時半ごろ、祭礼は終了した。



【武家地】①大手門 ②四ツ辻(現市役所前交差点) ③御屋形裏門(現上田高校裏門)
【町人地】④御屋形表門(現上田高校表門) ⑤海野町間屋柳澤家宅前 ⑥原町間屋滝沢家宅前
⑦原町九郎左衛門家宅前(位置は菅屋九郎左衛門家と家庭)
⑧紺屋町 ⑨土橋 ⑩鍛冶町 ⑪横町 ⑫常田村

お練り順路推測図

出典：「上田祇園祭とまちづくり」

(上田市立博物館, 令和4年(2022))

b. 上田獅子

常田獅子（常田村の獅子舞）と房山獅子（房山村の獅子舞）の総称。近世から明治の廃藩まで祇園祭で舞っていたとされる。明治以降は特別な行事があるときにのみ演舞される。

(a) 常田獅子（市の無形民俗文化財 昭和 43 年（1968））

近世の祇園祭では海野町の「お舟の天王山車」に随行し、藩主館や城下町の各所で舞ったとされる。明治時代以降は式典等の開催にあわせ演舞されている。

現在は昭和 31 年（1956）に組織された「常田獅子保存会」に、上常田、中常田、下常田、北常田の常田 4 自治会が参加し、科野大宮社で練習を行っている。近年では 4 月に開催される「上田真田まつり」で、房山獅子と交互に隔年で舞われている。

獅子舞の形式は、東日本で多く見られる一人立ちの三匹獅子舞であり、「三頭獅子」と呼ばれる。3 人の獅子のほか、鉦叩き 6 人、笛 9 人、唄揚 12 人、笹出し 12 人であり、3 の倍数で構成される。



昭和 33 年（1958）の常田獅子
出典：「郷土の民俗 まつり」
（昭和 46 年（1971）発刊）

(b) 房山獅子（市の無形民俗文化財 昭和 43 年（1968））

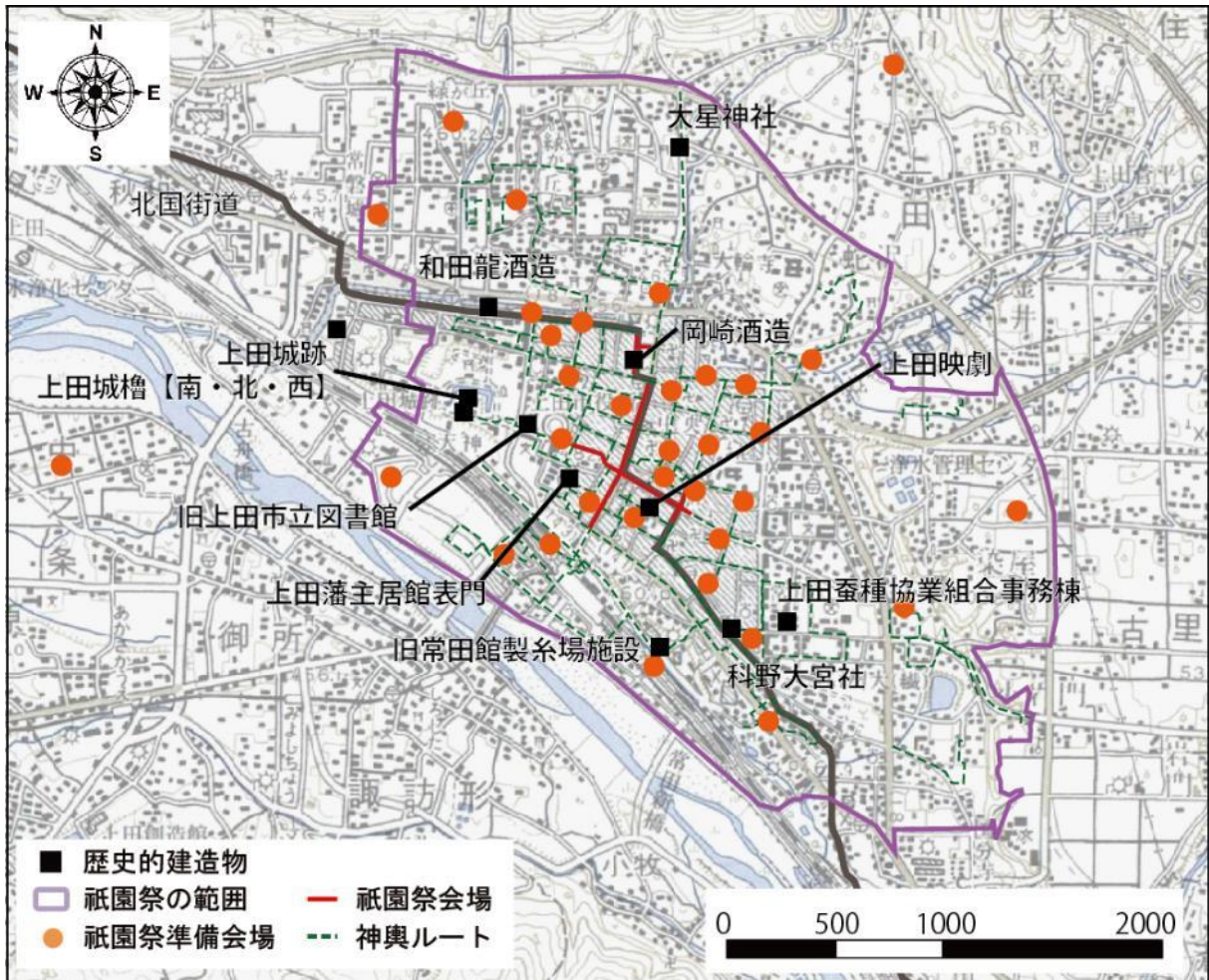
『仙石氏日記』（寛文 2 年（1662））に記述が残るほか、上田城築城時に地固めのために舞われたともされる。祇園祭では原町の「お山の天王山車」に随行し、常田獅子と同様、各所で舞われた。

現在は昭和 48 年（1973）に組織された「房山獅子保存会」に、房山地区周辺の 11 自治会が参加し、上川原柳町公会堂にて練習を行っている。

獅子舞の形式・役割は、常田獅子とほぼ同じだが、笛が 10 人となる。獅子の服装や唄も概ね同じだが、色や言い回しなどに違いがある。



房山獅子



信州上田祇園祭の範囲

(イ) 桜の花見と春の祭り

① 現在の花見と祭り

上田城跡では千本桜せんぼんざくらと称されるほど、ソメイヨシノやシダレザクラをはじめとするたくさんの桜が見られ、多くの市民や観光客が花見を楽しむ。

桜の咲く時期が近づくと各所で花見の準備が始まる。上田城跡内には露店が立ち並び、ぼんぼりが設置され、また、周辺の商店街では花見のポスターが飾られるなどされ、中心市街地一帯が花見の雰囲気ふんぎに包まれる。

桜が開花すると上田城跡は花見を楽しむ人々で賑わいはじめる。この時期には観光協会・商工会議所・市が主催の「上田城千本桜まつり」が開催され、桜のライトアップや物産展などがひらかれる。上田城跡は市民だけでなく、多くの観光客が訪れ、屋台の買い物や桜、催し物を楽しむ人々であふれ、とても賑やかとなる。

桜は上田城跡の外でも楽しむことができる。北陸新幹線やしなの鉄道線の車窓からは、上田城みなみやぐら（南櫓きたやぐら、北櫓にしやぐら）と桜を望め、北国街道のすぐ北側を流れる矢出沢川沿いでは春の雪解け水の流れを感じながら桜を楽しめる。

上田城跡を訪れた観光客のなかには、小松姫の墓や仙石家霊廟のある芳泉寺まで足を伸ばし、保福寺道周辺の街道筋の集落を散策する人もおり、花見の時期は一帯に賑わいが生まれる。

桜が終わる4月下旬には、かつて桜の時期に開催され、仮装行列などの催しで花見を盛り上げた「上田真田まつり」が華やかに開催される。ここでは、真田武者に扮した壮大な武者行列や、信州真田鉄砲隊による豪快な演武などが盛大に行われ、戦国時代にタイムスリップしたかのような光景が見られる。

花見を盛り上げる上田城千本桜まつり、それにつづく上田真田まつりは上田市の春を代表する祭りであり、古いにしえからつづく春の賑わいを想起させる。



上田城千本桜まつりの様子



矢出沢川沿いの桜



諏訪部集落の家並み



上田真田まつりの武者行列

② 近代から続く花見と祭り

上田城跡における花見の始まりは不明だが、「花の上田公園」として紹介された明治 45 年(1912)ごろの絵葉書に桜が爛漫と咲く上田城跡がみられることから、花見の会場として市民に親しまれていたことがわかる。また、昭和 46 年(1971)発行の『郷土の民俗まつり』には、「満開の桜の下では自治会や職場仲間などによる花見の宴が約 10 日間にわたってひらかれ、上田公園は一年中でもっともにぎわうのである」との記述もある。

このように上田城跡の花見は古くから市民に親しまれているが、昭和 40 年(1965)ごろには、「真田まつり」と呼ばれる祭りが開催され、一層の盛り上がりをもたせていた。桜の咲く時期に合わせて行われ、期間中には真田十勇士などに扮した「仮装行列」や「民謡流し大会」など、様々な催事が上田城跡だけでなく中心市街地全体で開催されていた。始まりは不明だが昭和 44 年(1969)まで開催され、その後は中止となった。

しかしながら、上田城築城 400 周年を 2 年後に控える昭和 56 年(1981)に、上田市商店会連合会が上田市へ真田まつりの復活を陳情した。そのこともあり、昭和 57 年(1982)に再開、以降は現在まで継続して実施されている。再開後の 2 年間は事情により秋の開催となったが、昭和 59 年(1984)以降 4 月の中下旬の祭りとなり、花見につづく春の祭りとして定着することとなった。真田まつりは昭和 40 年(1965)ごろから時代とともに内容を変えながらも、武者に扮した行列などの催しは現在もつづいている。

また、平成 16 年(2004)からは上田城千本桜まつりが行われている。真田幸村や真田十勇士に扮した「信州上田おもてなし武将隊」の演舞のような、真田氏にゆかりのある企画・催事等も行われており、市民だけでなく多くの観光客が訪れる花見を盛り上げている。

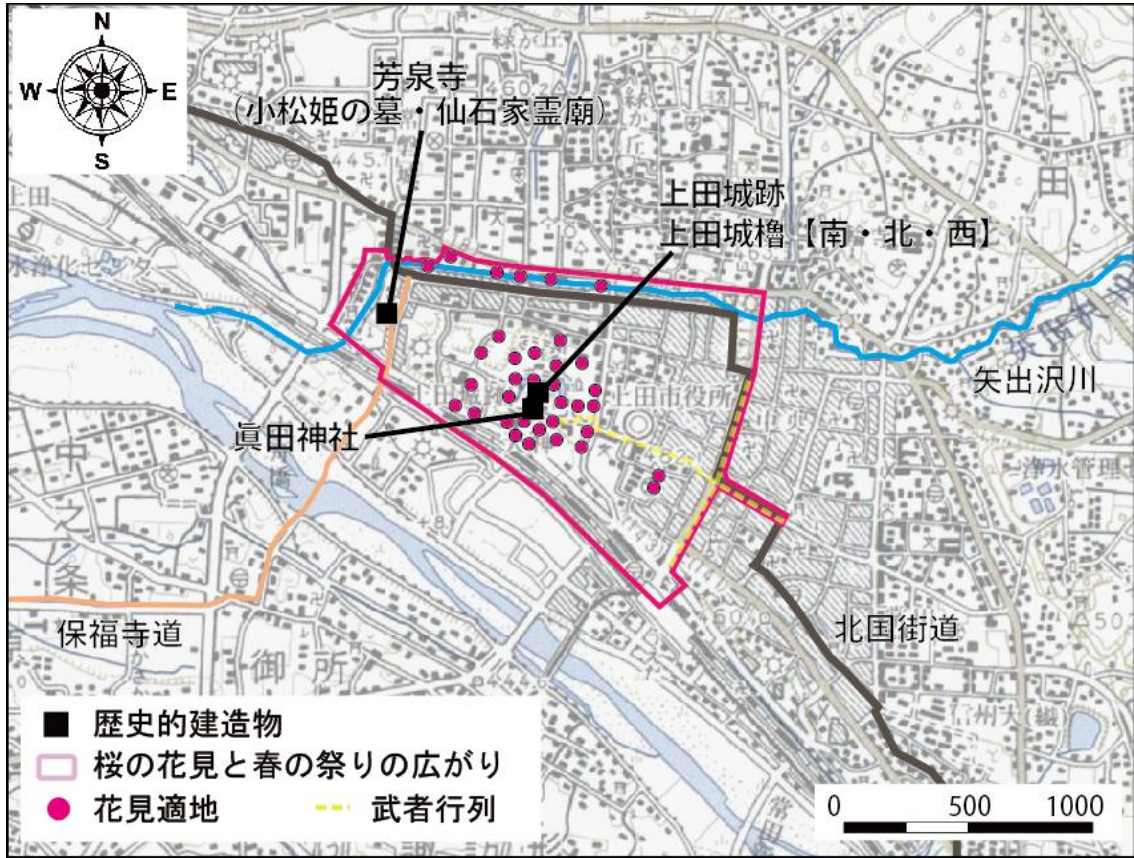


絵葉書写真 (明治 45 年(1912)ごろ)



昭和 37 年(1962)の仮装行列

出典：<https://unnomachi.naganoblog.jp/e1286383.html>



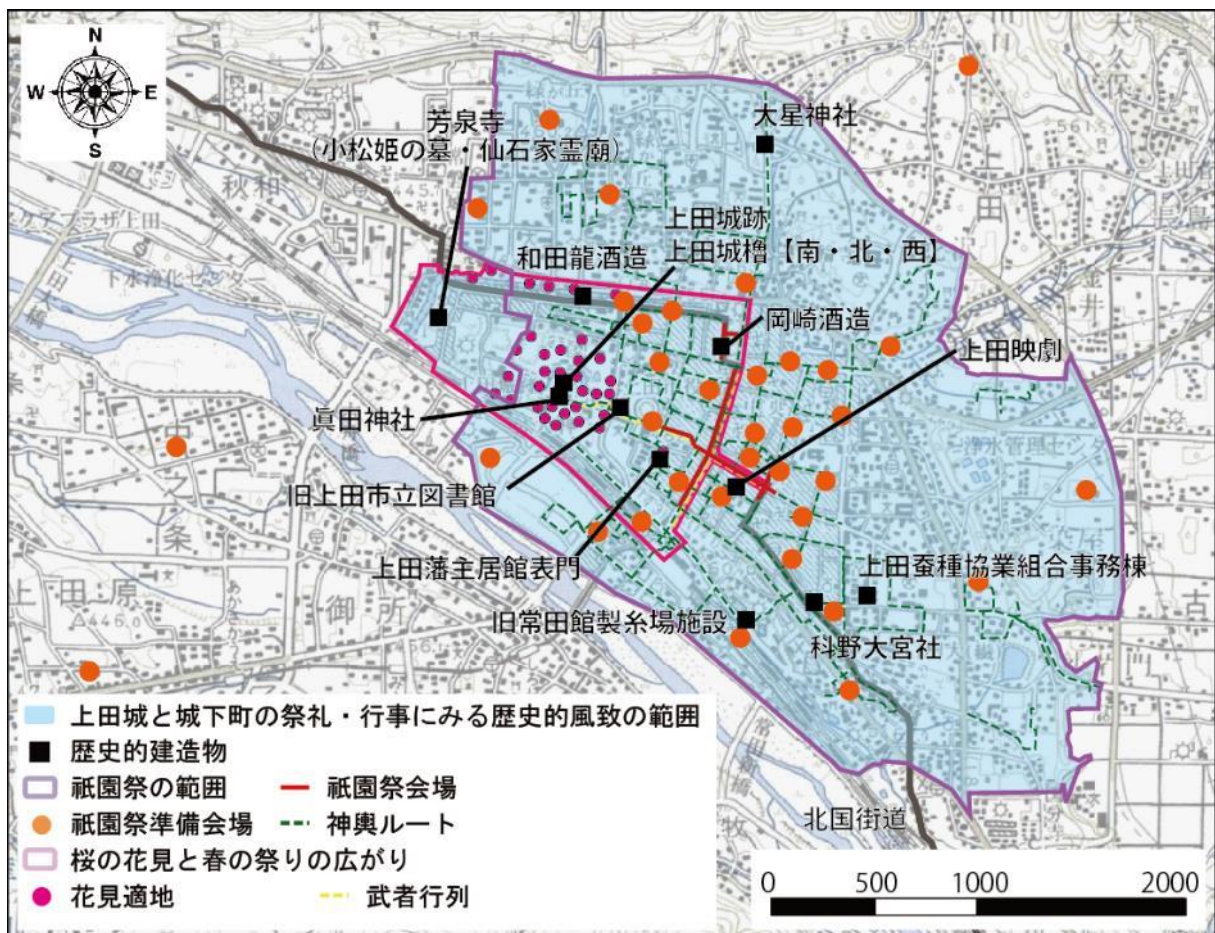
桜の花見と春の祭りの広がり

エ. 上田城と城下町のまとめ

中央地域は中世以降上田城の城下町として発展し、近世後期から近代になると主力産業であった蚕業の一大産地の中心地としてさらに発展した。その結果、城下町としての情景を残しつつも、蚕業関連をはじめとした近代的な建築物が重なる独特な町並みが形成された。そのような町並みのなかを、市民が声を上げながら神輿を担いで練り歩く大変賑やかな祇園祭は、城下町として発展した時代から現在までの、上田城下町の歴史を感じさせる。

また、春には桜が咲き誇る城跡公園や矢出沢川沿いを巡り花見を楽しむ市民や、上田城を築城したとされる真田氏ゆかりの地を楽しむ観光客など、周辺の歴史的資源を歩いて巡る人々の様子もみられる。上田城跡公園は、古くから人々に親しまれる公園であり、上田を代表する施設の一つである。

祇園祭と花見、いずれも古くから根付いた営みであり、周辺の歴史的な建造物や町並みと一体となり、上田城と城下町を象徴する歴史的風致を形成している。



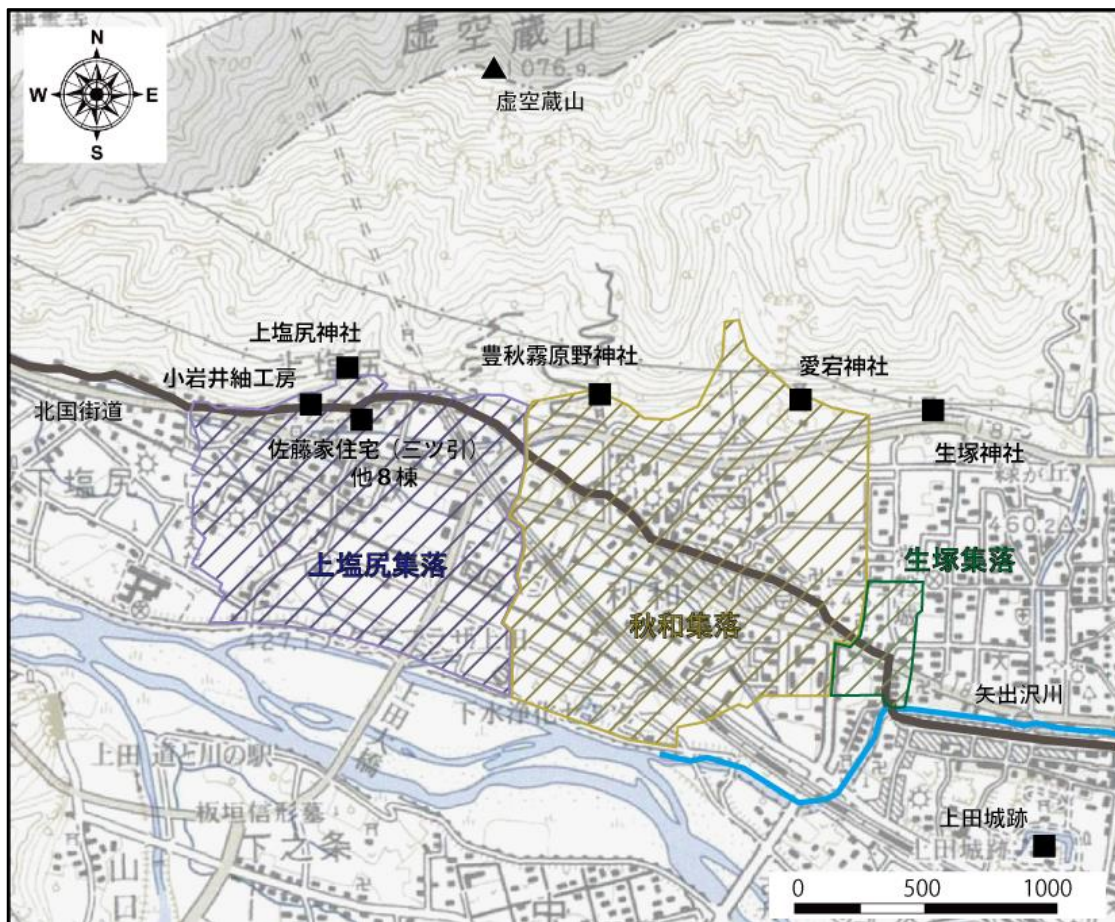
上田城と城下町の祭礼・行事にみる歴史的風致

(2) 城下町周辺集落

ア. 周辺集落の概要

北国街道に沿って城下町地区の西側に続く生塚・秋和の集落は、古代の条里的遺構が残る田園内へ「城下圃の村」として移住させられ街道（のちの北国街道）沿いに街村を形成した。また、上塩尻集落は江戸期に上田宿の助郷村として上田宿場町を支えた。これらの集落は北国街道を介した交易、養蚕・蚕種製造の振興とともに発展してきた。

以下に各集落について記述する。



周辺集落の位置と広がり

イ. 生塚集落の営み

古くは虚空蔵山の山際にある生塚神社周辺に居住し、山裾から南側に広がる条里的遺構が残る農村集落であった。慶長年間（1596～1615）に上田城築城後の城下圃として矢出沢川沿いの地へ移転させられた。その後、北国街道の整備・発展とともに沿道一带に住居や一部商家が形成され、発展してきた。集落には養蚕家屋も点在しており、上塩尻集落で盛んであった養蚕の広がりがみられる。街村集落から山際に鎮座する生塚神社まで長い参道があり、氏子により例祭が行われている。



生塚集落

(ア) 歴史的風致を形成する建造物
生塚神社 (未指定)

古くから生塚集落の産土神社であり、虚空蔵山の山際に位置する。昭和 30 年代に生塚自治会から常磐町自治会が分離・発足したことで、生塚自治会と神社とは飛び地の位置関係になったが、その後も生塚自治会住民からなる総代会で管理されている。明治 28 年 (1895) の「生塚神社取調書」に江戸時代の初めに本殿を修復した形跡があると記録されているが、享保 19 年 (1734) の本殿建替時の棟



生塚神社

札やその後の修復歴を記した棟札が本殿に残されていることから、江戸中期に建て替えられたものが現存すると推定される。祭神は諏訪社大己貴命と建御名方神とされ、春・秋の年 2 回の例祭ほか、鳥追い行事の神事が毎年行われている。

(イ) 歴史的風致を形成する活動

鳥追い御幣

五穀豊穰を願って行われる行事で小正月に行われる。生塚神社で祈祷した御幣をもって集落を練り歩き、各所で「鳥追い唄」をうたいながら御幣を振る。最後には集落の公園（西部公園）で御幣を振り、どんど焼きの大火のなかへ御幣を投入して焚き上げる。なお、練り歩きは3年に1度行われ、それ以外の年は西部公園で鳥追い唄をうたい、御幣を振る。

開催の1週間ほど前から、御幣づくりや繭玉まゆたまづくりが行われ、子供から大人まで集まり準備される。御幣は、各家庭でまつたお札を材料に製作しており、これを振ることで悪行や悪魔の神、疫病が退散するものとされていた。しかし、現在では、御幣を製作するために十分な数のお札を地域内で集めることが難しいことから、一部に障子紙を利用したものへと変化している。

昭和12年（1937）1月16日に発行された報知新聞の長野版に当時の様子や御幣の写真が記述・掲載されているほか、地域住民のもとには、生塚自治会館で大きさ2間半（約455cm）ほどの御幣を振る人と、それを囲う住民の姿が確認できる写真が残っている。この行事は江戸時代にはじまり、明治時代に盛んに行われていたと言われる。前述の新聞記事には明治40年（1907）ごろに中止となり、昭和12年（1937）に30年ぶりに再会した旨が記載されている。その後の記録はなく再び中止となったが、昭和60年（1985）ごろ、鳥追い御幣を経験した人々から復活を望む声上がり、経験者からの聞き取りなど3年間の調査や研究を経て平成元年（1989）に再開した。現在は「鳥追い御幣保存会」によって御幣の作り方や振り方、鳥追い唄などが承継されている。

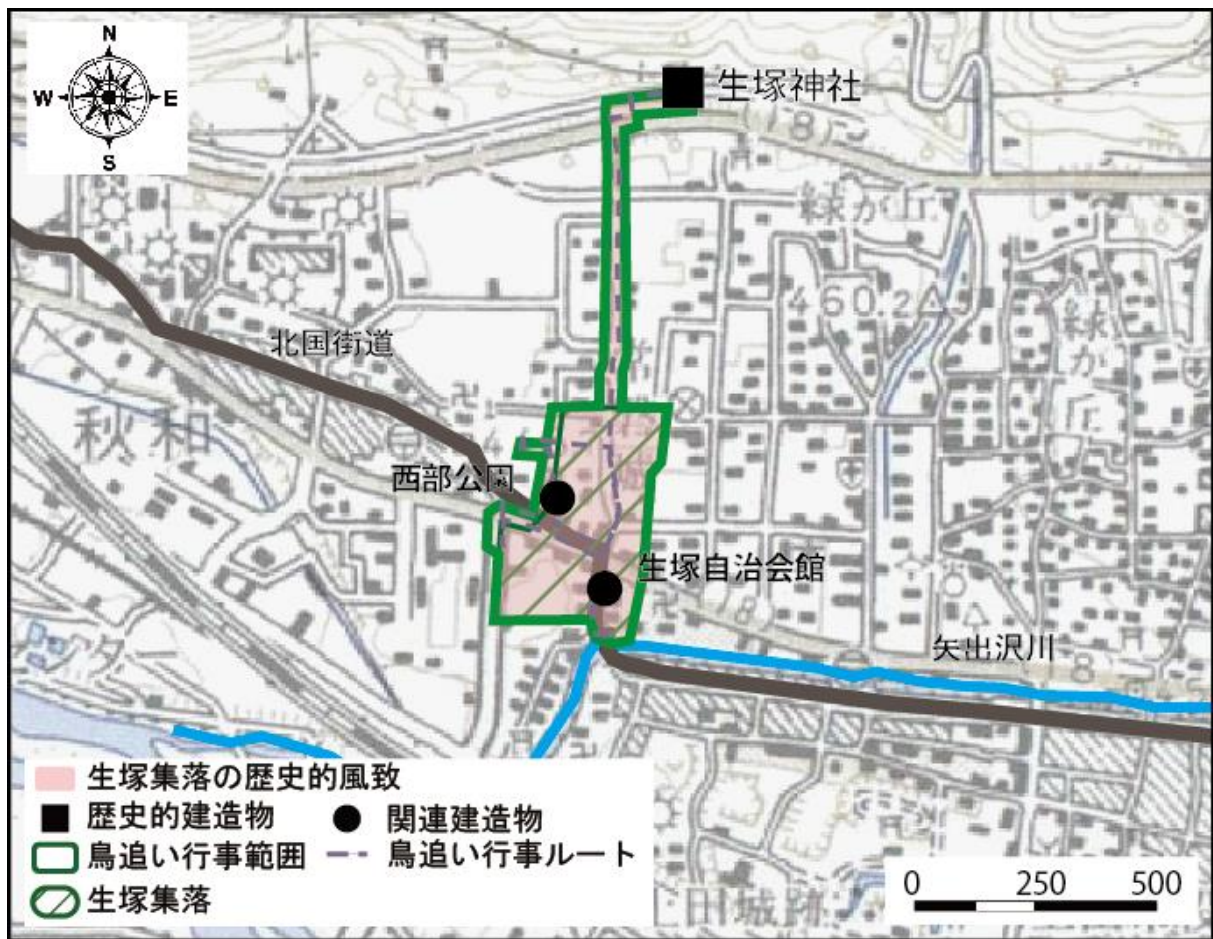
鳥追い唄が響く歴史的な住居や商家の間を、御幣をもって練り歩く様子は地域の伝統を深く感じさせる。



練り歩きの様子



公園での御幣振り



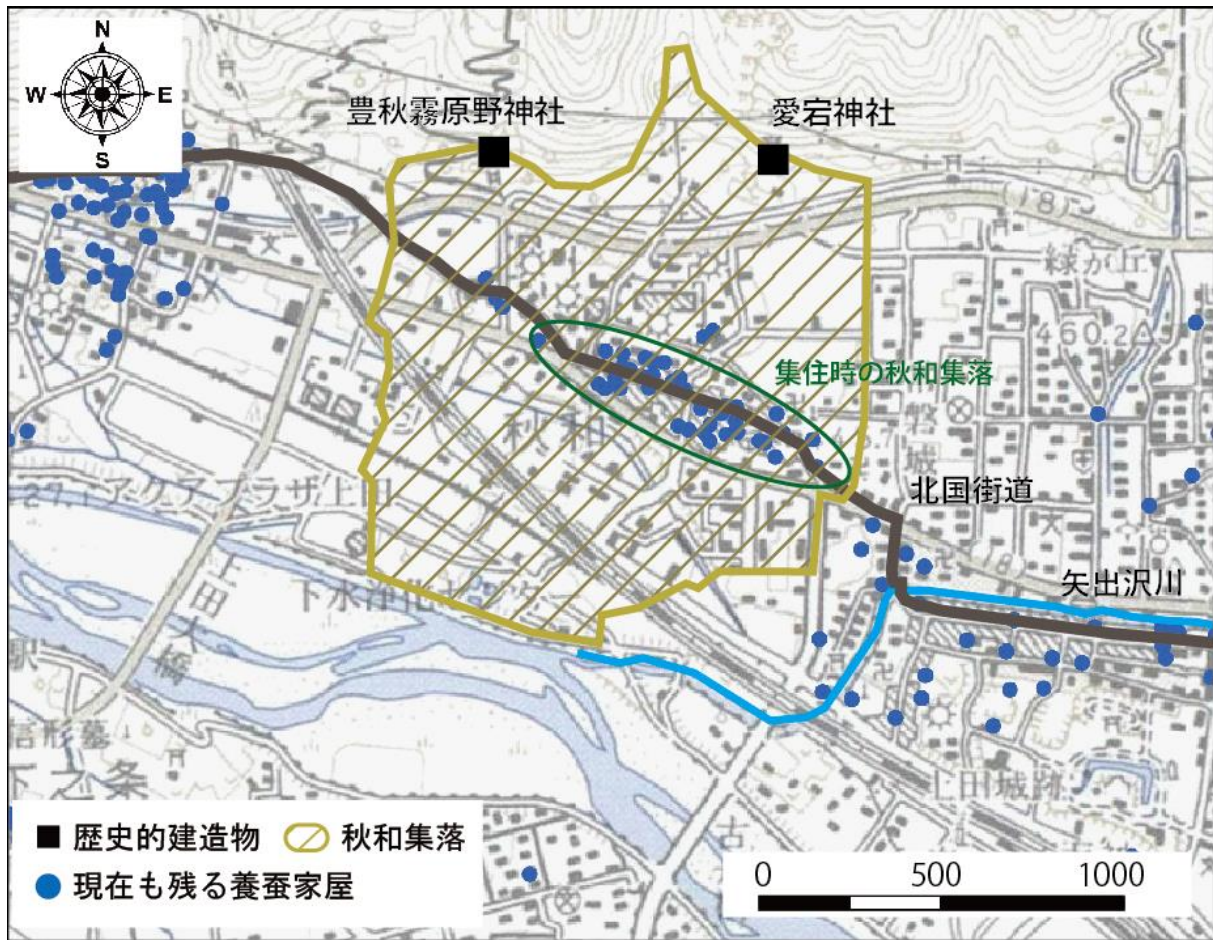
生塚集落の歴史的風致の範囲

ウ. 秋和集落の営み

中世以前は豊秋霧原野神社や愛宕神社が位置する山麓部から、千曲川に近い低地にかけ広い範囲で集落が形成されていたと考えられているが、真田氏により上田城が築城されると、「城下囲の村」として、生塚集落西側へ太郎山山麓から移住させられ街村を形成した。のちの北国街道が集落の中心を通り、城下町への入口を表す杉並木もあったが、現在では台風により倒れた一本の幹の一部が残される。

江戸後期以降は、西側に位置する塩尻集落で蚕種業が盛んとなり、秋和集落にも広がりを見せたため、養蚕家屋が多く軒を連ね、その様子が地元の蚕種業者滝沢秋暁の小説「司令塔」(明治41年(1908))に書かれている。現在では大部分が失われ、残存数が少ないものの、水路や町割りなど近世の雰囲気を残す部分も多い。現在は山麓部から千曲川の岸辺まで広がり、秋和集落を形成している。

そのほか、近年では集落の西側で民間による区画整理事業、南側には卸団地が立地するなどの発展もみられる。



秋和集落

(ア) 歴史的風致を形成する建造物

① 豊秋霧原野神社 (未指定)

集落の北端の山際に位置し5世紀末と言われる市内最古の大蔵京古墳に隣接して建つ旧秋和村の産土社である。祭神は神功皇后、応神天皇、仁徳天皇で、文久3年(1863)に八幡社から現在名に改名したが、現在でも「お八幡さん」の名で親しまれている。現在の本殿は棟札から、天明6年(1786)に建立されたものとわかる。



豊秋霧原野神社

境内に秋和集落内の各所に点在していた社を集めた合社堂がある。

② 愛宕神社（未指定）

集落にある正福寺が別当として管理していた「愛宕堂」が、明治期の神仏分離令によって当時の秋和村に譲渡され神社となり、住民によって参道や石段などが整備された。

火伏（防火）の神であり、秋和集落が属する消防団は出初式に出発する前にまず愛宕神社で梯子登りを奉納し、その年の火災防止を祈願する。境内東側には養蚕の繁栄を願い上塩尻の座摩神社から分祀した蚕影神社を祀っている。社殿の築造年は明らかで



愛宕神社

はないが、宝永2年（1705）秋和村寄進と刻まれた一対の石灯籠があり、同年名の秋和指出帳に「寺山・あたご堂」との記載もあることから、そのころと推定される。

（イ）歴史的風致を形成する活動

① 豊秋霧原野神社の例祭

例年9月15日に、五穀豊穰、病気や災難除け、生活の安定を願い、氏子総代、伍長（隣組の長）ほか自治会役員総勢30人ほどが集まり行われる。前日の14日の朝から神社の清掃や参道へ幟が建てられる。当日、祭り参列者は10時前に秋和自治会館に集まり、総代長を先頭に、宮司、総代の2人、自治会長、自治会長代理、伍長（隣組の長）、関係者の順に、五色の旗や紅白の旗、日月の旗を掲げ、旧北国街道と集落内の参道を豊秋霧原野神社まで行列する。拝殿で神事を行い、その場において直会が催される。五色の旗を掲げ集落と田園のなかを進む行列は、秋を感じさせる昔ながらの光景として、今もなお地域住民に親しまれている。



秋和集落内での祭礼行列

昭和9年（1934）の『塩尻時報』には例祭にあわせて行われていた余興等も時節柄自粛するとの記載があり、以降はにぎやかな催事は少なくなっていたようである。行列のほか豊秋霧原野神社のお札の配布がなされており、伍長が家々を訪れる様子がみられる。

② 愛宕神社の例祭

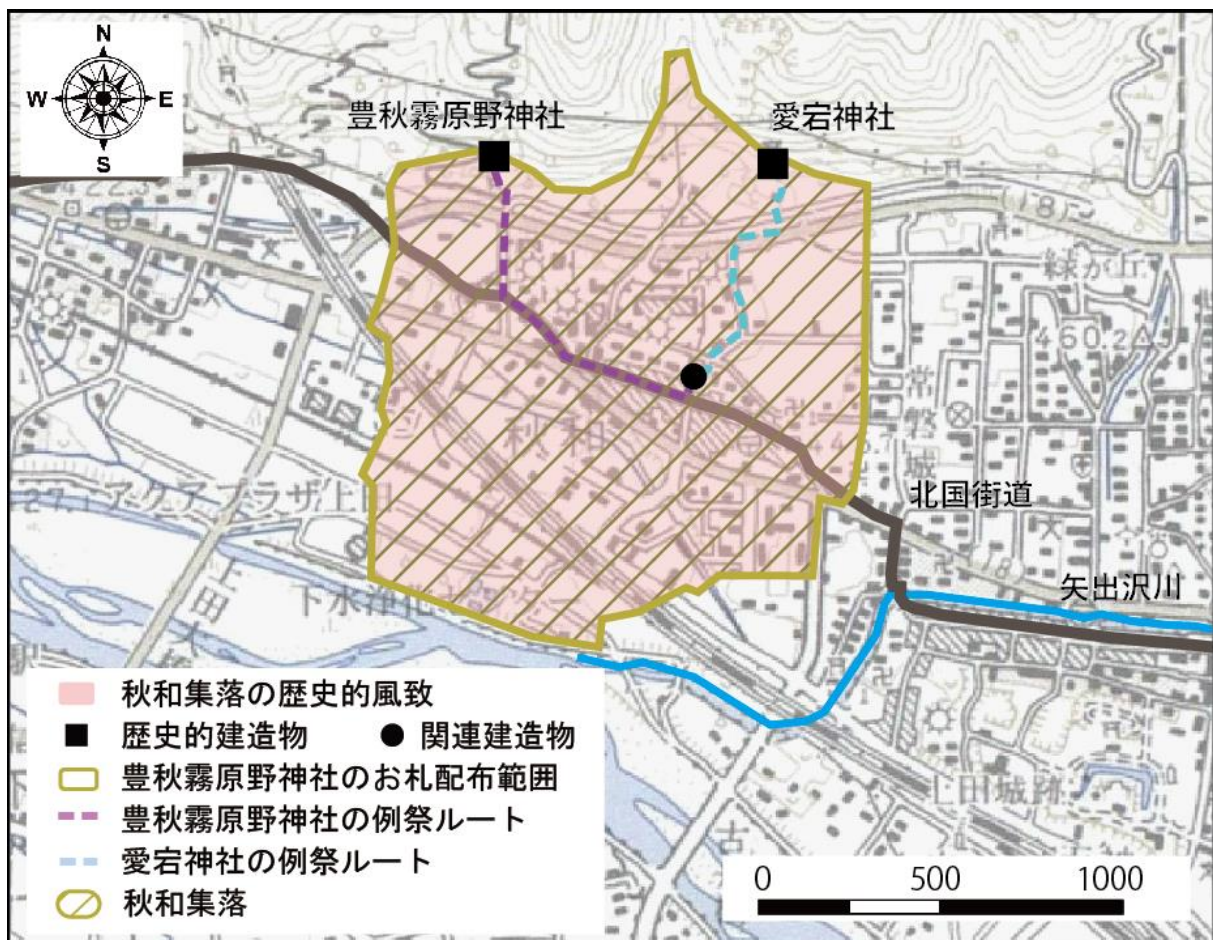
毎年4月24日に行われる。前日にお宮掃除や幟立てなどの祭典準備が氏子や自治会の当番役員により行われる。当日は総代、自治会長、伍長(隣組の長)などの関係者が秋和自治会館に集まり、そこから愛宕神社までの集落内の道を列になって進む。神社拝殿では地域の五穀豊穰と1年の平穏を祈願する。



愛宕神社の神事
(蚕影神社の前にて)

大正12年(1923)の『塩尻時報』によれば、踊り大会や相撲大会などが行われていたと記されており、太平洋戦争末期までは行われていたようである。

例祭に合わせて愛宕神社のお札を総代たちが刷り上げ、秋和集落の希望者の家々を訪れて配布しており、集落全体で地域の平穏を願う風習を継続している。



秋和集落の歴史的風致の範囲

エ. 上塩尻集落の営み

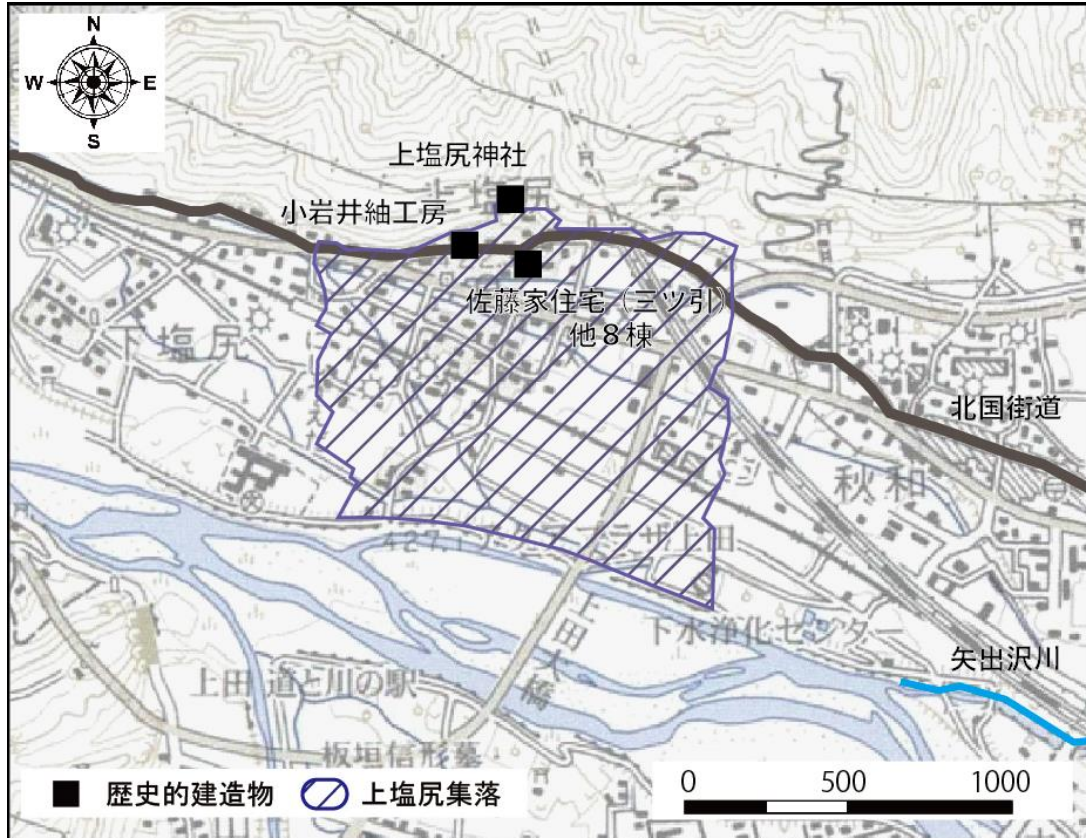
上塩尻集落は千曲川に近い微高地に形成されていたが、千曲川の氾濫によりたびたび被害を受け、中世後期に北側の山際へ移転したと考えられている。近世に北国街道が整備されると、上田宿の助郷村を担うようになった。

また、集落は高地に移転したものの、耕作地は千曲川に近い場所が多く、氾濫により耕作不可地となることも多かったが、病害に強い桑の栽培適地であったことから、近世中期以降は養蚕や蚕種製造が盛んとなり、幕末には一大産地へと発展する。

19世紀以降は、蚕種の製造に適した造りの家屋（養蚕家屋）が建てられるようになる。気抜きと呼ばれる越屋根を伴う切妻屋根、大壁、窓が大きくとられた総二階を特徴とする家屋が明治期には集落全体に広がり、現在でも北国街道の両側に良好な状態で残っている。さらにこの集落では狭い斜面に広い養蚕家屋を建てるため、背後の太郎山系から切り出したと思われる緑色凝灰岩（一説には流紋岩）による、美しい反りのある石垣が多くみられる。養蚕家屋と調和して独特の風景を作り出している。



上塩尻集落の石垣



上塩尻集落

(ア) 歴史的風致を形成する建造物

① 上塩尻神社 (未指定)

奈良時代に集落南側の千曲川に近い位置(元宿)に小碓の国造他田舎人大嶋により諏訪大明神を祭神として創建されたといわれる。その後文禄4年(1595)の大洪水によって流出したのち、宝永6年(1709)に宮として集落北側の高台・山際の現在地に再建される。



上塩尻神社

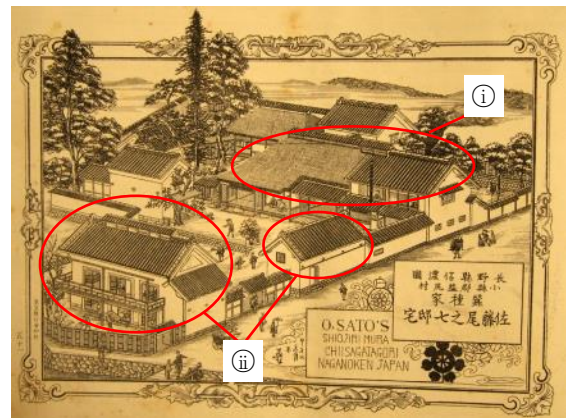
拝殿の天井部に現存する寄進者名板より、寛政3年(1791)に本殿こけらの葺き替えと瑞垣、拝殿が整備され、嘉永5年(1852)に祝詞殿が増築されたことがわかり、その度に上塩尻村民の寄進と労務奉仕があった。また、本殿の両側面には見事な龍の彫刻が施されており、安永9年(1780)と書かれた奉納絵馬や一對の灯籠(安政6年(1859))が残されているほか、境内には他田舎人大嶋が天平勝宝7年(755)に防人として九州に派遣される途上で読んだとされる万葉歌碑が建っている。

② 佐藤家住宅 (三ツ引) (他8棟(国の登録有形文化財 令和3年(2021)))

佐藤家は、代々蚕種業を営んだ旧佐藤宗家(一時期「藤本」を名乗った佐藤の本家)から分家した家系である。佐藤家も代々蚕種業を営み、現在残る住宅は、文化財登録原簿への登録に係る調査によって江戸時代後期から明治期にかけて建てられたものと考えられている。気抜きを持つ主屋(①、江戸時代後期。明治期改築)や2棟の蚕室(②、江戸末期、明治中期)、穀蔵(明治30年)、味噌蔵(明治後期)、文庫蔵(明治31年)の他、蚕具等を消毒したといわれる消毒蔵(明治後期)といった珍しい設備が残されており、当時の大規模蚕種家の住宅がほぼ当時のまま残されている。



佐藤家住宅



日本博覧図 佐藤尾之七邸宅
(明治20年(1887))

③ 小岩井紬工房（未指定）

上塩尻の養蚕家屋群の一角・旧北国街道沿いに位置しており、江戸時代初期に庄屋を勤め、中期から後期までは養蚕業を営み、その後、明治初期に織元となり、昭和23年（1948）に上田紬工房を創業。棟木に明治28年（1895）と墨書された明治期の土蔵を利用し工房をかまえるなど、周囲の養蚕家屋群の景観に溶け込む風情あるつくりとなっている。



小岩井紬工房

(イ) 歴史的風致を形成する活動

① 上塩尻神社の例祭

上塩尻神社の例祭は、集落の平穏と五穀豊穰、住民の無病息災を願い毎年秋の9月に行われる。大正9年（1920）の『塩尻時報』には、草相撲が催されたこと、大正12年（1923）の『塩尻時報』には、8月実施であったものを神社規定により1ヵ月遅れの9月に行うことが記録されるなど、古くから神社総代役員を中心に例祭が続けられている。



祭礼当日の北国街道（祭典の幟と日の丸）

出典：塩尻地区写真集・20世紀の歩み

現在は屋台などのにぎやかな催事は行

われなくなっているが、総代ほか住民代表役員（部長）が出席のもと、集落や子供たちの安心と安全を願う取組として、神事やお札配布の風習は引き続き行われている。お札は上塩尻集落全体へ配布されており、祭りの時期には役員が佐藤家住宅に代表される養蚕家屋の間を歩きながら家々を訪れる様子がみられる。また、周辺に駐車場がないことから、集落の南側など、上塩尻神社から比較的遠い位置に居住する人々も歩いて神社を訪れるため、上塩尻神社の周辺では、ひときわ賑わいをみせる。例祭はかつて27日と決まっていたが、現在は敬老の日（国民の祝日）に行われる。

② 上塩尻集落における上田紬の営み

「紬」は生糸に適さない屑繭を真綿状にしたものから紡いだ紬糸で織られた紬織物をいう。古くから養蚕業が盛んだった上田では、農家の自家用として紬が織られるようになった。上田紬が有名になりはじめたのは、塩尻地区などで蚕種の製造が開始された万治3年（1660）ごろからといわれ、蚕種の副産物として大量に生まれた出殻繭から良質な紬糸がとれたことで発展した。戦後、木綿・化学

繊維を主とする洋装の普及により紬の需要は減少したが、上田紬は絹織物として透湿性・保温性を有し、素朴でありながら多彩な柄をもつことから愛好家もあり、今も一定数の需要がある。

現在上塩尻で上田紬を製造する小岩井紬工房は、かつて蚕種製造を生業としていたが、戦後金井章次氏の指導を受け、昭和23年(1948)から手織りの上田紬の製造をはじめた。昭和40年代に撮影された写真には手織りを指導し、学ぶ様子が写っており、その当時から現在まで手織り製造にこだわり続けている。旧北国街道の通りに開けた工房の間口からは、木製の織機がすれる音がかすかに聞こえ、通りを往来する地域住民にとってかつて蚕種で栄えた塩尻地区の歴史のつながりを感じる特別な存在となっている。

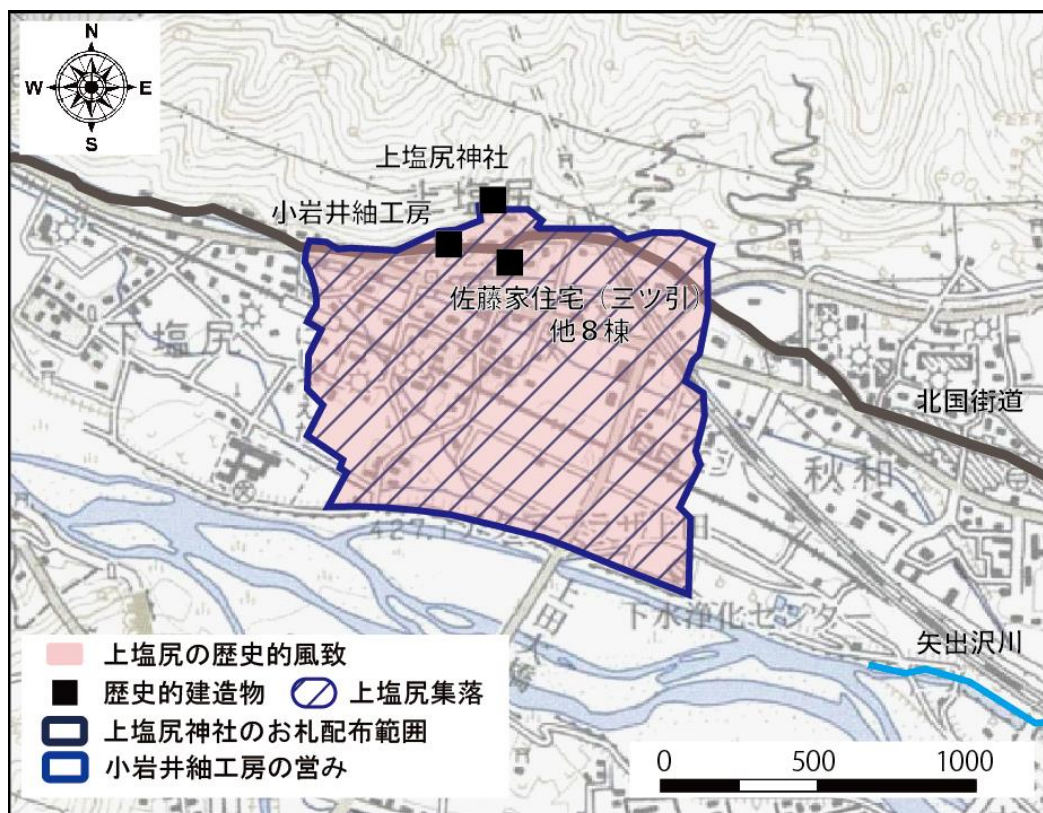
また、週末を中心に工房見学や直売品目当てに訪れるお客が出入りする姿が見受けられ、蚕都上田の繁栄をしのばせる象徴的な工房である。



上田紬の手織り



受け継がれてきた上田紬



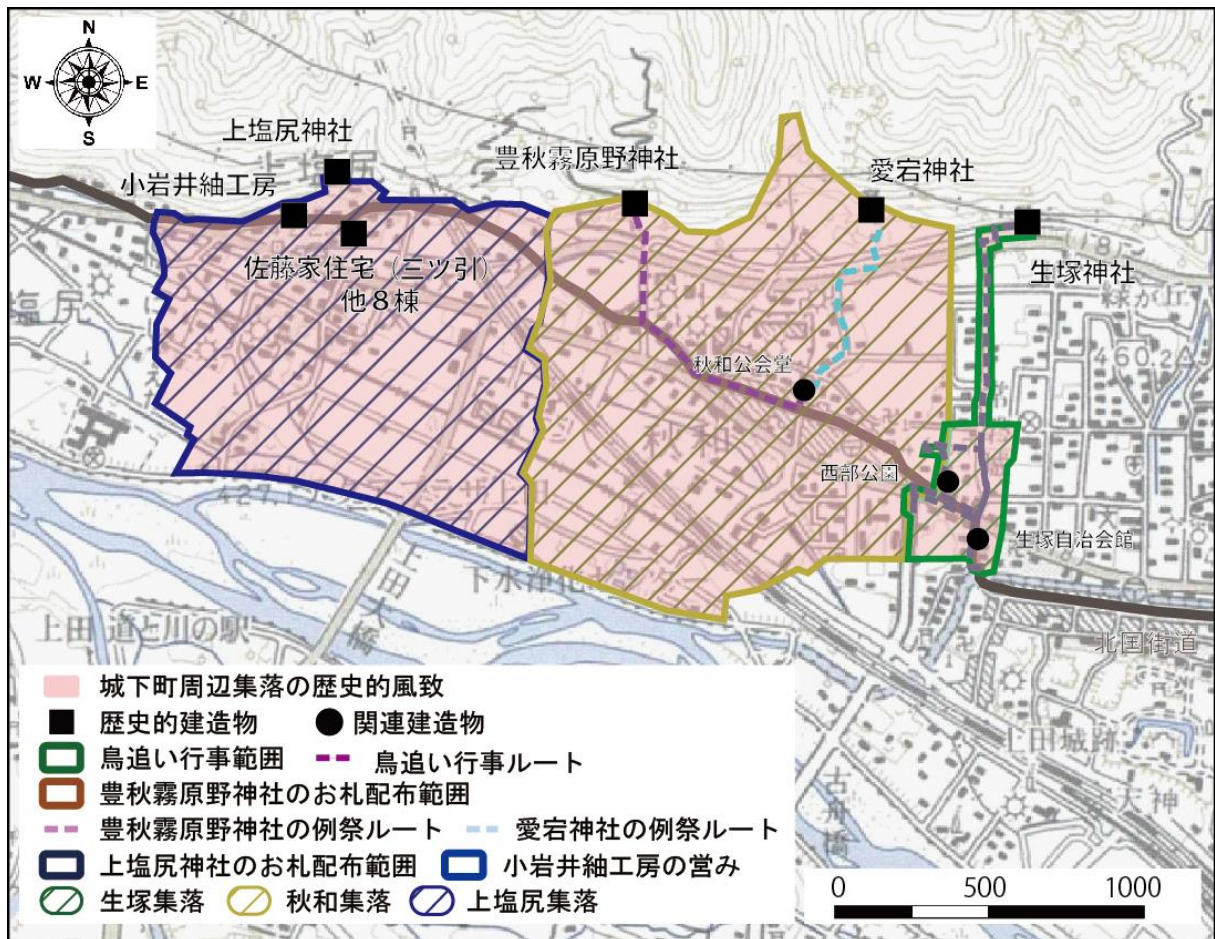
上塩尻集落の歴史的風致の範囲

オ. 城下町周辺集落のまとめ

生塚、秋和、上塩尻集落など城下西方の集落は、中世から農村であるが、生塚・秋和集落は、上田城築城や北国街道整備に伴って虚空蔵山麓から移住させられて街村を形成し、町割りが行われ、街道を維持する役目を負うようになる。

近世中期以降、上塩尻集落で蚕種業が盛んになると、秋和・生塚集落へも蚕種業が広がり、佐藤家住宅のように多くの養蚕家屋が建てられた。元々の生業である農業を守りながらも時代により様々な役割を果たしてきた周辺集落だが、生塚神社や豊秋霧原野神社、上塩尻神社の例祭等は脈々と受け継がれ、現在でも地域の神社を舞台に行われている。例祭等に合わせて行われるお札の配布や行列では、養蚕家屋や商家の間をお札や幟を手にとって歩く姿がみられる。

街村・蚕種業の面影を残す集落において、古くから続く伝統的祭礼を集落全体で守り続けている営みは、上田市特有の歴史的風致である。



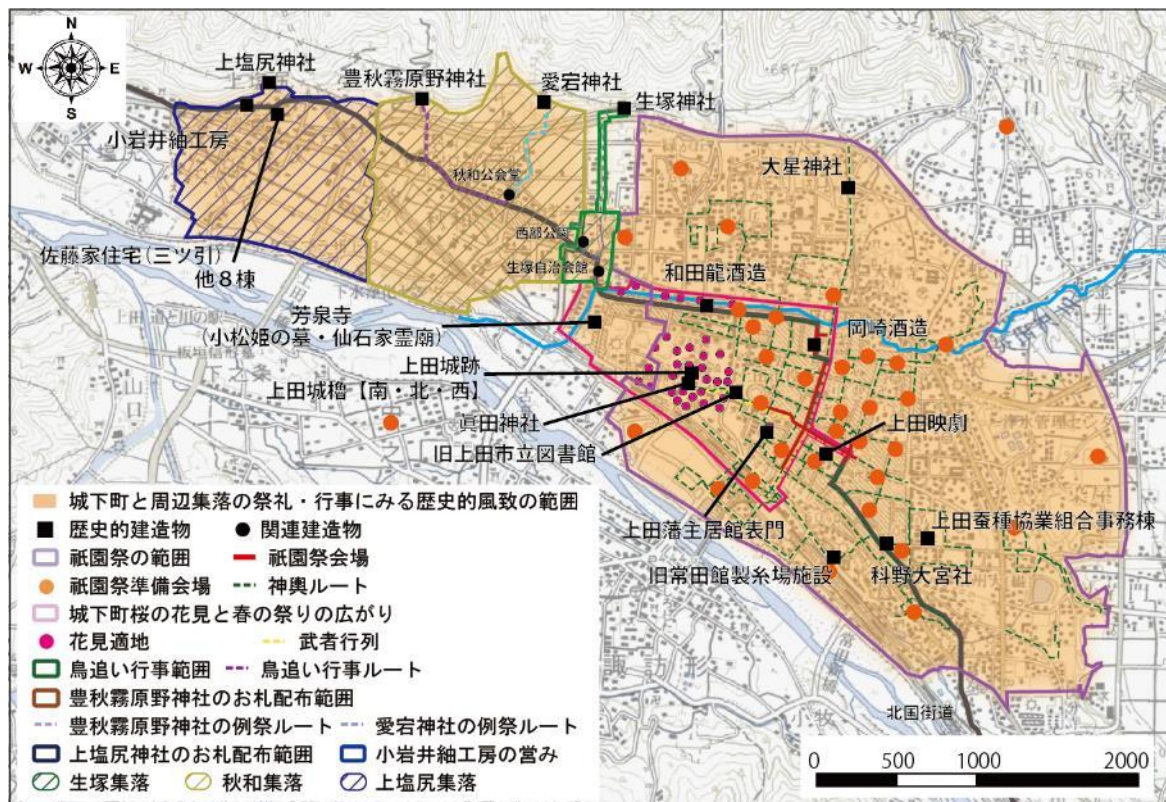
城下町周辺集落の祭礼・行事にみる歴史的風致

おわりに

中世後期の上田城築城から近世初期にかけて、城下町が整備され、現在の町並みの基礎が築かれた。城下町の出入口には道に沿って城下囲いの8ヶ村も整えられ、北国街道上田宿が置かれると、城下囲いの村も含めた周辺の集落は助郷として支えた。

近世中期から塩尻地区を中心に蚕種製造などの蚕業が盛んになると、周辺集落には養蚕家屋が建ち並び、さらに近代になって城下町には関連した商業・工業・物流・教育・研究機関が集積し、これまでにない繁栄を見せ、先進的な建築物が建てられた。

そういったなかでも、住民は古くからの祭礼を時代とともに形を変えながら現在まで受け継いでいる。城下町、街道沿いの宿場、蚕業といった様々な要素が重なり合った町並みに、古くから伝えられた祭りが行われる光景は、この地域特有の歴史的風致である。



城下町と周辺集落の祭礼・行事にみる歴史的風致の範囲

コラム：蚕都上田の繁栄

上田市の名産「上田紬」は、蚕種の製造過程で出る大量の出殻繭を利用して、真綿をつくり、そこから糸を紡ぎ、織り上げた布である。また、生糸を使った織物上田縞は江戸時代中期には江戸、京都、大坂などに広く流通した。江戸中期までの蚕種業に関しては、奥州福島しんたつの信達地方が本場となっていたが、信達地方とほぼ同じ気象条件をもつ上田盆地にも蚕種業が広まり、幕末には全国一の産地となった。

蚕種の製造においては、蠶蛆きょうそ（カイコノウジバエの幼虫）のいない蚕であることがもっとも重要である。この蚕の飼育には歩桑よくわとよばれる桑が最適で、千曲川の氾濫原や虚空蔵山から山口扇状地にかけての石や岩が積み重なったガレ地、特に西部地域の塩尻地区でよく育った。加えて小雨という上田盆地の自然条件を最大限に利用して、蚕種業が発展した。

明治以降は器械製糸が普及し、生糸を大量に生産した。上田は最盛期に 1,500 釜以上を擁し、県内では岡谷・須坂・松本・小諸などととも製糸都市として繁栄した。上田市域では、丸子地域依田川水系の良好な水質が製糸に向いていたため、製糸工場の集積地となった。なかでも依田社よだしゃでは大正期に、生糸の輸出先であるアメリカに向けた英語版PR映画と、女子工員を集めるための会社のデモンストレーション映画を、アメリカ人映画技師を招いて製作している。これらは当時の製糸工場の繁栄を伝えるばかりでなく、現存する最古のPRフィルムとして価値が高い。



依田社

明治 10 年代(1877～)には信濃銀行・塩尻銀行・神川銀行・保全会社塩田銀行などが続々と設立され、小県郡ちいさがたぐんの金融機関は明治 17 年(1884)時点で県下第 1 位の 83 社を数えた。県内銀行の実に 7 割が集中したことをみても、上田・小県郡の蚕糸業や商業が他の地区に比べ非常に活発だったことが分かる。

蚕は「お蚕さま」と呼ばれ、神として信仰され、祀る神社や遺跡も数多く残る。塩尻地区の座摩神社や別所地区の三島神社、富士山地区の猫山観音などが蚕の神として信奉されている。なかでも神科・豊殿地域小井田にある蚕影神社こかげ拜殿には、蚕を飼育する藁で編んだ「円座（いっつあ）」※が大量に奉納されている。また、真田町傍陽の三島神社にも「三島神社の円座（いっつあ）」※がある。



三島神社の円座（いっつあ）

※それぞれの文化財指定の名称により表記が異なる。

昭和16年(1941)には、上小蚕糸業同盟会が蚕養こがいの国神社を上田大星神社の摂社として造営をし、以来現在まで、関係者によって例年蚕糸祭が開かれている。

全国で栄えた蚕糸業だが、上田では教育と研究が重視された。明治25年(1892)郡立小県蚕業学校が設立された。ここでは養蚕の実地教育に力を入れ、地域の養蚕業の技術向上に大きな役割を果たした。また、蚕糸業発展の人材育成に大きく貢献し、全国から集まった生徒たちは、修学後は郷里や国外で活躍して養蚕の発展に尽くした。さらに明治44年(1911)、わが国で唯一の蚕糸学の国立専門学校である上田蚕糸専門学校が設立され、教育と蚕業に関する研究が行われ、蚕糸関係を中心とする技術革新が進められた。こうした学校の設立・誘致には、地域住民や産業界、議会・行政の尽力があった。

さらに明治21年(1888)には国営の信越本線が開業し、明治29年(1896)に大屋停車場(現しなの鉄道大屋駅)、大正9年(1920)に北塩尻駅(現しなの鉄道西上田駅)が請願駅として開設した。養蚕製糸業の物流の拠点となり、蚕業製品が世界へと輸出され、近代化は一気に進んだ。こうした産・学・官の連携による蚕糸業の発展は、近代の上田の大きな特徴である。

昭和恐慌を契機に蚕糸業は衰退し、製糸業は昭和59年(1984)に、養蚕業は平成11年(1999)に終焉を迎える。しかし、蚕都繁栄の証として、旧常田館製糸場施設をはじめ、養蚕家屋群や風穴・駅舎などの近代建築等が市内の至る所に見られるばかりか、上田蚕種協業組合では現在もなお蚕種製造が続けられる。上田蚕糸専門学校は信州大学繊維学部へと発展し、新たなファイバー技術により最先端の研究を続けている。



蚕養国神社



大屋駅



氷沢風穴



繊維学部講堂

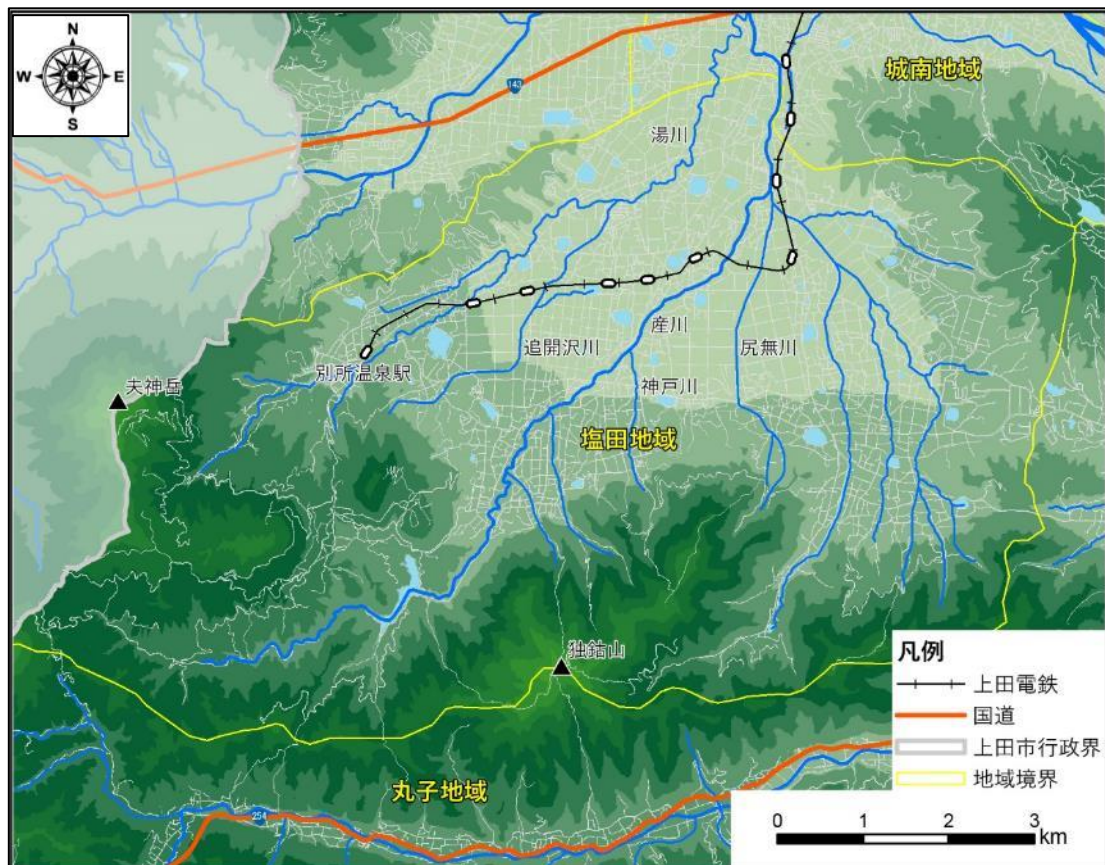
2-2. 塩田地域のため池群と神社仏閣にみる歴史的風致

はじめに

塩田地域は、上田市の西部に位置し、東の小牧山塊、南の独鈷山塊、西の夫神山塊の盆地状で北に開ける。千曲川支流の産川等の河川により形成された扇状地と、河岸段丘の平坦地で、塩田平と呼ばれる。周囲の山塊は 1,200m 級と低く水源に恵まれないうえ、年間降水量は 900mm 程度の、全国的にも有数の少雨地域である上田市の中でも特に雨の少ない地域である。



塩田地域の位置



塩田地域周辺の地形

塩田地域は、江戸時代に上田藩により塩田三万石といわれるほどの穀倉地であった。それは、ため池灌漑の土木技術とその運営慣行により作り出された。900haの水田のほか、長野県では珍しく大小合わせて100ヶ所以上のため池がみられる風景は、先人の知恵と努力によって自然条件を克服し築きあげた農業景観である。

また塩田地域には、古くから数多くの神社仏閣が建立され、「信州の学海」と称される文化が形成されていた。これらの神社仏閣は川の源流や、山から水が湧き出てくる場所への立地が目立っており、神社仏閣とともに水も信仰の対象となっていたことが推察される。

良質な土壌だが水不足の問題を抱える塩田地域は、古くは神社仏閣による信仰、土木技術の発達した江戸時代以降は、ため池を築造することにより、水不足に対応していたことが、現在まで残された姿からわかる。塩田平はその特徴的な風土とあいまって、ため池と寺社が織り成す特徴的な景観を形成している。



安楽寺八角三重塔



塩田平の風景

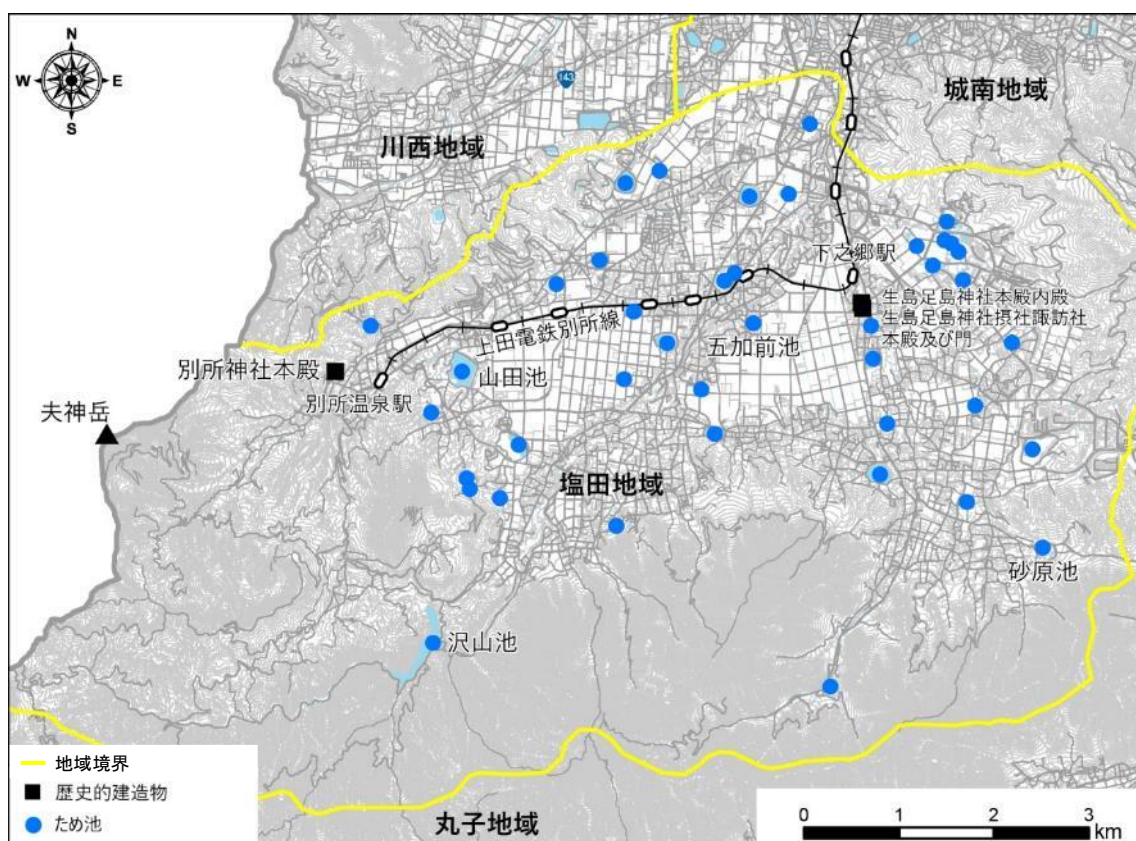
(1) ため池による水の確保と稲作

少雨という自然条件を、ため池の築造を中心とした農業灌漑によって克服してきた塩田地域において、ため池は水利慣行とともに地域各所でみられ、大切な財産である。これらは、周辺の集落、田園、山々と一体となり塩田地域の特徴的な景観を形成している。また、ため池は灌漑設備としての利用だけにとどまらず、子供たちの遊び場や鯉の養殖場、雨乞いの舞台としても利用されてきた。堤の緑は住民により管理され、池にはマダラヤンマが繁殖し、コウノトリが飛来するなど命を育む場でもある。



五加前池と塩田平の風景

このように、ため池群には塩田地域の自然・歴史・風習が息づいている。



塩田地域（ため池による水の確保と稲作）

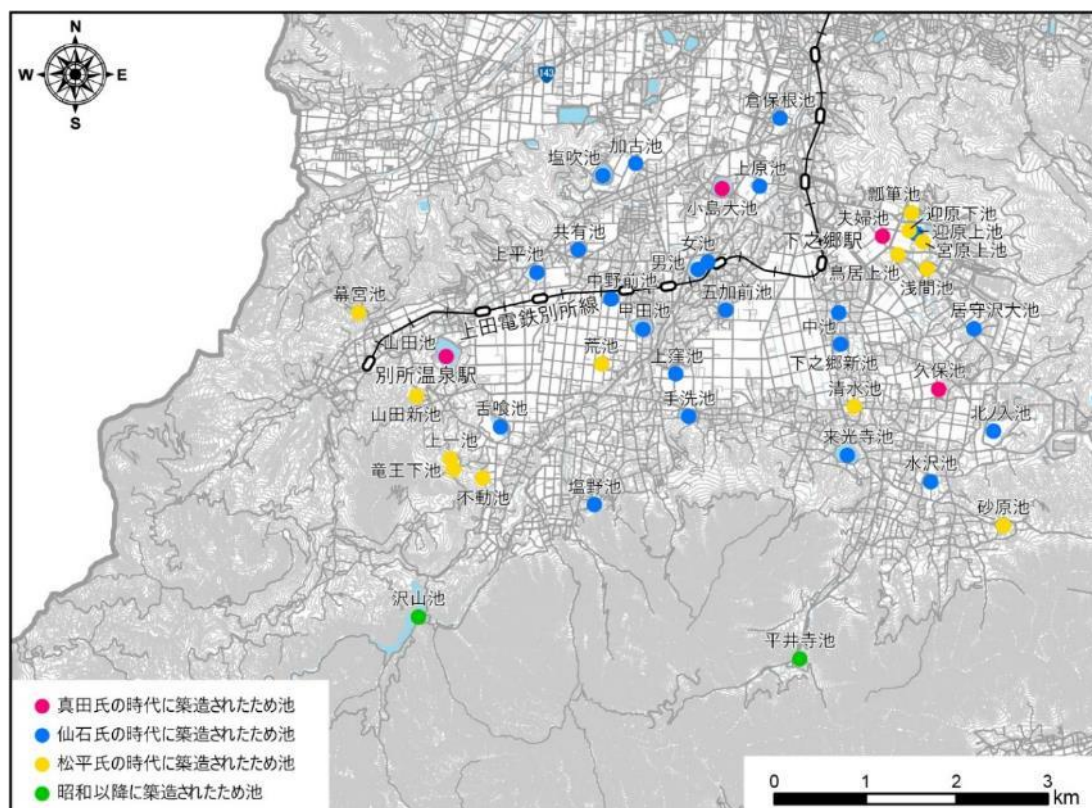
ア. 塩田地域のため池の歴史

塩田地域は古来より、農業集落が発展してきた地であった。寡雨という気象条件は、一方で洪水などの水害が少ないという利点があり、ため池築造用の良質な粘土質の土壌であったこととあわせ、水田農業により繁栄したことがわかる。この地域には平安時代に形成されたとみられる条里地割が広く残っており、そのころにはすでに稲作が行われており、水源確保の観点からかなりの規模のため池が開かれていたと推定されている。

ため池の築造が史料に残るのは戦国時代末期の真田氏以降であり、真田氏時代には山田池や舌喰池などが、築造または修築された。

仙石氏が上田藩主であった時代の元和8年(1622)から宝永3年(1706)には、藩の財政再建策として新田開発よりは旧来の水田の水確保を重要視し、用水の開削とともにため池の築造・修築に力が注がれた。この時代には手洗池、北ノ入池などが築造・修築されたと伝えられる。山田池が築造された慶長19年(1614)から北ノ入池が築造された寛文3年(1663)までの約50年間に21のため池が築造・修築されたとされる(『塩田歴史年表』昭和35年(1960))。古来より農業用水の確保に重要な役割を果たしていたため池は、近世には個人利用の小池まで含めると300余を数えたといわれている。

昭和11年(1936)西塩田地区の産川上流に堤高25mの農業用水ため池である沢山池が建設され、塩田平西部のため池の水量は安定した。



ため池の築造時期

参考：『わたしたちの上田市』

数多く築造されてきたため池だが、子供たちにとってはスケート場や水泳場、土手はチャンバラやそり遊びの場として利用されるなど身近な遊び場でもあった。

昭和 30 年代からは稲作への利用のほか、コイやフナの養殖が行われたため池もあったが、全国的なコイの需要減、他産地の進出、水質汚染などの要因から現在は中止されている。そのほかにも、酪農用の牧草地として土手を利用したこともあった。

このように、ため池は様々な利用をされたが、高度経済成長期以降には、宅地化による水田の減少、農業の構造改善、また維持管理の大変さなどの理由から小さなものは廃止されるなどして、ため池の数は減少した。

イ. 歴史的風致を形成する建造物

(ア) ため池群 (未指定)

現在、塩田地域には大小さまざまなため池が存在している。大きなものでは堤頂長が 500m 以上のものも存在しており、うち貯水量 3 万 m³ 以上のため池は 31 存在している。市の「ため池台帳」に記載されている塩田地域のため池を下表に示す。「ため池台帳」には 64 のため池が記載されており、そのうち 41 のため池が塩田地域に位置している。

また、農業用水の確保という課題に対する農業土木技術の蓄積によってできあがったため池群は、平成 11 年 (1999) に田園景観を生み出した農業施設 (= ため池) や美しい景観が持つ自然や歴史・文化などを再評価しつつ、その地域資源の保全や環境整備を行う「田園空間整備事業」(農林水産省) に採択され、塩田平の自然・歴史・文化の学習や、地域文化との交流ができる塩田の里交流館 (とっこ館) が設置された。また、平成 22 年度 (2010) に農林水産省による「全国ため池百選」に「ため池群」として選定された。

塩田地域のため池の一覧

ため池名	所在地	築造 (年)	灌溉 面積 (ha)	色は築造年代を示す							
				真田氏の時代		仙石氏の時代		松平氏の時代		昭和以降	
				堤高 (m)	堤頂長 (m)	満水面積 (m ²)	貯水量 (m ³)				
久保池	富士山 西前畑	1576	5	3	80	5,000	4,900				
夫婦池	下之郷 下迎原	1611	5	3	177	5,500	5,100				
山田池	山田 竹の裏 八木沢 向池田	1615	45	11	270	71,800	262,000				
小島大池	小島 地頭	1618	45	6	555	38,500	102,000				
来光寺池	古安曾 二軒在家	1623	70	8	455	50,000	231,000				
舌喰池	手塚 池ノ口	1623	50	7	485	61,400	138,000				
五加前池	五加 南在家	1623	15	5	470	18,200	45,000				
共有池	舞田 前沖	1623	10	3	100	17,800	28,000				

ため池の一覧（つづき）

ため池名	所在地	築造 (年)	灌漑 面積 (ha)	規 模			
				堤高 (m)	堤頂長 (m)	満水面積 (m ²)	貯水量 (m ³)
<small>うわだいら</small> 上平池	舞田 上平沖	1623	20	5	36	14,000	25,000
中池	下之郷 中池西	1624	5	3	98	5,000	5,900
<small>うわはら</small> 上原池	本郷 上原	1630	25	7	500	13,500	46,300
中野前池	中野 池下	1630	24	5	560	18,100	40,000
<small>いもりざわ</small> 居守沢大池	富士山 居守沢	1630	3	3	113	4,000	2,900
甲田池	十人 勝巻	1641	28	7	828	30,000	95,000
下之郷新池	下之郷 東八反田	1642	32	5	412	36,300	74,000
男池	五加 八丁	1644	20	8	600	20,600	50,000
<small>くらほね</small> 倉保根池	本郷 倉保根	1644	7	3	233	8,300	7,100
<small>かみくぼ</small> 上窪池	本郷 上窪	1646	12	4	400	11,200	25,000
水沢池	富士山 水沢	1648	18	5	274	13,400	32,000
女池	五加 八丁	1650	10	3	400	8,800	18,000
<small>てあらい</small> 手洗池	古安曾 池上	1655	27	5	193	30,000	91,000
北ノ入池	富士山 下二ツ木	1664	92	10	373	78,000	266,000
<small>むかえはら</small> 迎原上池	下之郷 迎原	1690	2	3	33	500	1,000
塩吹池	保野 塩吹	1704	50	12	400	35,300	115,000
塩野池	前山 市末	1704	11	8	230	10,400	34,000
加古池	保野 塩吹	1704	8	2	115	5,800	5,800
<small>ひょうたん</small> 瓢箪池	下之郷 中布引	1709	2	3	105	1,500	1,600
<small>かみいち</small> 上一池	山田 上打越	1709	5	3	56	500	700
浅間池	下之郷 中迎原	1711	25	8	174	6,100	41,000
竜王下池	手塚 塚浦	1711	7	5	58	1,200	2,700
宮原上池	下之郷 宮原	1711	2	3	72	500	1,000
迎原下池	下之郷 迎原	1711	2	2	58	500	600
砂原池	富士山 上知口	1714	6	7	133	10,000	50,000
幕宮池	別所温泉 幕宮	1716	20	10	100	12,600	60,000
山田新池	山田 北沢	1751	5	7	120	4,500	12,000
鳥居上池	下之郷 宮原	1760	2	3	75	1,000	900
荒池	十人 軒民	1782	27	6	110	7,600	19,000
<small>しみず</small> 清水池	古安曾 上清水	1818	5	3	119	5,000	6,300
不動池	手塚 滝沢	1821	5	7	150	6,000	14,000
<small>きやま</small> 沢山池	野倉 産川	1936	412	26	87	117,530	1,082,000
平井寺池	古安曾 小胡桃	1949	5	9	78	14,000	4,500

参考：ため池台帳

主要なため池

ため池を時代別に1つずつ記す。

① 山田池

所在地：山田、八木沢 築造年：慶長20年（1615） 灌漑面積：45ha
堤高：11m 堤頂長：270m 満水面積：71,800 m² 貯水量：262,000 m³

山田池は上田市の西南端、女神岳山麓に広がる池田山と横山の丘陵地形を巧みに利用して築かれた。慶長年間（1596～1615）に行われた高一貫五百五十文の池成引き（池の築造・改修に対する免税措置）が昭和38年（1963）発行の『上田小県誌』に記されており、慶安3年（1650）の大修理で現状の池になったといわれる。



山田池

昭和30年代までは水遊びやスケート場、またエビや小魚が面白いように獲れる絶好の遊び場として子供たちにも利用されていた。また、昭和33年（1958）から昭和55年（1980）まで、養鯉事業が行われるなど池の利用方法に一時期変化があった。現在では、野鳥の観察会なども行われている。

② 北ノ入池

所在地：富士山 下二ツ木 築造年：伝 寛文4年（1664） 灌漑面積：92ha
堤高：10m 堤頂長：373m 満水面積：78,000 m² 貯水量：266,000 m³

北ノ入池は、塩田地域のため池で2番目に大きく、昭和28年（1953）には灌漑面積92ha、満水面積78,000 m²、貯水量25万m³、最大水深6m、堤高は7mであった。築造された当初は満水面積78,000 m²、最大水深4.5m、堤高4.3mあり、その後嵩上げなどの工事をして現在に至っている。



北ノ入池

正徳4年（1714）には、増築工事が行われており、その史料が残されている。大きなため池であり、10,902人という多くの人員が動員された。4月9日から4月24日の計16日間で完成しており、約681人/日が働いたことになる。

昭和30年（1955）前後は農家での乳牛飼育が奨励されたことから、土手に約7升の牧草の種をまきつけたこともあったとされている。現在は草の需要はなく、土手の草刈りは役員や当番が作業している。また、一時コイが飼われていた。

正副組合長や理事、池守などの役員が水神祭を実施している。豊作や水難事故防止などを祈願して、北ノ入池の北岸と南岸の2ヶ所の水神に紙垂を付けたしめ

縄を飾り、米、塩、ネギ（またはバナナ）、大根、人参などを供え、参拝したあとで直会なおらいをするという行事は現在でも受け継がれている。

③ 砂原池すなほらいけ

所在地：富士山 築造年：正徳4年（1714） 灌漑面積：6 ha 堤高：7 m
堤頂長：133m 満水面積：10,000 m² 貯水量：50,000 m³

築造された際の日々の作業が記録された「丁場割ちやうばわり」が残っており、当時の様子が想像できる。築造工事は正徳4年（1714）4月12日から始まり、途中数日の中断期間を経て、5月12日に終わった。

工事は塩田組以外の遠くの村々からも動員されて行われており、上田藩領を挙げての協力によって進められ、実日数19日、人員7,787人を動員して竣工した。



砂原池

④ 沢山池きやまいけ

所在地：野倉 築造年：昭和11年（1936） 灌漑面積：412ha 堤高：26m
堤頂長：87m 満水面積：117,530 m² 貯水量：1,082,000 m³

塩田平産川流域の恒久的な干ばつ対策として、西塩田村・中塩田村が中心となり、昭和9年（1934）4月1日に工事ははじめ、昭和11年（1936）3月20日に竣工した。工事に要した人員は129,000人と言われている。その後幾度かの改良工事が行われた。

周囲を山々に囲まれているため、春には新緑と山桜、秋には紅葉と四季折々の景観を楽しむことができ、訪れる人々に心の潤いを与えてくれる。



沢山池

(イ) 別所神社本殿（市指定の有形文化財 平成 6 年（1994）指定）

別所温泉の北、常楽寺に隣接し、塩田平をはじめ遠く浅間連峰が望める小高い丘の上に位置する。社名は、「熊野社」で、社伝によると、紀州（和歌山県）の熊野本宮大社から分祀されたといわれる。明治 11 年（1878）に別所神社に改められた。

本殿は一間社隅木入春日造で、屋根は瓦葺である。複数の棟札が残されているが、指定時の調査では、天明 8 年（1788）に建立したとされた。18 世紀の神社本殿としては、規模も大きく、建築様式や、建物を飾る彫刻も華やかで、当初の形式をよく残している。

本殿の背面に小さな祠が 3 基祀られている。縁結びの神を祀ったもので、本殿より遅れて祀られたものと考えられ、神社入口の鳥居の額には「本朝縁結大神」と掲げられている。



別所神社本殿

(ウ) 生島足島神社

① 生島足島神社本殿内殿（県宝 平成 10 年（1998）指定）

塩田平の東、下之郷に位置し、長野県では最も古い神社の一つである。諏訪大社の祭神・建御名方命が出雲の国から信州へとくだった折に生島・足島 2 柱の神をまつり、米粥を煮て神前に献じたところと伝えられている。生島大神は万物を限りなく生成し、足島大神は万物を満ち足らしめ給うと説かれ、農工商の守り神ともされる。

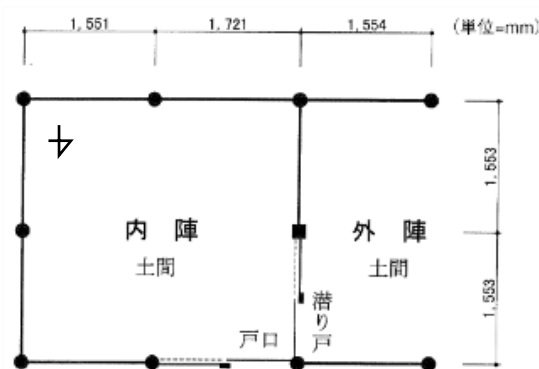


生島足島神社本殿

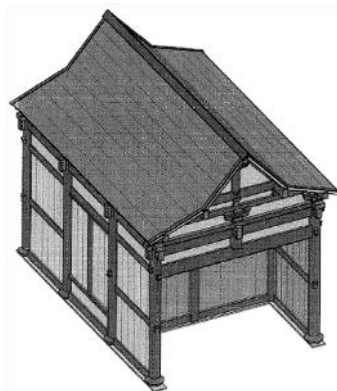
出典：上田市文化財マップ

平安時代初期の延喜式に、「生島足島神社二社名神大」と載るが、中世末期以降には「下之郷大明神」、「諏訪法性大明神」などと呼ばれ、武田氏や歴代上田藩主の保護を受けてきた。寛政 11 年（1799）に社名を生島足島神社に改めた。境内の池に囲まれた小島の上に、本社が正面を北側に向けて建ち、向かい合って諏訪社が立つ。本殿は昭和 16 年（1941）に建てられた。

本殿の内部には旧本殿の内殿があるが、床板がなく土間の大地となっており、その大地が御神体とされている。現在の内殿は妻入りで2室の空間に分かれている。さらに、江戸中期の生島足島神社古図では、西側に向拝があり、正面側に幣殿が接続している様子が示されており、当時は上屋がなく屋根は切妻造であったことがわかる。県宝指定時の調査により様式手法から16世紀前・中期の建設と推定されている。



内殿 現状平面図



内殿 鳥瞰図

② 生島足島神社^{せっしや す わしやほんでん} 攝社諏訪社本殿及び門 (県宝 平成14年(2002)指定)

生島足島神社本殿と向き合うように建設されており、その棟札から建設年は慶長15年(1610)で、上田藩主^{うへだはんしゆ}真田信之^{まのうけのぶゆき}によって建築された。また、棟札には本殿の部材はすべて一木から作られたことが記されている。

本殿の全体の形式は、間口2.8mの規模の一間社^{いっかんしゃ}流造^{ながれづくり}で、屋根はこけら葺であった。社殿の軸部は朱漆塗、羽目板や軒裏板は胡粉塗、彫刻は極彩色とするなど全体に彩色を施している。

彫刻を多用しないで、建築本来の美しさを見せている。大きくても重々しくない流造の屋根、懸魚^{げんぎよ}、降り懸魚^{くだりげんぎよ}、桁隠^{へたかくし}、向拝柱上軒裏の手錠^{てのじやう}等のびのびした曲線を見せている。また、本殿の正面の門も本殿と同様の技法を用いており、同時期に建てられたものと考えられる。



生島足島神社 攝社諏訪社本殿

出典：上田市文化財マップ

ウ. 歴史的風致を形成する活動

(ア) 水の確保と稲作

① ため池の維持管理

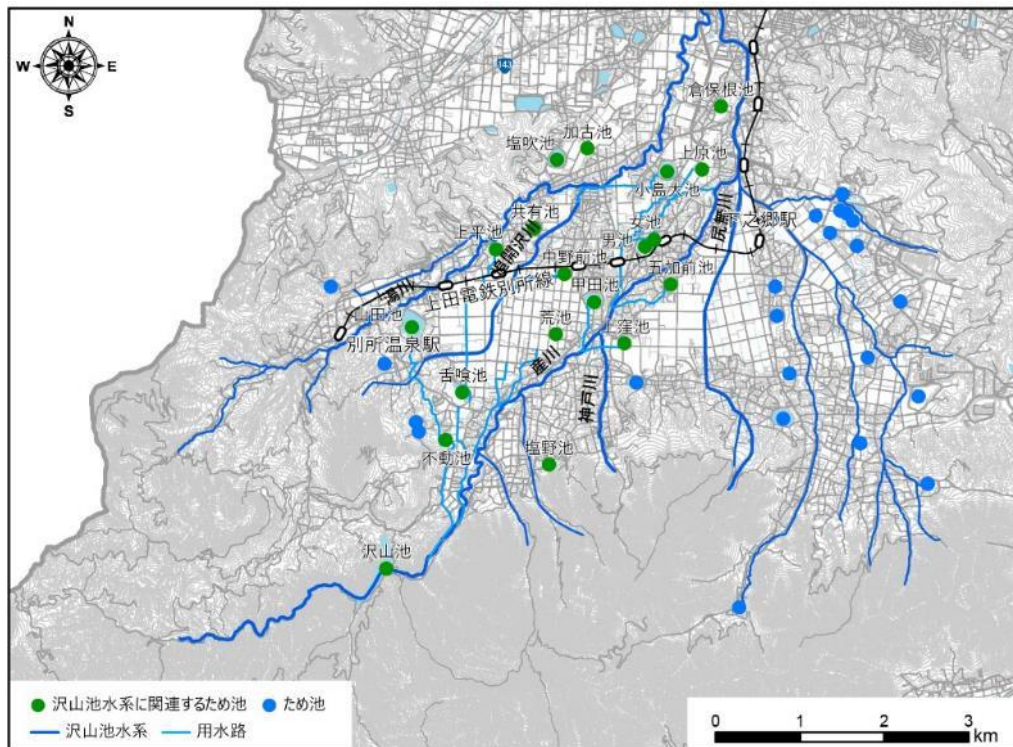
稲作を支えるため池は、水源として地域の貴重な財産とされ、ため池を利用する人々の共同作業により維持・管理されてきた。特に水利の管理は非常に重要とされており、その管理体制のもとで整備に取り組む様子が、昭和 31 年 (1956) 8 月の『しおだ町時報』に取り上げられている。管理体制のもと、地域住民は草刈りや泥流し、火入れなどを行い地域のため池をきれいに保っている。



火入れの様子

定期的な維持管理活動のため、草地から林地への植物遷移が起こらず、毎年同じ種の植物が生育するようになり、半自然草地が維持されている。

たくさんのため池のなかでも、水源域に設置された大規模なため池である沢山池は、多くのため池や田へ水を供給しており、複数の自治会が共同で管理をしている。沢山池から水の供給が始まる 5 月の中旬には関係する自治会の代表者が、朝 4 時に沢山池に集まり樋の開度調整を行う。調整後には水路に障害がなく水が安定して流れるかを確認しながら、各集落へもどる。沢山池の開度調整から約 2 時間後に集落の水量が変化する。



沢山池の維持管理

② 稲作

塩田地域は水源の観点で稲作が難しい地域であるが、強粘土の土壌は、粘り気のあるおいしい米を作るうえで適している。そのため、安定的に水を確保できるため池をあちこちに設営し、水路等も整備することで、水を確保、安定的に供給し稲作を展開してきた。塩田地域では、このような環境や施設整備に加え農家の栽培技術が高いことから生産量も多く、上田市で一番の生産量を誇る地域である。例年、4月末に苗代をつくり、5月末に田植え、7月20日頃に中干し、稲刈りは9月下旬から10月上旬にかけて行われている。



秋の塩田平

塩田地域の平坦地の広い範囲は水田が占めており、稲の青々とした様子や稲穂が金色に輝く様子など、季節ごとにあたり一面に広がる光景を目にすることができる。収穫期には山裾に広がる集落に住む人々が親戚を集めて田へと繰り出し、共同で稲刈りや脱穀に取り組む姿が、塩田地域全域で見られる。また、水田には「いなご」が生息し、佃煮にするなど古くからたんぱく源として食用とされてきた。現在は少なくなっているものの、稲刈りの際に「いなご」を捕獲する姿もみられる。昭和36年(1961)の『しおだ町時報』に、7年連続で豊作に恵まれた旨が記載されており、古くから稲作がつづくことがわかる。

③ 雨乞い

塩田地域はため池の築造により水の確保に努めてきたが、干ばつによる絶対的な水不足では神に祈る雨乞いを行った。江戸時代に上田ちいさがた小県地方の大きな干害は9回あったとされ、このようなとき、上田藩主の命により主だった寺院で祈祷が行われたり、諏訪大社から「お水」を青年らがりレーして運んだりと様々な方法で雨乞いは行われた。塩田地域の雨乞いとしては、山上や池の周りで火を焚く「干駄焚」や「百八手」、反物を掲げて祈願する「岳たけの幟のぼり」が特徴的である。現在はため池や用水が整備され、水不足が大幅に改善されたこともあり、神事としてだけでなく、催事として雨乞いが行われることも増えている。

水不足による雨乞いは、塩田地域の時報や上田市誌等から、大正13(1924)、15年(1926)、昭和6(1931)、17(1942)、24(1949)、30(1955)、32(1957)、45年(1970)、平成2(1990)、6年(1994)に実施されたことがわかる。実施は農家組合や自治会などで判断されており、記録が確認された年以外にも実施されていたと推測される。また、明確な判断基準はなく、生活の中で雨が少ないと感じ、ため池の水位低下が危惧される状況において実施されていたようである。実際に気象庁で公開されている上田市の過去の気象データ(昭和51年～令和3年(1976～2021))では、平成2年(1990)や平成6年(1994)よりも降水量は少ないが、実施した記録がない年もある。

a. 千駄焚・百八手（未指定）

火を焚いて、雨が降ることを祈る儀式を千駄焚という。一駄というのは1頭の馬の背にのせられる量のことから、千駄焚はとて多くの焚き木を燃やしたという意味と推測される。

昭和30年（1955）8月の『中塩田時報』から千駄焚を実施していたことがわかる。火を燃やすことで上昇気流が発生して雨が降りやすくなるとの原理も考えられるが、この考えのもとに行っていたかは定かでない。昔は山の峰へ焚き木を運び上げて山頂で火を燃やしており、山に登った人は雨が降って火が消えるまで山から下りてこられず、地元の人々は毎日炊き出しを届けていたといわれている。大正時代に富士嶽山の頂上で行われた際に、火が周りに燃え移ったことから、ため池の周りへと場所を移すこととなったともいわれている。

また、塩田地域の一部では、焚き木を燃やすだけでなく、3mほどの竹の先に麦わらを巻き付けた松明をつくり、ため池を囲い堤の上で松明を燃やす特別な千駄焚が行われてきた。この雨乞いの手法は百八手と呼ばれ、塩田地域独特の手法であると言われる。名前の由来は「百八灯」という、お盆に灯明や松明を灯す火祭り行事から変容したと推察される。



昭和45年（1970）8月の『しおだ町時報』では、同様の方法が「千駄焚」と紹介されていることから、火を焚く雨乞いを千駄焚、なかでも松明に火を灯すものを百八手と呼ぶと推察される。



百八手

上田市誌からは、上平池や舌喰池、砂原池、塩吹池、塩野池で実施されたことがわかり、また、平成6年（1994）の雨不足の際には塩田平全体で百八手が一斉に行われた。催事としては、平成25、26、27年（2013、2014、2015）の「塩田平ため池フェスティバル」、令和元年（2019）、令和4年（2022）の「ため池まつり」で多くの参加者により百八手を実施された。

近年の百八手実施状況（実施年とため池）

平成25年 (2013)	平成26年 (2014)	平成27年 (2015)	令和元年 (2019)	令和4年 (2022)
舌喰池	来光寺池	甲田池	舌喰池	舌喰池

b. 岳の幟（国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）

平成9年（1997）国選択、昭和44年（1969）県選択）

塩田平の西部に位置する別所温泉地区で伝わる雨乞いの祭りである。起源に関する記録は存在しないが、伝承では室町時代の永正年間（16世紀初め）に始まったとされる。以来、500年経った現在まで守り伝えられ、人々に親しまれている。

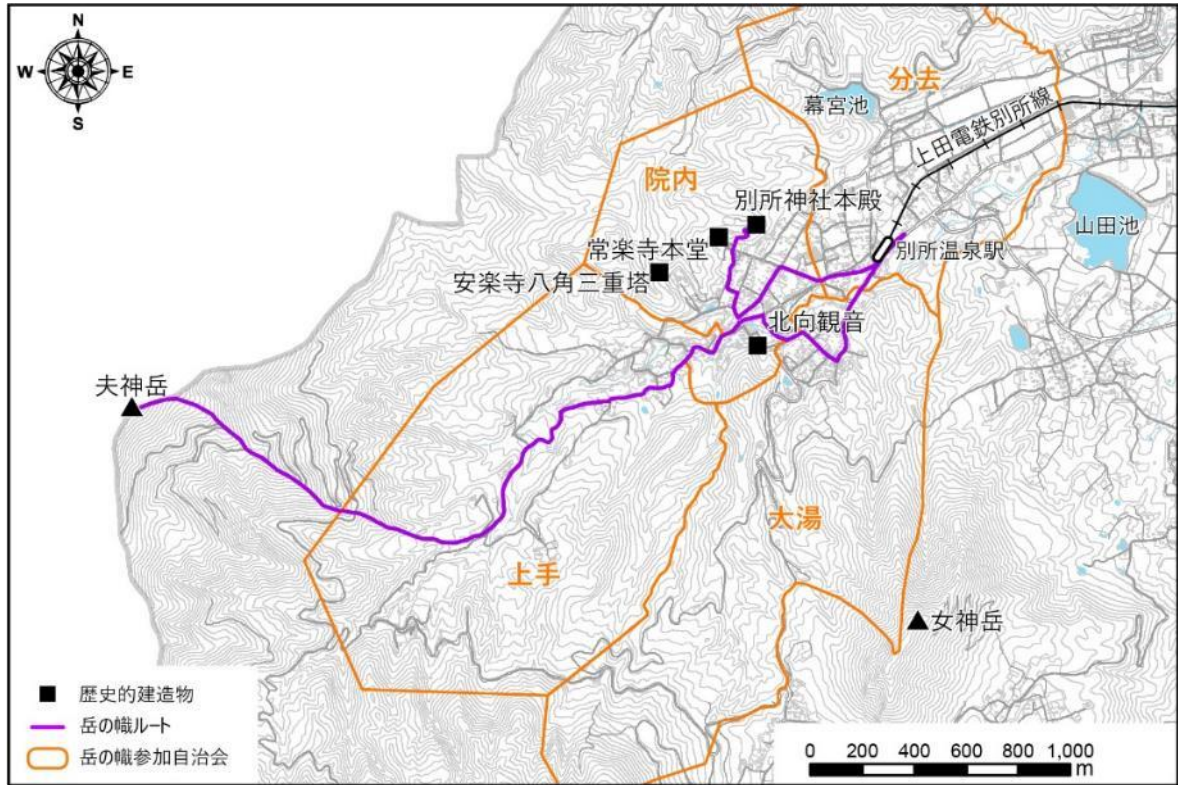
伝承によると、永正元年（1504）大きな日照りが続き、川の水が絶え、井戸の水も乾いてしまい、作物ができないばかりか、人間が死んでしまいそうな状況に村の人々が相談をし、夫神岳と女神岳との両山へお祈りをして、「もしも大雨を降らせて、民をお救いくださいれば、あらゆる限りの供物を差し上げます」と申し上げた。そして長い布を張って竜神の姿をあらわして、布を立て並べて行くと、夫神岳の山の上に、九頭龍のような形の霊体があらわれて、だんだん女神岳の上の方へ進んで、山を覆った。するとまもなく、大雨が降ってきて村人は救われたといわれている。これより祭りでは今でも多くの幟を献じている。



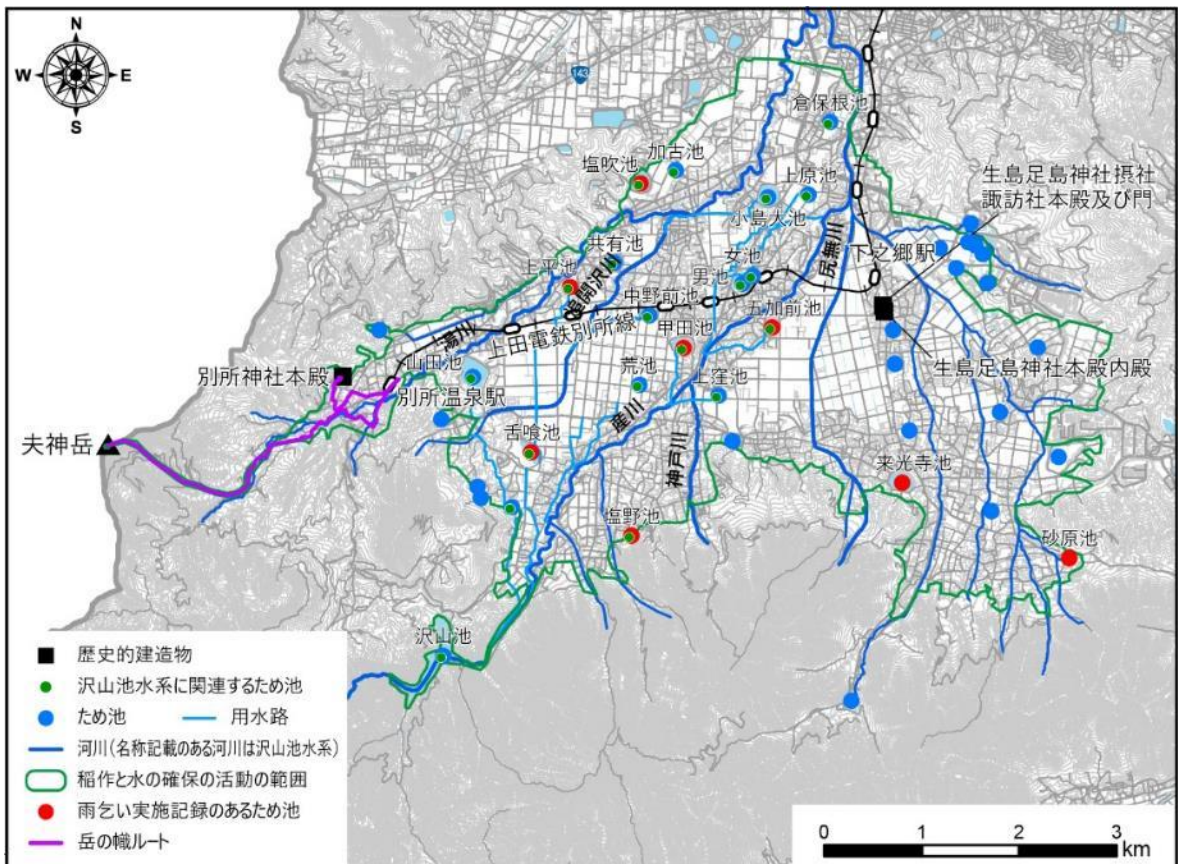
岳の幟

祭りは、毎年7月15日に近い日曜日に行われる。早朝、別所温泉の上手・院内・大湯・分去の4地区の住民が輪番で反物と竹竿を担いで夫神岳山頂に上り、頂上で九頭竜神に布とお神酒を供え、里中の安全と五穀豊穰を祈る（雨乞いの神事）。それから竹竿に布を飾った幟をつけ、これを押し立てて行列をなして里に下り、待っている迎えの人々に幟を渡す。およそ70本もの幟が山を下ると、それに三頭獅子や、子供たちのささら踊りの一行が合流して行列をつくり、別所温泉街を舞いながら一回りをして、別所神社で幟を神前に捧げて終わる。

龍をかたどったという幟は、長さ約6mの青竹竿に赤・青・黄などの色鮮やかな布が取り付けられており、この幟の布で着物を作って着ると、年中無病で過ごす事が出来ると言われている。伝統行事を守り伝えるために昭和50年代前半ごろから地元で「岳の会」を発足させ、活動をしている。



岳の幟のルートと参加自治会



稲作と水確保の活動範囲

(イ) 下之郷三頭獅子(市指定の無形民俗文化財 平成11年(1999)指定)

生島足島神社で夏の疫病退散を願う行事として古くから伝承されており、下之郷三頭獅子舞保存会で継承されている。

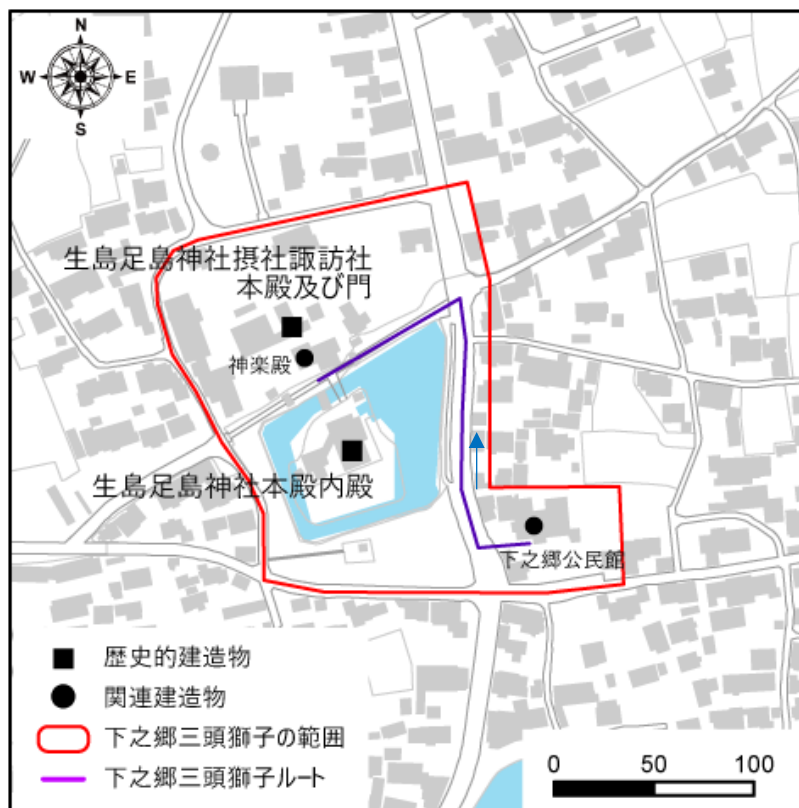
江戸時代の元禄4年(1691)には、ため池の築堤工事の地固めに出場したという記録がある。御神田に宮司が田植えを行うことで、豊作を祈願する神事である「御歳代田(神社に付属する田)の田植祭」に苗を運ぶ村人の脇で、田を這う格好で踊ったことから、「田の草獅子」ともいわれている。



下之郷三頭獅子

生島足島神社の祇園祭で舞われており、同日には子供神輿や神楽奉納、大人神輿なども実施される。下之郷三頭獅子は神社東側の公民館で演舞したのち、露払や笹持ちなどと行列を組んで神社へと練りこみ、神楽殿へと向かい演舞される。神楽殿は上社と摂社諏訪社の上に位置しており、向きを変えながら奉納する。

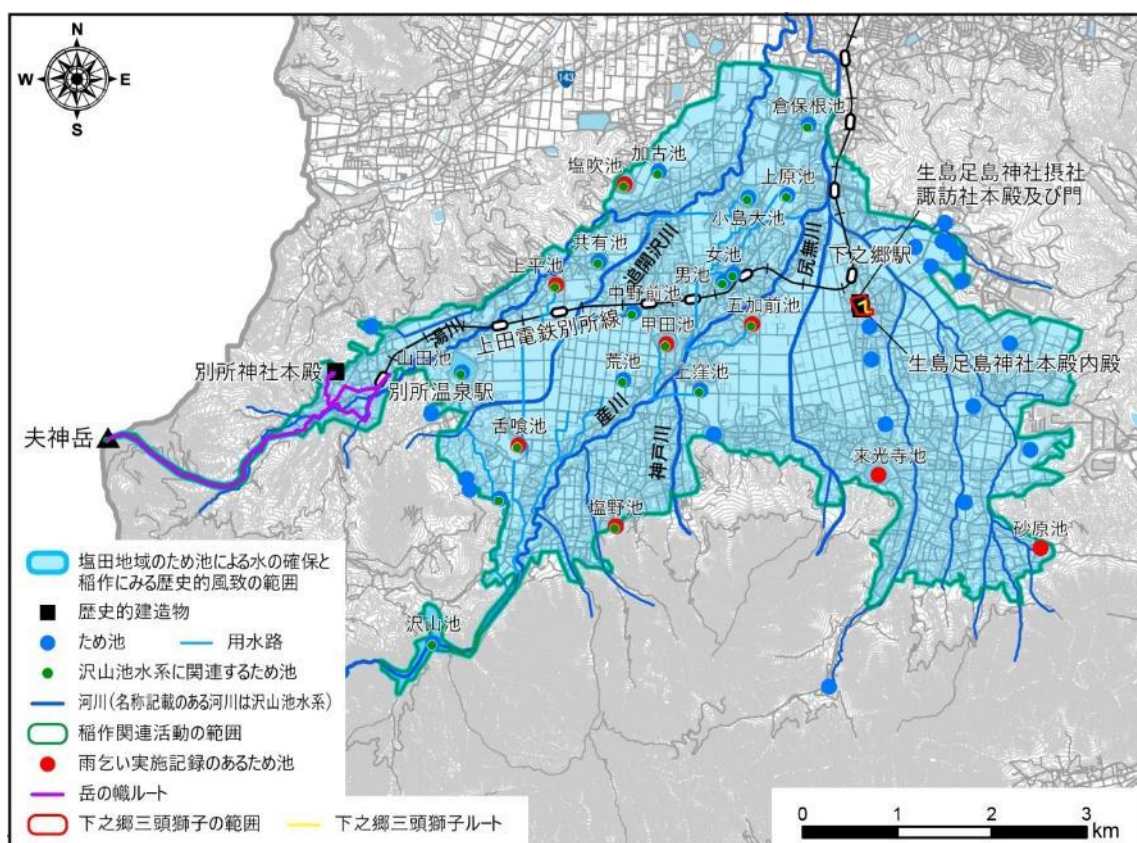
獅子舞などの担い手は、生島足島神社の位置する下之郷自治会の会員で構成されている。



下之郷三頭獅子の演舞会場と経路

まとめ

塩田地域では多数のため池を築造し、それらを維持管理することによって少雨という稲作に向かない気候条件を克服し、豊かな田園地帯を築いてきた。市街化が進む現代にあっても地域住民のたゆまぬ努力によって守り続けられた多数のため池群は、田園地帯と合わせて上田市を代表する特徴的な景観の一つである。また、伝統的な雨乞いや、五穀豊穰を祈る獅子舞は現在まで受け継がれており、ため池や神社仏閣で行われる様子は、古の神事に込めた人々の祈りを思い起こさせる歴史的風致である。

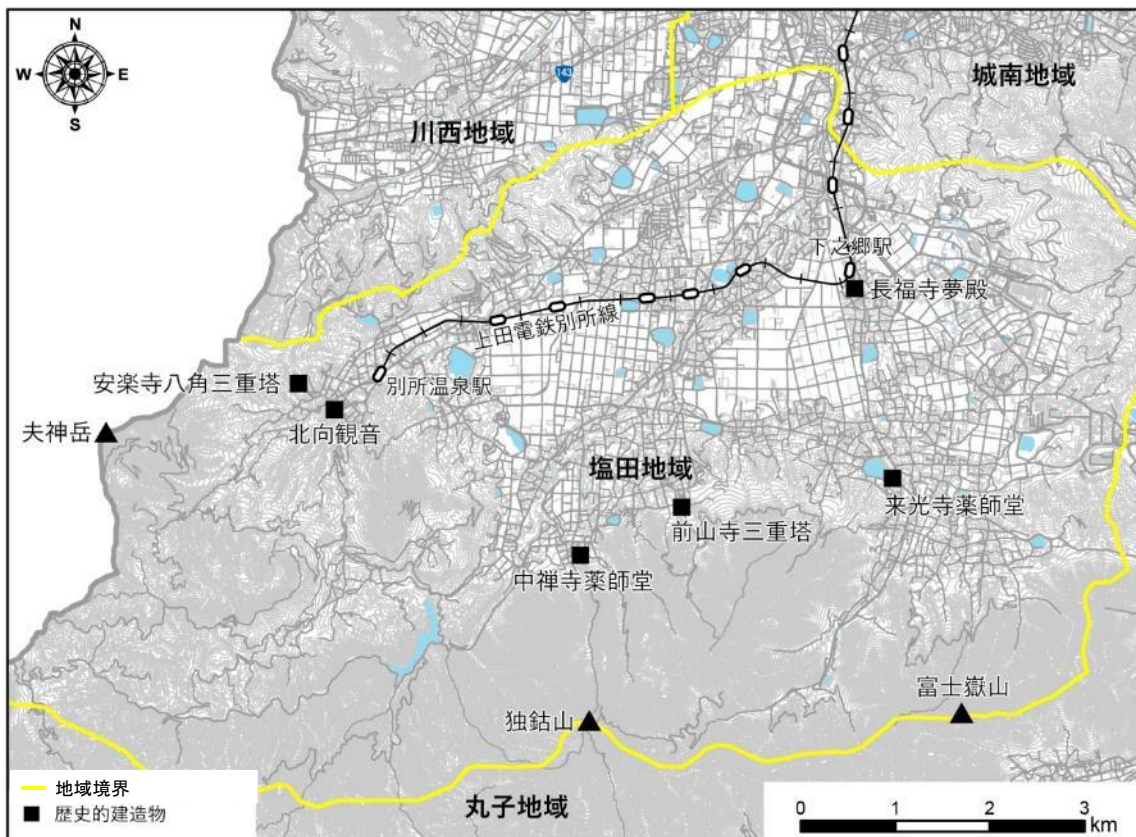


塩田地域のため池による水の確保と稲作にみる歴史的風致の範囲

(2) 霊峰に囲まれた塩田平の神社仏閣群

塩田地域の南部から西部にかけては水源信仰及び修験の場とされた独鈷山、九頭竜神を祀る夫神岳、富士嶽神社奥宮がある富士嶽山といった霊峰がそびえており、その山麓部には、鎌倉時代から室町時代にかけて多くの寺社が建立されていることから、全国でも有数の仏教・神道文化財密集地域となっている。また、鎌倉時代には当時の政治の中心地である鎌倉と深い関係があった。特に、鎌倉幕府の連署（鎌倉幕府の事実上の最高職であった執権の補佐役であり、執権に次ぐ重職）を務めていた北条義政は、塩田の前山地区に館を構え、その子孫は3代にわたって鎌倉幕府の重臣として活躍しており、鎌倉から多くの文化が移入され、影響を受けた文化財が多く残っている。保養地である別所温泉と合わせ、古くから人の往来が盛んな地域である。

このような風土もあったためか、江戸時代には四国八十八ヶ所霊場の仏様を塩田平に迎え、巡礼路が設けられた。現在では「塩田平の札所巡り」として親しまれている。



塩田地域（霊峰に囲まれた塩田平の神社仏閣群の建造物等）

ア. 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 長福寺（夢殿）（未指定）

生島足島神社の北側に位置する。昭和17年（1942）に寄進された。「信州夢殿」と称され、奈良県法隆寺の夢殿を完全に二分の一に写し、瓦までも奈良県製を使用した。本尊として祀られている「銅像菩薩立像」は国の重要文化財である。もとは上高井郡小布施町の旧家に伝わるものであったが、昭和13年（1938）に長福寺に移された。昭和40年（1965）の信州夢殿の様子が『上田付近の遺蹟と伝承』に掲載されており、その姿は現在でも確認できる。



長福寺 夢殿

長福寺は真言宗で本尊は大日如来、康保2年（965）に創立し、もともとは生島足島神社境内に建てられた。昭和35年（1960）の火災で本堂、庫裏、夢殿の一部を焼失したが、昭和50年（1975）に本堂が再建された。

明治の神仏分離令により生島足島神社遍路堂から移された、四国霊場八十八体仏のうち、当初は8体を有していたが、現在は5体が本堂に安置されている（3体は不明）。塩田平の札所巡りの1番札所である。

(イ) 来光寺薬師堂（未指定）

塩田地域東部の鈴子地区の公民館敷地内にある。昭和3年（1928）の公民館新築に伴い、現在の薬師堂が建築された。昭和35年（1960）の『しおだ町時報』で、現在と同じ場所に薬師堂を確認できる。鈴子自治会で管理され、平成26、27年（2014、2015）に屋根・戸の修繕などが行われた。



来光寺薬師堂

なお、来光寺は1650年ごろに廃寺となったが、廃寺後も薬師堂や薬師如来像などは残され、堂守も住んでいたとされる。その後、寛政12年（1800）の火事により残っていた薬師堂は全焼したが、その翌年には再建された。再建された薬師堂は、「堂」や「お堂」と呼ばれ、鈴子や古安曾の集会所にもなっていた。明治33年（1900）、39年（1906）に地域住民によって屋根や壁等の補修がされるなど、地域住民に大切にされてきた。

薬師堂には、四国霊場八十八体仏のうち3体の仏像が安置されており、住民に厚く敬われ、親しまれている。塩田平の札所巡りの4番札所となっている。

(ウ) 前山寺三重塔 (国の重要文化財 大正 11 年 (1922) 指定)

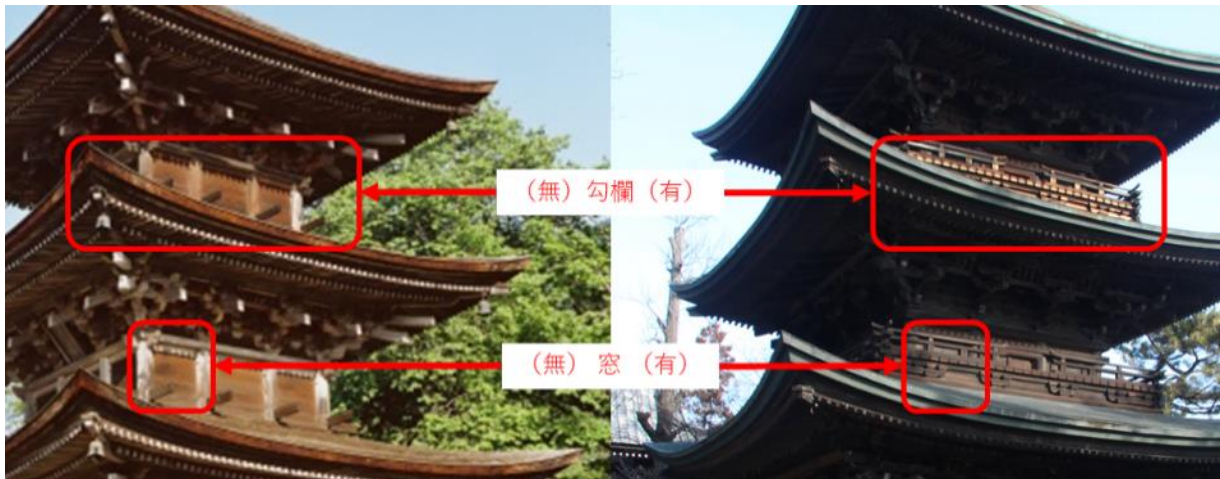
塩田地域南部の東前山に位置する。重要文化財指定時の調査で室町時代後期建立とされた。尾垂木・垂木などは和様だが、細部に禅宗様手法が取り入れられた「折衷様」。塩田北条氏や、戦国時代に一時この地を治めた村上氏の拠点塩田城の祈願寺であった。塔の 2、3 層目には扉も窓もなく、周縁の骨格となるべき長い貫が出ているものの勾欄が設置されていないことなどから「未完成の完成塔」と呼ばれる。



前山寺三重塔

前山寺の創建は明らかではないが、約 600 年前に四国の讃岐の善通寺からきた長秀上人によって規模が拡大されたといわれる。この時期は塩田城が勢力を有していたことから、前山寺は塩田城の祈願寺という性格を持っていたと考えられる。

前山寺には四国霊場八十八体仏の 4 体が安置されたとされるが、現存はしていない。塩田平の札所巡りの 8 番札所である。



未完成の完成塔 比較図

(左) 前山寺三重塔 / (右) 一般的な三重塔 (国分寺三重塔)

(エ) 中禅寺薬師堂 (国の重要文化財 昭和 11 年 (1936) 指定)

塩田地域南部の西前山に位置する。重要文化財指定時の調査で鎌倉時代前期に建築されたとされる建築物で、信州最古の木造建築であり方三間阿弥陀堂の様式である。真上から見ると正方形に見える「宝形造」で、茅葺屋根の頂部には、宝珠や露盤が飾られている。塩田庄の中心施設。扉は正面に 3 箇所、残りの三方に 1 箇所ずつあり、他は横板を張った板壁である。

内部には平安時代末期から鎌倉時代初期の作とされる木造薬師如来坐像(国の重要文化財)及び附指定の木造神将立像が安置されている。

中禅寺には四国霊場八十八仏は2体が配仏されたが、その昔に盗まれ、現在は新しく2体が安置されている。塩田平の札所巡りの10番札所となっている。



中禅寺薬師堂

(オ) 北向観音 (未指定)

平安時代初期の天長2年(825)に開創されたと伝えられ、源平の騒乱に巻き込まれて全焼し、建長4年(1252)塩田北条氏により再興された。本堂が北を向いており、北向観音と呼ばれている。現在の様子は昭和41年(1966)6月14日の「信濃毎日新聞」に掲載された写真と変わらず、建材も相応に古い様子である。塩田平の札所巡りの客番となっている。



北向観音

(カ) 安楽寺八角三重塔 (国宝 昭和27年(1952)指定)

塩田地域西部の別所温泉に位置する。純禅宗様式であり、関口欣也氏(横浜国立大)により、様式上鎌倉時代末期の建立とされた。八角形の平面を持つ塔は日本唯一である。上部2層には縦連子の窓があるのに対し下にはなく、最下層は初層につけられた裳階(ひさし)である。

安楽寺は日本で最も古い臨済宗寺院の一つ。天正16年(1588)ころ、高山順京が曹洞宗に改めた。

常楽寺・長楽寺(現存せず)とともに「別所三楽寺」と呼ばれた。

安楽寺では四国霊場八十八仏のなかから、当時配仏された7体すべてが現在まで安置されている。塩田平の札所巡りの15番札所となっている。



安楽寺八角三重塔

イ. 歴史的風致を形成する活動

塩田平の札所巡り

① 札所巡りの概要

塩田平では、四国の霊場から^{かん}勸請を許された八十八仏の札所巡りが行われている。客番、番外を含めて 26 の寺院を巡礼するものでコースにもよるが概ね 30km 程の行程がある。札所にはスタンプが用意されており、専用の御朱印帳を手に塩田平を歩く人々を目にすることができる。



札所巡りの様子

平時から個人で実施できるほか、近年では札所の寺院が塩田平札所巡りの体験会を春と秋に開催している。

体験会には 10～30 人が参加し、編笠を被った住職を先頭に、参加者が列になって塩田地域を巡る光景や、寺院や堂で経を読む光景を目にする。

② 塩田平の札所巡りの継承

はじめは江戸時代で、地域の農民からの要望により、村々の庄屋が四国の霊場へ行き、お願いしたことで勸請が許された。そして、村々で費用を負担しあい、京都の仏師に仏像製作を依頼、^{げんぶく}元禄6年（1693）晴れて塩田平の村々に迎えることができたと伝わる。しかし、200 年後の明治初期、^{はいぶつきしやく}廃仏毀釈などにより札所巡りの形は崩れてしまったとされている。

しかしながら、昭和 35 年（1960）の『塩田歴史年表』に「八十八仏を勸請したこと」や、昭和 40 年（1965）ごろの『しおだ町報』で「塩田平八十八仏の霊場」が紹介されており、札所巡りの形は崩れてもその伝承と、勸請された仏像は大切にされ、受け継がれつづけてきたことがわかる。

平成 5 年（1993）、舞田自治会の北条家で札所勸請の古文書が発見されると再び盛り上がりを見せた。古文書には下之郷の^{ひんろどう}遍路堂（現在の長福寺のあたり）を起点として計 21 か所の地名と寺堂、仏像の名前がはっきりと記されており、現存する仏像や寺堂からこの記述が正しいと判断された。陰ながら受け継がれてきた札所巡りが広く知れ渡ることとなった。

その後、地元の郷土史を研究する住民と仏教会とで話し合い、札所を一部変更し、現在の形となる。

③ 塩田平の札所巡りと地域のかかわり

仏像は地域の文化財とともに、古くから大切に守られてきており、寺院や地域住民管理の堂に60体ほどが安置されている。とりわけ地域の堂では、定期的に住民が集まり仏像や堂をきれいにしたり、また、堂へ続く道の草を刈り歩きやすく整備したりと、地域住民により管理等が行われる。

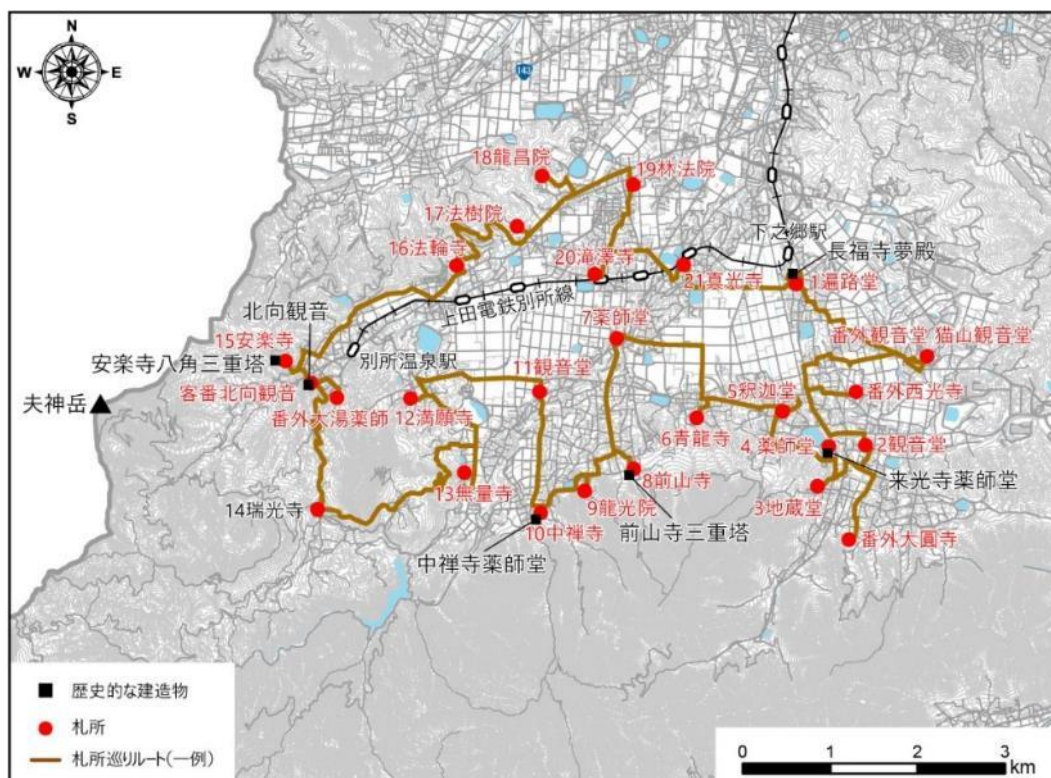


来光寺薬師堂での念仏

例えば、来光寺薬師堂では、地元住民で組織された奉賛会が、年に1度の春季例祭に合わせて薬師堂の扉を開き、仏像や堂をきれいにし、念仏をあげている。また、十人自治会では、地区の集会場に仏像が安置されてきたが、集会場を建て替える際には、集会場の外からでも参拝できるように配慮している。

ほかにも、塩田平札所巡りの体験会を行う際は、参加者に仏像を直接参拝してもらおうと、堂の扉を開き公開するなど地域全体で協力して取り組んでいる。

加えて、体験会の道々では、地域の旬の果物やソバなどが思いがけず振る舞われるなど、地域住民による「お接待」もみられる。

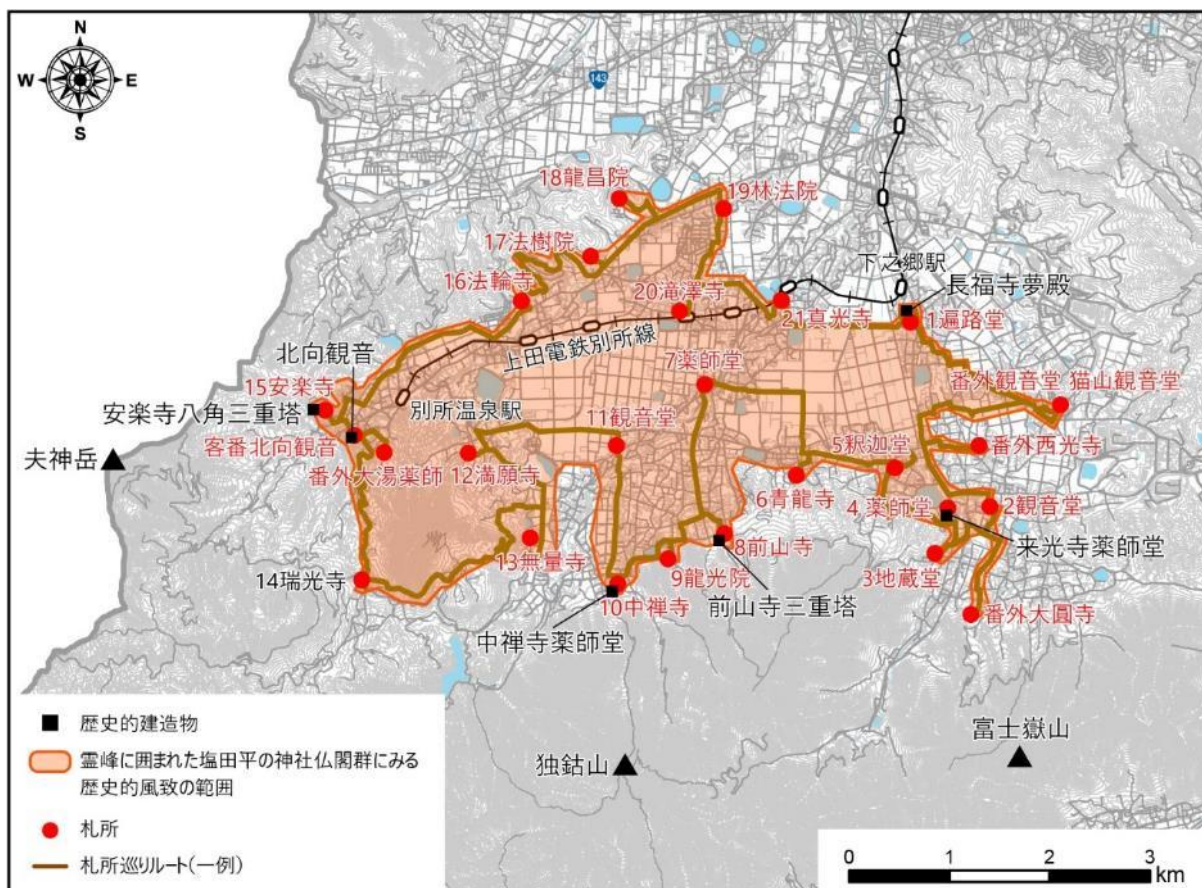


塩田平の札所巡りの札所と巡礼ルート（一例）

まとめ

中世から神社仏閣が多く存在した塩田地域では、それらを信仰し、守り伝えていく文化が住民の間で脈々と受け継がれてきた。江戸時代には札所巡りが行われ、形が崩れた時期があるものの、現在も続いていることは、地域住民が協力して日常的に地域の堂を管理し、仏像を大切にしてきた賜物である。

周囲を霊峰に囲まれた塩田平で守り継がれてきた多くの神社仏閣を巡り参拝する人々の姿は、地域の特色ある光景であり、かつて四国から八十八仏を勧請し、地域が大いに盛り上がった歴史を思い起こさせる。今後も受け継がれることが期待される歴史的風致である。

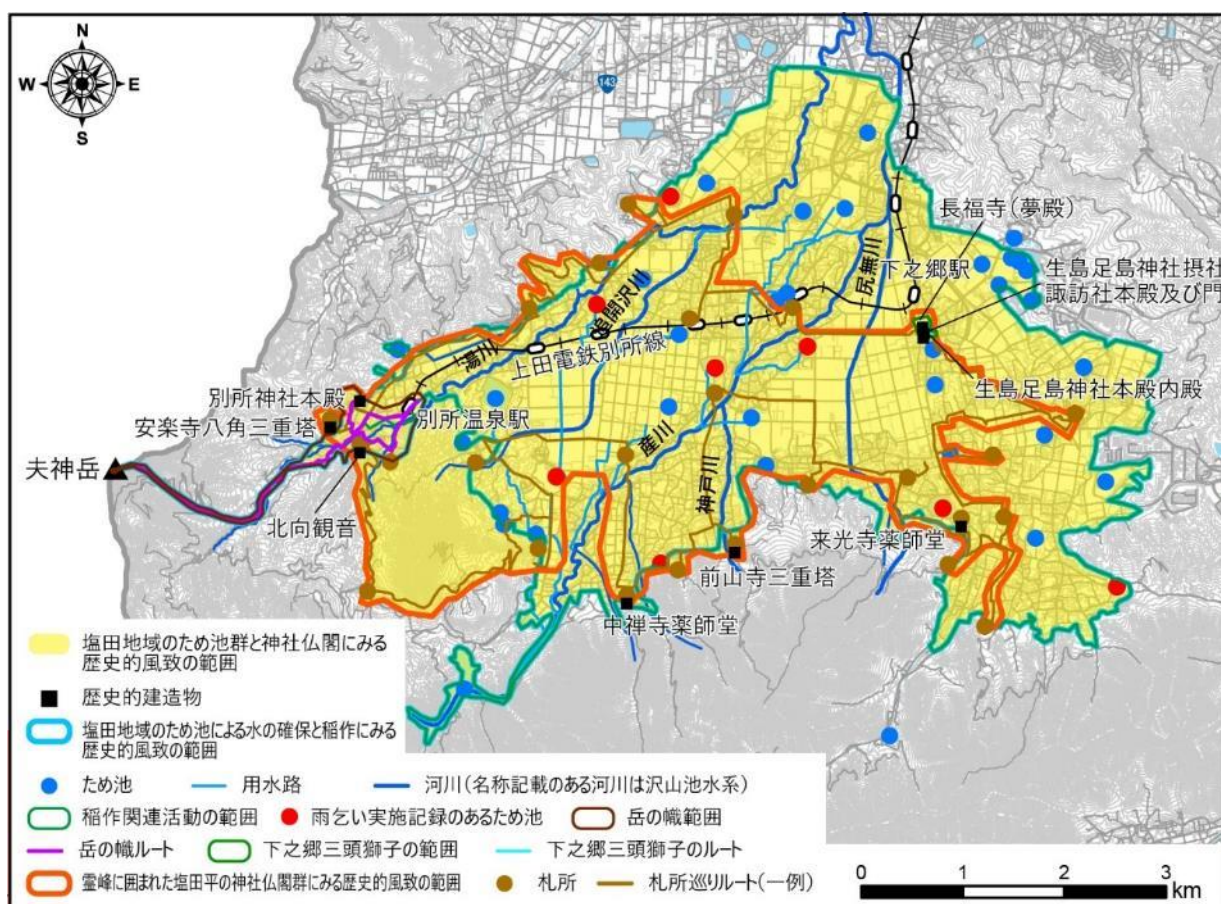


霊峰に囲まれた塩田平の神社仏閣群にみる歴史的風致の範囲

おわりに

豊かな土壌でありながら寡雨により厳しい生活を強いられていた塩田地域は、ため池の築造などの灌漑や雨ごいの儀式によってそれを克服しようとした。中世以降、多くの神社仏閣が建立され、現在まで守り継がれてきていることも、人知ではどうすることもできない「水」を求めるための強い願いを表しているといえるだろう。

霊峰に囲まれ、ため池や神社仏閣が点在し、その間には田園が広がる独特な景観を有する塩田平は、それらの存在が住民の意識に根付いており、大切にされ受け継がれてきた。このような地域資源を大切に作る意識から発展した活動が、今もなお実施され、塩田平の各所で見られる様子はこの地域特有で、将来にわたり残していきたい歴史的風致である。



塩田地域のため池群と神社仏閣にみる歴史的風致の範囲

2-3. 信濃国分寺にみる歴史的風致

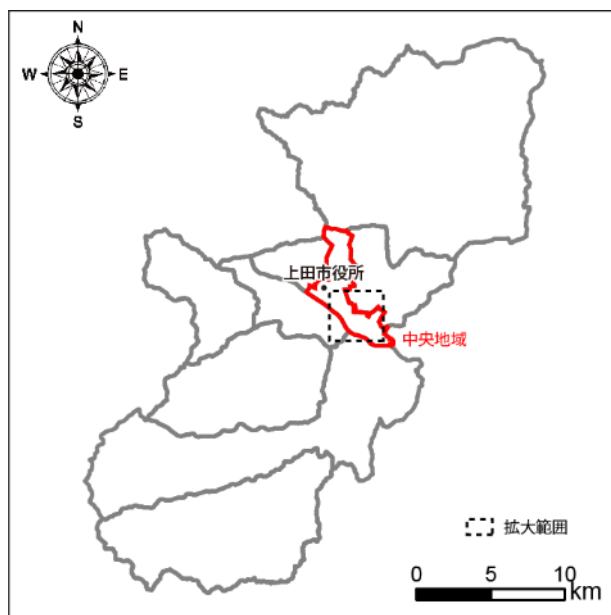
はじめに

信濃国分寺は中央地域の東部に位置しており、南を千曲川、東を神川が流れている。

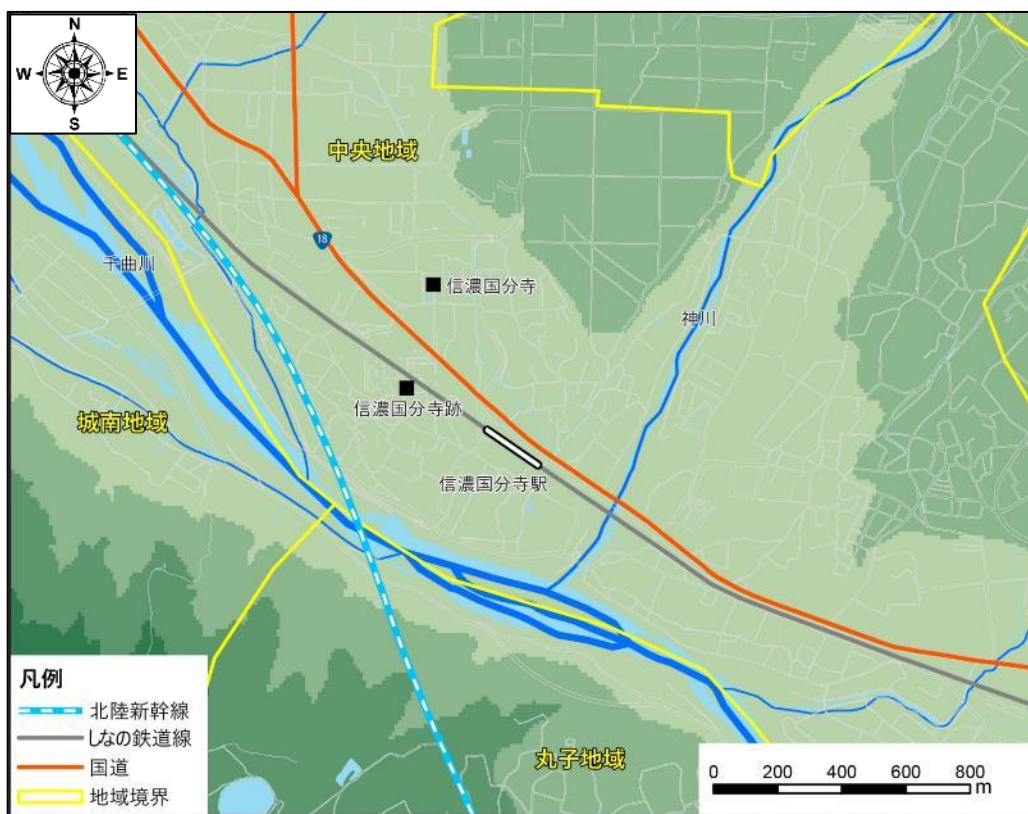
奈良時代に聖武天皇による国分寺建立の詔（命令）によって諸国に建てられた国分寺の一つである。

国分寺は律令制度の崩壊とともに衰退したが、信濃国分寺は鎌倉時代から室町時代の間創建地の北側に移転し、薬師如来を本尊として庶民の信仰を集めて復興した。また、特徴的な蘇民将来符が頒布される八日堂縁日などが行われ、創建から現在までおよそ1300年にわたりその信仰と習俗を伝えている。

信濃国分寺周辺の集落は、幕末から近代にかけて蚕種製造と養蚕を営み、現在も養蚕家屋がみられる。信濃国分寺跡は、史跡公園として地域住民も関わりながら保存整備が進められている。



信濃国分寺地域の位置



信濃国分寺周辺の地形

ア. 信濃国分寺の歴史

(ア) 創建

天平13年(741)、聖武天皇により国分寺建立の詔が下された。詔では、仏法の守護による国家安泰を祈願して、「金光明最勝王經」の一部を安置した七重塔のある僧寺と、法華經を奉ずる尼寺を建てるように命じ、僧寺には僧侶20人が置かれ、尼寺には10人の尼が置かれた。僧や尼は毎月8日に金光明最勝王經を転読することなど、定められた規則に従って生活することが義務づけられていた。

各地の国分寺造営は、期待したようにはかどらなかつたようで、天平19年(747)には地方役人である郡司に国分寺建立に協力するよう命じ、新たな新田を追加進めるなど、国分寺の造営を督促する詔が発せられている。天平勝宝4年(752)に総国分寺である東大寺(奈良市)の大仏開眼供養が執り行われ、総国分尼寺の法華寺(奈良市)も建立されたが、天平勝宝8年(756)に聖武天皇が死去するまでに完成した国分寺はわずかであったとみられる。天平宝字3年(759)になっても国分寺造営を督促する記事が「続日本紀」にみられるが、770年前後に至ってようやく大半の国の国分寺が完成したと考えられている。

信濃国分寺がいつ完成したかを伝える史料は残されておらず、建立に関わる詳細や、その後の活動についてもほとんどわかっていない。当初建立された所在地についても、昭和30年代まで現国分寺の近くが有力視されていたものの、長らく明確にはならないままであった。

(イ) 衰退と再興

古代の律令制度が崩壊すると諸国の国分寺も次第に衰退に向かう。信濃国分寺でも、尼寺跡近傍で発掘された10世紀後半ごろの竪穴建物跡に国分寺の平瓦が用いられており、このころには国分寺の建物の一部が失われていたと推定される。なお、承平8年(938)に平将門と平貞盛の軍勢が信濃国分寺周辺で戦い、その兵火のため伽藍を焼失したとの記録が信濃国分寺の寺伝にあるが、「将門記」などの史料にはこのような内容は見られず、発掘調査でも確認されていない。11世紀になると、竪穴建物における国分寺の瓦の使用のほか、僧寺回廊跡で骨壺が出土するなど、国分寺の衰亡を示唆する資料の出土が多くなる。

一方で、現在の信濃国分寺の再興は、古代の伽藍の中心から北に300mほど離れた一段高い段丘上になされた。本堂付近からは平安時代の瓦が発見されているが、いつ再興されたのかは明らかではない。一方、信濃国分寺の寺伝では建久8年(1197)に源頼朝が善光寺参詣の帰途、衰退した国分寺の再興を命じ、堂塔を修復したと伝える。平安時代末期から鎌倉時代の初期にかけての時期に、現在地に移転・再興された可能性が高い。

(ウ) 信濃国分寺の現在

現在の信濃国分寺は天台宗に属する。薬師如来を安置する本堂、あるいは寺全体が八日堂とも呼ばれるが、これは毎月8日の金光明最勝王経転読という古代の創建以来の伝統によるもので、このように法灯が受け継がれていることは歴史的文化的にもきわめて価値が高い。

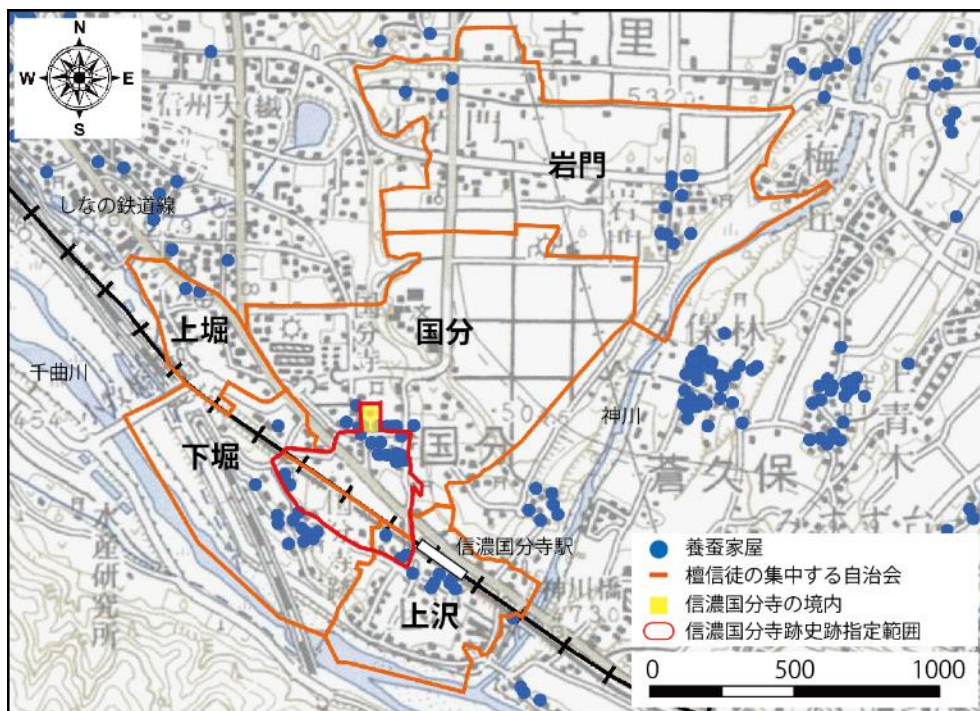
境内には万延元年(1860)築の国分寺本堂(県宝)、室町時代の国分寺三重塔(重要文化財)、鎌倉時代の信濃国分寺石造多宝塔(上田市指定有形文化財)などの指定文化財や、鐘楼、客殿などの堂宇が建ち並んでいる。

信濃国分寺の檀信徒は信濃国分寺周辺の神川地域、特に上堀・下堀・国分・上沢・岩門自治会に集中している。この地域は、近代に養蚕業で栄え、集落の中には大規模な養蚕家屋が存在し、往時の繁栄を伝えている。現在は、しなの鉄道信濃国分寺駅が置かれ、通勤通学や生活の足として地域住民に利用されている。また、国道18号線や同バイパス、市内環状道路も通り、交通の便に恵まれている。さらに、小中学校や、ショッピングモール等も備わり、優良な住宅地として発展している。



集落にある養蚕家屋

正月の修正会ではかつて、元旦から8日まで金光明最勝王経や薬師経の転読が行われたが、現在は元旦から3日までとなっている。また、信濃国分寺で行われる行事としては、施餓鬼会、灌仏会、大般若経会、大黒堂の縁日などもあるが、特に有名なのは八日堂縁日である。



信濃国分寺の檀信徒の集中する自治会

イ. 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 信濃国分寺跡 (国の史跡 昭和 43 年 (1968) 指定)

信濃国分寺跡の史跡指定範囲は、上田市の国分・下堀・上沢自治会にわたっている。1960 年代の発掘調査の結果、僧寺・尼寺の伽藍の全容とこれに伴う多くの資料を検出することができた。この結果、昭和 43 年 (1968) 3 月に、「僧寺跡と尼寺跡の伽藍が近接して発見され、しかも両遺構の保存状態が比較的良好であり、古代の寺院跡研究に欠くことのできない重要な遺跡」として、昭和 5 年(1930)の僧寺講堂跡 4,178 m²の指定に加えて、現国分寺を含む寺域のほぼ全域、129,339.7 m²に史跡指定区域が拡大された。その範囲は、北は現国分寺、東は国分神社、南は推定東山道、西は下堀の堀川神社までである。



信濃国分寺跡

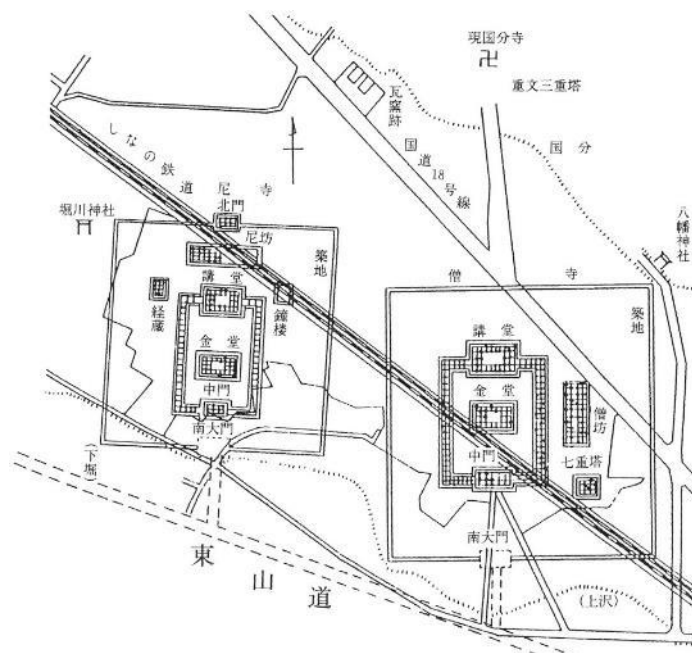
出典：上田市文化財マップ

発掘調査により確認された遺構・出土品の概要は以下のとおりで、これらは史跡内の信濃国分寺資料館で確認することができる。

- 【遺 構】 僧寺 (伽藍配置、中門跡、金堂跡、講堂跡、回廊跡、僧坊跡、築地跡)
尼寺 (伽藍配置、中門跡、金堂跡、講堂跡、回廊跡、経蔵跡、尼坊跡、北門跡)

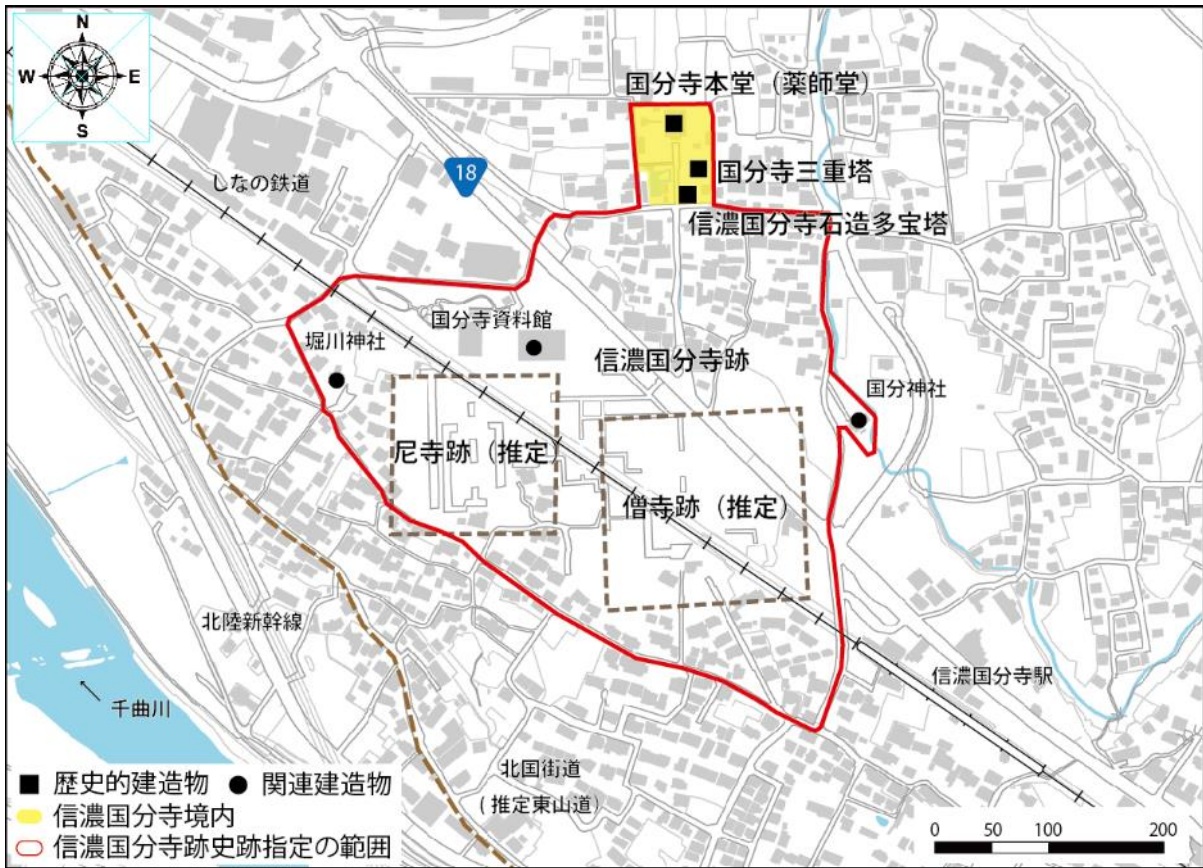
かわらかま
瓦窯跡

- 【出土品】 瓦類、土器、陶器、硯、鉄釘、古銭など



信濃国分寺跡推定伽藍配置

出典：上田市誌第 27 卷「上田市の文化財」



信濃国分寺跡の史跡指定範囲と現在の信濃国分寺の位置



信濃国分寺跡の史跡指定範囲と現在の信濃国分寺の位置（航空写真）

(イ) 国分寺三重塔（国の重要文化財 明治40年（1907）指定）

現・信濃国分寺境内で最も古い建造物であり、源頼朝発願と伝えられるが、様式上室町時代中期の建立と推定されている。

外観は軒の反りが強く壮麗で、一部が唐様ながら全体としては和様で統一されている。内部は四天柱を中央に立て、中央部は天井を一段高くして鏡天井が張られ、その下に仏像が安置されている。また、この天井の外側の四方は「如意頭文」という珍しい彫刻で囲まれており、中国から渡ってきた「禅宗様」が用いられている。一層の内部には、今も色のあとが残っており、建てられた当時の内部は赤や緑の色が塗られ、とても色鮮やかであったと推定される。



国分寺三重塔

出典：上田市文化財マップ

(ウ) 国分寺本堂（薬師堂）（県宝 平成9年（1997）指定）

現・信濃国分寺境内にある。薬師堂とも、八日堂とも呼ばれる本堂は、文政12年（1829）に発願され、天保11年（1840）に起工し、万延元年（1860）に竣工した。発願以来30余年の歳月を費やして完成した建物である。このことは、文政12年（1829）に作成された11冊におよぶ寄附芳名帳である「信濃国分寺勸進帳」に記録されている。寄進者の名は柱・梁・扉をはじめ屋根の瓦にいたるまで刻まれており、信者や住職の想い、勸進の苦心がしのばれる。



国分寺本堂（薬師堂）

出典：上田市文化財マップ

本堂は、主屋部分が間口9.7m、奥行14.6mの規模で、この周囲に幅2.4mの庇をつけているので、全体では間口14.5m、奥行19.4mの建物になる。構造的には、2階建のようにみえる入母屋造の屋根が主屋の屋根で、周囲に一段低い庇が付いている。この庇を裳階と呼び、国宝の善光寺本堂（長野市）と構造的には同じである。

本堂は近世の堂としては長野県東部の東信地方最大で、向拝の彫刻にみられる鋭い彫りや虹梁の複雑な絵様などに江戸時代末期の特徴がよくあらわれている。

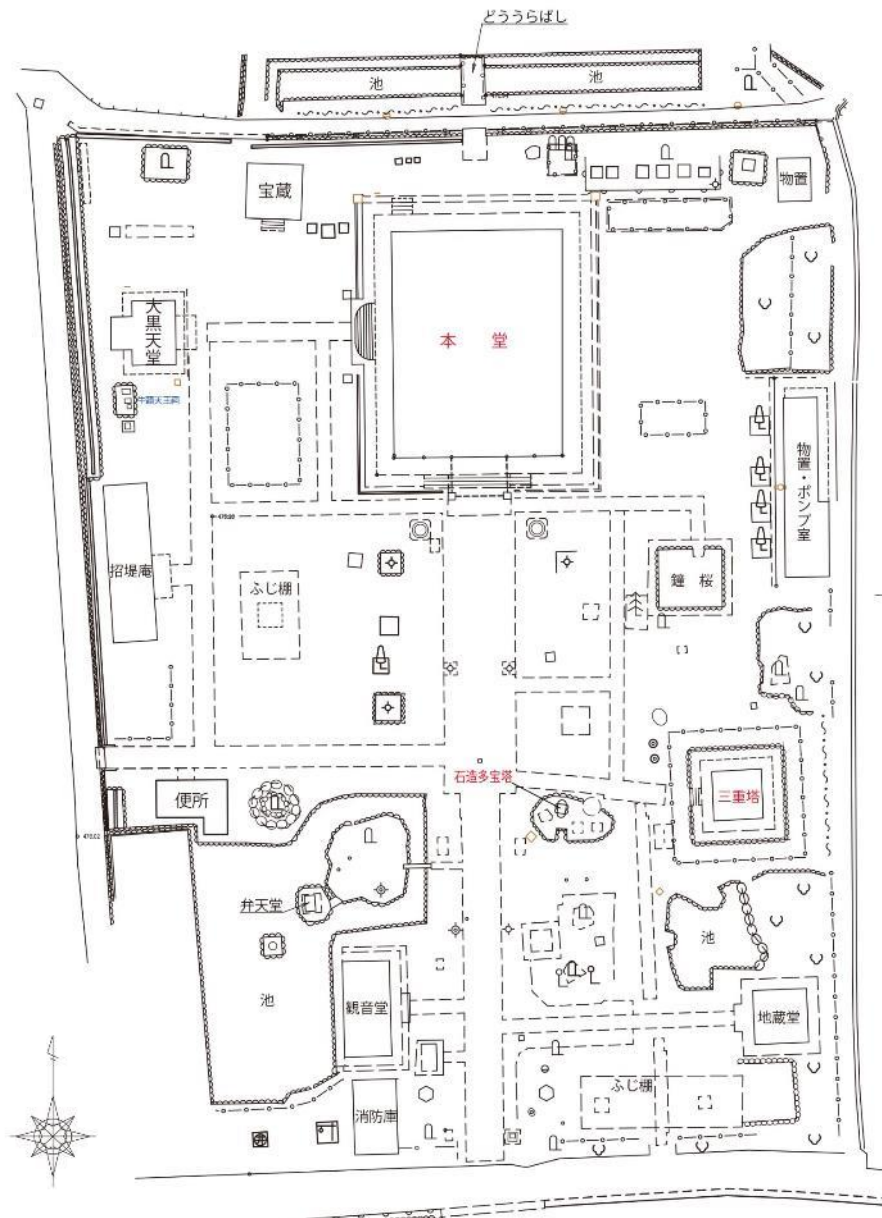
(工) 信濃国分寺石造多宝塔（市指定有形文化財 昭和 46 年（1971）指定）

現・信濃国分寺境内の三重塔の西側に存在し、高さ 152cm の石造文化財である。

この多宝塔について、いつごろのものかは断定できないものの、屋根の降り棟や軒の反りが直線的に表現される点や、軒先の切口が垂直である点など、各部の様式、手法などから鎌倉時代の造立と推定されている。市内の石造文化財としては、年代的には別所温泉の常楽寺にある鎌倉時代の石造多宝塔（国の重要文化財）に次ぐものとみられ、全国的に見ても貴重なものである。



信濃国分寺石造多宝塔



現・信濃国分寺の伽藍配置

ウ. 歴史的風致を形成する活動

(ア) 八日堂縁日 (未指定)

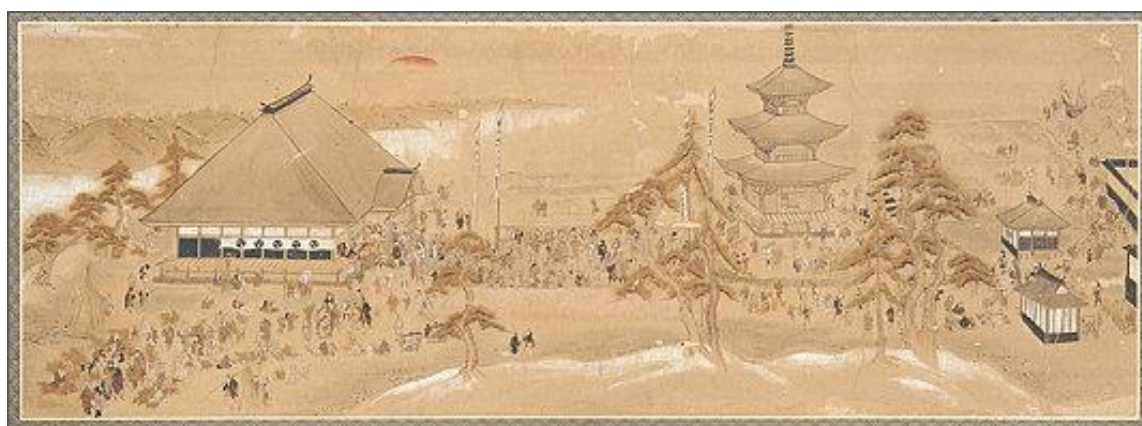
八日堂縁日は毎年1月7日及び8日に催されており、創建以来の信仰を今に伝えている。信濃国分寺の境内では、厄除けと招福を願う護符として「蘇民将来符」の頒布や福ダルマ市が開かれ、参道や沿道には露店が出店する。

八日堂縁日には、県内だけでなく関東地方からも多くの参詣者が詣でる。参詣者は信濃国分寺駅や、周辺に開設された臨時駐車場を利用して信濃国分寺を訪れており、境内や周辺の集落内を多くの人々が行き交い、賑やかとなる。

また信濃国分寺跡が広がる上沢、下堀、国分自治会の家庭には、縁日に親戚縁者が集まり縁日に詣でる。訪れた人々が、購入したダルマや蘇民将来符を持ち歩く様子が集落の各所でみられる。



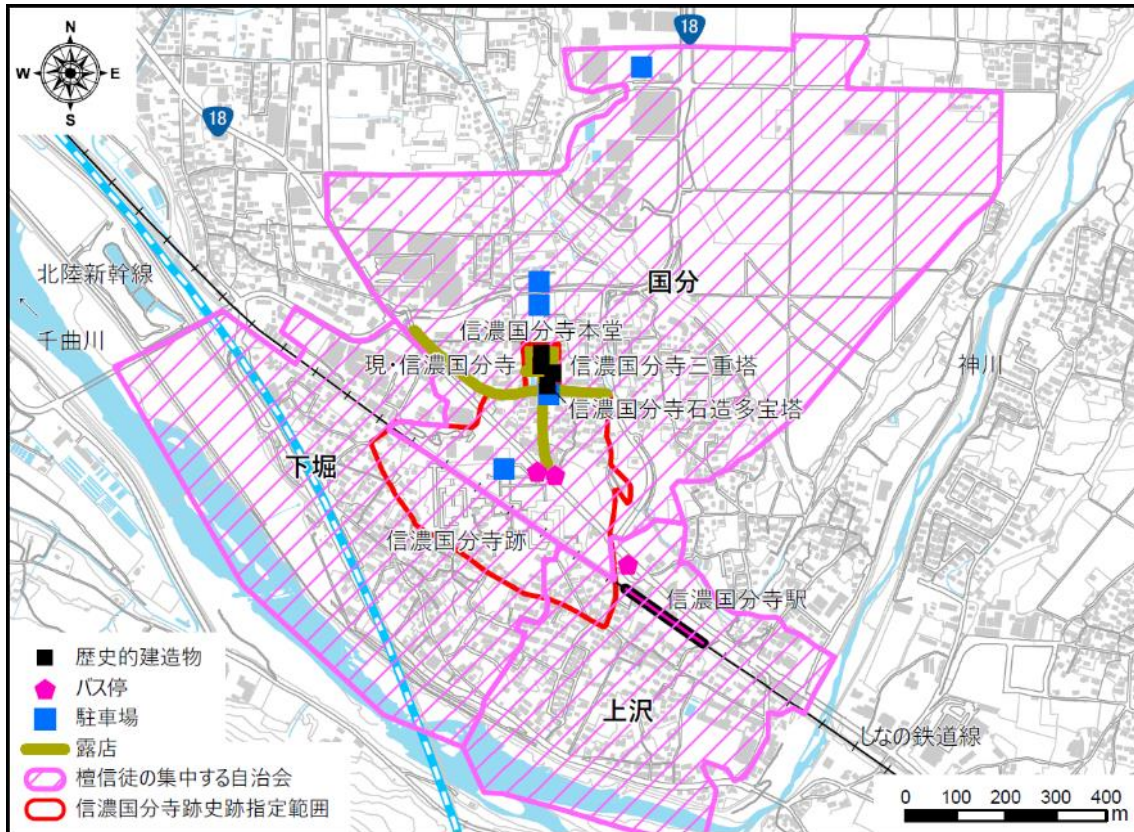
八日堂縁日



八日堂縁日図 (江戸期)

出典：上田市デジタルアーカイブ

八日堂縁日がいつごろから行われているのかは定かではないが、市指定の有形民俗文化財である「八日堂縁日図」は、江戸期の八日堂縁日の様子を描いたものであるとされる。八日堂縁日図に描かれた人の数は363人で、いろいろな生活用品や縁起物が売買されており、庶民で賑わう縁日の様子を伝える。



八日堂縁日の広がり

(イ) 上田市八日堂の蘇民将来符頒布習俗

(国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 平成12年(2000)選択)

① 起源

信濃国分寺における蘇民将来符の頒布がいつごろから行われているのかは定かではない。しかしながら、蘇民将来符の起源については文明12年(1480)に書き写された「牛頭天王祭文」(市指定有形文化財)に記されており、室町時代にまで遡ることができる。「牛頭天王祭文」の写しは全国に残されているが、信濃国分寺のものはそれらのなかで最古のものとなる。



蘇民講による絵蘇民頒布の様子

この祭文には、牛頭天王が^{きさま}后をみつけるために旅に出て、帰ってくる物語が記されている。金持ちだがいじわるの小丹長者に宿を断られたこと、貧乏だが情け深い蘇民将来に宿を借してもらったこと、いじわるな小丹長者は牛頭天王に滅ぼされるが、小丹長者の嫁になっていた蘇民将来の娘や一族は、牛頭天王から言われた通り、「蘇民将来^の子孫也」と書いた柳の札を^{しるし}標としてかけていたため、助けられたことなどが書かれている。



牛頭天王祭文（部分）

赤線部分に「蘇民将来の子孫なり」と書かれている。

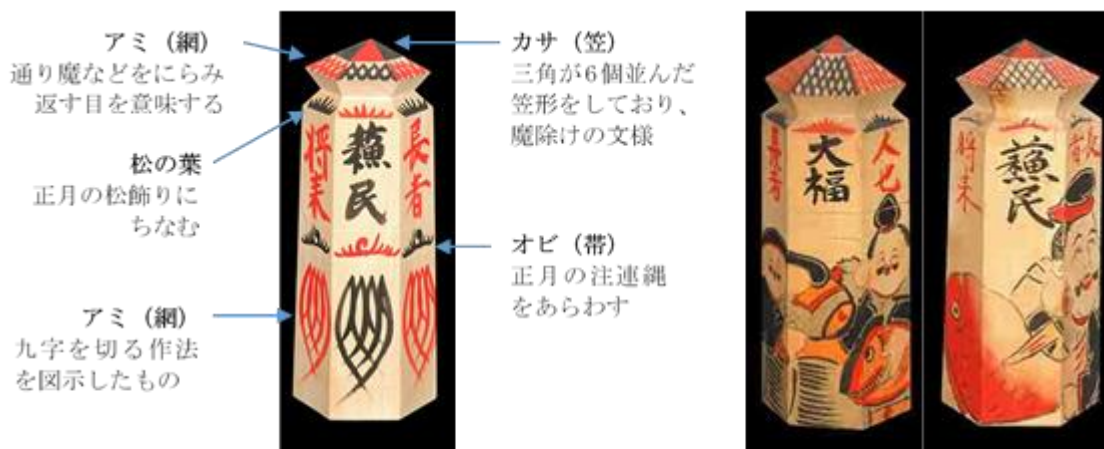
② 2種類の蘇民将来符と蘇民講

八日堂縁日において、国分寺三重塔や、国分寺本堂等がある境内では形は同じだが、デザインの異なる2種類の蘇民将来符が頒布されている。

1つは、「信濃国分寺」が頒布するもので、これは通年頒布されている。「大福・長者・蘇民・将来・子孫・人也」と記された下に、「オビ」(帯)と「アミ」(網)と呼ばれる模様が描かれる。

もう一方は「蘇民講」と呼ばれる人々によって製作・頒布される「絵蘇民」であり、八日堂縁日でのみ頒布される。蘇民講とは江戸時代以前から信濃国分寺の門前に家々を構えていた人々による組織であり、約40軒で構成されているが、現在は作る人の数が減り、約15軒で行っている。デザインの特徴は、帯や網の位置に、家々に伝わる七福神などが描かれる点で、時には流行を取り入れた絵柄が描かれることもある。

いずれの蘇民将来符も形状は同じで、その大きさは「^{だいたい}大大」といわれる27cmのものから、「ケシ」と呼ばれる1cmのものまで、9種類のサイズがある。



信濃国分寺による蘇民将来符

蘇民講による絵蘇民

※写真右の「蘇民」は、「蘇民」・「蘇民」いずれも使用する。

上田市八日堂の蘇民将来符頒布習俗で頒布される蘇民将来符の図柄

出典：上田市デジタルアーカイブ

③ 材料

蘇民将来符の製作に用いられるドロヤナギは、樹皮が泥を塗ったような灰色を呈していること、また材質が泥のように軟らかく加工しやすいことなどからこの名が付いたと言われ、地域によってはドロノキとも呼ばれる。

ドロヤナギは上田市域周辺では標高 700mから 1,200mにかけての山林に分布しているが、広葉樹林に混生している場合が多く、林業従事者の減少もあって山林に自生する原木の発見は難しくなりつつある。平成 5 年（1993）に上田営林署の協力により東部町（現東御市）の山林においてドロヤナギが多数植林され、原木の確保が図られている。これらの材料は蘇民講の人々に限らず、信濃国分寺の檀家の協力のもと集められている。

④ 製作過程

毎年 11 月に入ると、蘇民将来符を製作する準備が始まり、本市のほか近隣の東御市、長和町などからドロヤナギの原木が伐り出されて集められる。

師走の朔日（12 月 1 日）になると、信濃国分寺では蘇民将来符の作り初めの行事である「蘇民切り」が行われる。この日には寺の作業場に 20 名ほどの蘇民講の人々が集まり、切り初めの作業が行われる。最初に住職により

切り初めの儀式が執り行われ、刃物を用いる作業の安全が祈願される。続いて長老によって牛頭天王の御神体が作られる。これは特別な形態をした蘇民将来符で、境内の一隅にある牛頭天王の祠に祀られる。

「蘇民切り」の作業はその日の夕方まで行われ、夜には寺から一飯が出されて食事をし、定められた酒肴により酒宴を開く。その後、1 月まで蘇民講の人々は各自の家で蘇民将来符づくりを行う。

蘇民将来符の製作には蘇民包丁と呼ばれる包丁に似た特殊なナタやカンナ、ノミなどが用いられ、全て手作業で行われる。形が出来上がったものには住職や寺関係者が墨と朱で文字や文様を書き入れ、仕上げが終了する。

年が明けて 1 月 7 日には製作した蘇民将来符を寺に納めて護摩の祈祷を受けたあと、翌 8 日の朝、本堂前の石畳の両側に並べて頒布している。



「蘇民切り」の様子



蘇民包丁

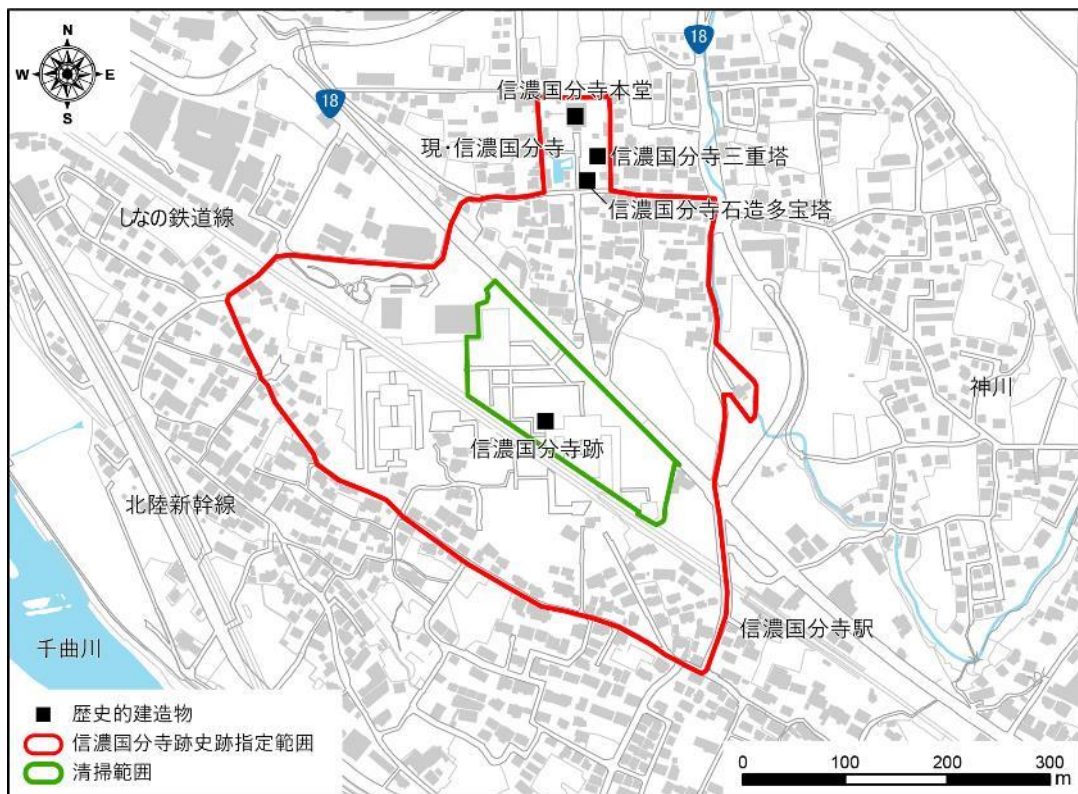
(ウ) 信濃国分寺跡における地域住民による保存活動

信濃国分寺跡の発掘調査では、地域住民が作業に参加してきた。特に重機などの掘削機械などが発達していなかった昭和 30 年代の発掘調査は、肉体的な負担も大きくなか、地域住民が献身的に作業に従事した。調査終了後、昭和 40 年代後半から進められた公園整備の段階においても、地域住民が公有化の同意取付や契約を推し進め、行政と協働して取り組んだ。

昭和 26 年（1951）に八日堂の法灯を発揚させるために結成された「八日堂復興会」も発掘調査には全面的に協力しているほか、昭和 40 年（1965）の開帳に際しては、参拝道の整備拡張のほか、史跡の保存も行っている。（昭和 41 年（1966）発行「八日堂物語」）

このように、地域住民が積極的に取り組んだ史跡整備への意識は引き継がれており、地元自治会の神川振興会、上田城南ライオンズクラブなどが参加する清掃活動が少なくとも 1980 年代から現在まで行われている。

そのほかにも、地元の神川小学校では昭和 60 年（1985）から史跡内の清掃活動に取り組んでいる。

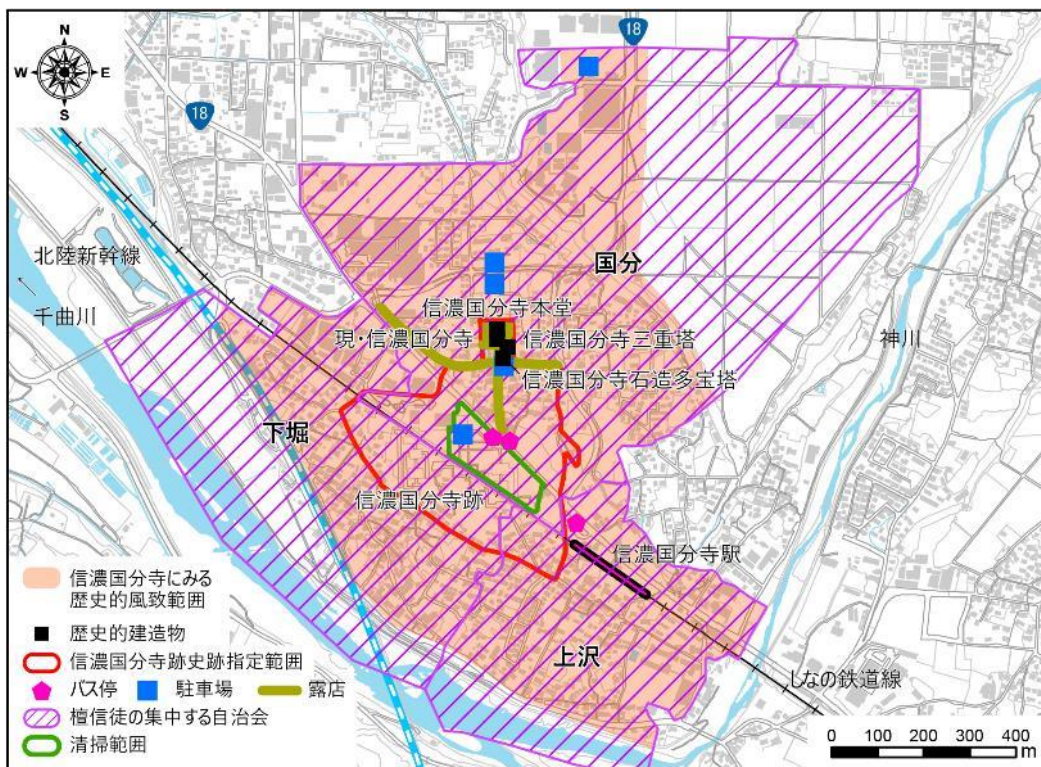


清掃活動の範囲

まとめ

信濃国分寺における歴史的風致は、奈良時代に創建された古代の信濃国分寺と、その衰退後にごく近い場所において復興した現在の信濃国分寺によってその基盤がつくられてきた。一時的な衰退はあったものの、天平以来 1300 年にわたる法灯が、寺や壇信徒、蘇民講、そして保存活動に携わった人々の力によって今日まで受け継がれている。

特に八日堂縁日では、現・信濃国分寺境内で頒布される蘇民将来符やダルマを求めて、近在の住民はもちろん、市外・県外から多くの人々が詣でる。境内の歴史的建造物が建ち並ぶ合間や、参道に立ち並ぶ露天屋台では、参詣人が土産や祭りの酒肴を求めて賑わう。その様子は境内や参道だけでなく、史跡公園や養蚕家屋が建ち並ぶ周辺の市街地にまで広がりを見せ、国分、下堀、上沢自治会のいたるところで近在の住民が、蘇民将来符やダルマ、酒肴を手にし歩き回る姿を目にすることができる。こうした近在の家庭では、正月の集まりやあいさつ回りより、この縁日を機会として、親戚縁者が集まることも多い。これらは将来にわたって受け継ぎたい歴史的風致である。



信濃国分寺にみる歴史的風致の範囲

ア. 3つの温泉地の概要

(ア) 鹿教湯温泉

鹿教湯温泉は、内村川沿いに約 20 軒の旅館やホテルが存在するほか、リハビリテーションで有名な鹿教湯病院や健康増進施設のクアハウスなども存在し、「健康の里」を体感できる温泉街となっている。鹿教湯温泉は「鹿教湯集落」及び「町集落」からなり、それぞれに集落住民が管理する共同浴場を有している。温泉名は、鹿に姿を変えた文殊菩薩が信仰心の厚い獵師に温泉の場所を教えたという開湯伝説に由来しており、温泉地の川沿いにある文殊堂には行基が彫ったとされる文殊菩薩像が安置されている。行基の弟子である円行がこの地に文殊菩薩像を持って来た時には既に温泉が湧いており、約 1200 年前に開湯していたとされる。温泉の効能から、湯治場として栄え、江戸時代には上野国新田郡の代官が湯治に訪れた記録も残っている。また、明治 25 年 (1892) 発刊の『信濃温泉誌』に、共同浴場を利用した湯治の様子が文殊堂の挿絵とともに紹介されており、このころから湯治場として広く名が知られていたことがわかる。昭和 30 年代に入り新たな源泉採掘で得られた豊富な湯を旅館宿に引き込み内湯整備が進んだことで、湯治の中心は旅館宿に移っていったが、内湯と併せて共同浴場も利用されている。昭和 50 年代は団体保養客によって活況を呈したが、旅行形態の変化などもあり入込客数は平成期に入り減少した。時代の趨勢もあったが、湯治場から発展した温泉郷には未だ多くの温泉宿、温泉施設が運営され、健康づくりの取組と良好な泉質や環境に惹かれた入浴客が足を運んでいる。



鹿教湯温泉概観



鹿教湯温泉街



鹿教湯温泉

(イ) 大塩温泉

大塩温泉は国道254号沿いの内村川支流の大塩川沿岸と集落内に温泉施設をもつ温泉地で、湯治場の歴史を引き継ぐ共同浴場がある。共同浴場の東側一帯には、山に挟まれた丸子温泉郷の中ではあるが、視界が開けた美しい田園風景が広がっている。昔から傷によく効く温泉として知られ、第二次世界大戦中は湯元旭館が「東京品川陸軍病院」の分院第1号に指定され、傷病兵の治療地となった。温泉の効能はラジウムの含有によるものであることが分かっている。現在も営業を続けている旅館は1軒であるが、最近になって、旅館組合の後継者が温泉を活用した飲食店や健康づくりサービス事業を起業するなど、大塩温泉の泉質を生かした温泉地の再興が進んでいる。



大塩温泉共同浴場



大塩集落の田園風景



大塩温泉

(ウ) 霊泉寺温泉

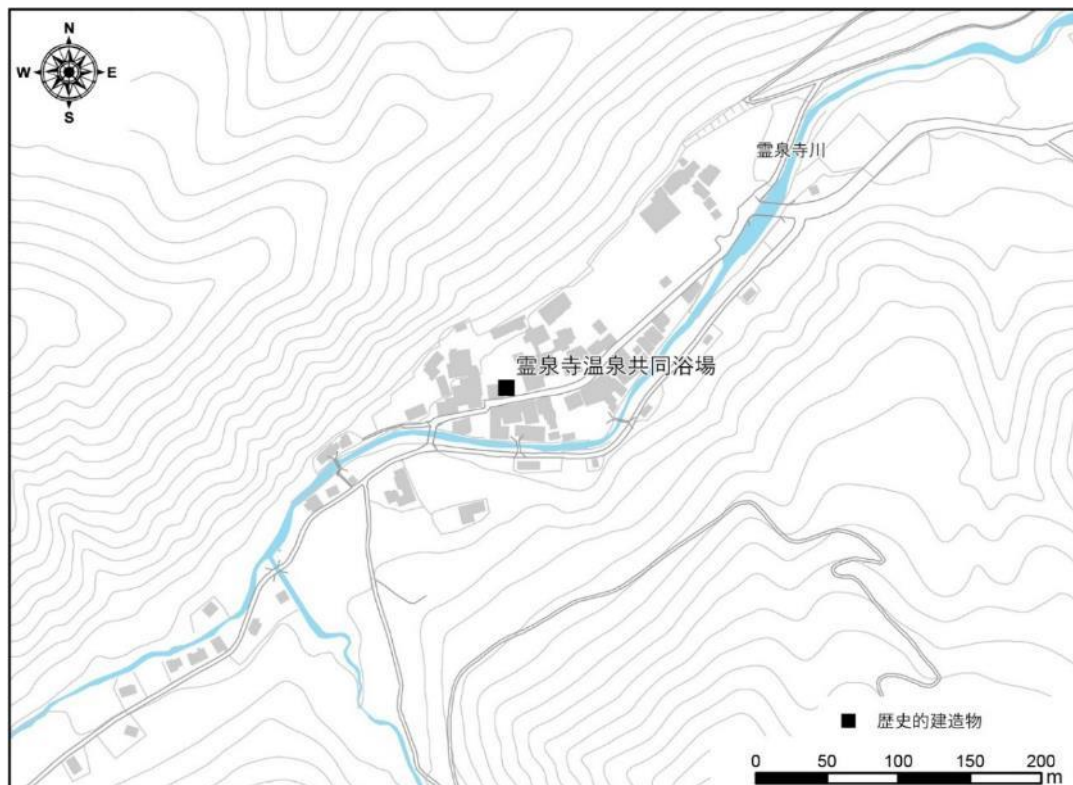
霊泉寺温泉は、内村川の支流である霊泉寺川上流に向かう谷間、霊泉寺の門前温泉として道沿いに4軒の旅館が存在する。霊泉寺温泉は、戸隠の鬼女を退治した平維茂が、疲れと傷を癒したと言われており、このお湯を守るため霊泉寺を建立し境内に湧きだす温泉を人々に開放したと伝えられている。寺湯としての長い歴史をもつ“秘湯”であり、文豪武者小路実篤が逗留してこよなく愛したことでも知られている、自然に包まれた落ち着きある雰囲気が魅力の保養温泉地である。最近では、旅館組合や住民の有志からなる「霊泉寺温泉自然JUKUプロジェクト」が立ち上がり、周辺の森林や美しい溪相を持つ霊泉寺川をフィールドに、観光客に環境教育や里山のある暮らしを感じてもらえるイベントの開催や体験プログラムが行われるなど、特色ある温泉地づくりが進められている。



霊泉寺温泉



稚児が淵



霊泉寺温泉

イ. 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 丸子温泉郷の共同浴場

かつての湯治客は、自然湧出する湯の近くに設けられた共同浴場を利用していましたが、昭和 30 年代に旅館に内湯が整備されて以降、共同浴場は地域住民の浴場や日帰り温泉としての利用が中心となってきている。しかしながら、今でも観光客や旅館宿泊客の一部は共同浴場を利用しており、地域住民との触れ合いが見受けられ、湯治場として栄えていた雰囲気が残る。

丸子温泉郷には 4 つの共同浴場があり、それぞれの地域の大切な交流の場として、集落住民や事業者のほか行政も関与して管理運営される仕組みは地域独自の伝統によって作り上げられたものである。

共同浴場と関連施設

	鹿教湯温泉文殊の湯	町・高梨共同浴場	大塩温泉共同浴場	霊泉寺温泉共同浴場
建物所有	上田市	上田市	上田市	上田市
所在地	鹿教湯集落	町集落	大塩集落	霊泉寺集落
利用源泉	鹿教湯温泉 2・3・4・5・6 号の混合泉		大塩 5 号泉	霊泉寺温泉 2 源泉
関連施設	源泉、揚湯ポンプ、混合・分湯施設		源泉、揚湯ポンプ	源泉、揚湯ポンプ
泉質	単純温泉・カルシウム・ナトリウム硫酸塩泉		単純温泉	カルシウム・ナトリウム硫酸塩泉

① 町・高梨共同浴場（未指定）

旅館の内湯整備が進むなか、町・高梨の両集落の強い要望によって昭和 33 年（1958）に、かつて西内村が建設した木造モルタル造りの共同浴場を西内地区が借り受け、受益者である集落住民によって維持管理されてきたものを、昭和 46 年（1971）に旧丸子町がより強固な建物に改築し現在に至っていることが市の記録からわかる。源泉は西内地区にある 5 つの温泉を混合したものを引いている。地域住民の生活に合わせ早朝の午前 6 時から夜は午後 9 時 30 分まで年中無休で営業し、日々の清掃業務や入浴料の回収といった維持管理運営は今でも町・高梨集落の住民によって行われている。



町・高梨共同浴場

② 霊泉寺温泉共同浴場（未指定）

古くから地域の人々により慣習的に利用されていた共同浴場で、明治期に入り国に移管された温泉の権利を大正7年（1918）2月に旧西内村が購入し、村営の共同浴場となった。現在の施設は旧丸子町によって昭和45年（1970）に建設されたものであることが市の記録からわかる。昭和29年（1954）までは共同浴場付近で自噴していた温泉を利用していましたが、同年12月にボーリングに成功して以降は源泉井戸から揚湯した温泉を浴槽用に使っている。定休日を設けず毎日運営されており、地域の住民の生活に欠かせない施設となっている。



霊泉寺温泉共同浴場

(イ) 文殊堂（県宝 昭和63年（1988）指定）

鹿教湯温泉の東端を流れる内村川を臨む山の緩斜面を掘削して建てられている。伝承によると、天平年間（729～749）に僧行基が弟子円行に託して創立したといわれている。

文殊堂は元禄14年（1701）に着工し、宝永6年（1709）に完成した。桁行3間、梁間4間、入母屋造で正面の向拝には彫刻のある頭貫・蟬股等があり、連三斗に組まれて石の礎盤上に立っている。



文殊堂

当初は正面・側面とも柱4本の正方形の建物であったが、後に下屋庇が付けられ、現在側面の柱は5本になっている。屋根は銅板葺き（かつてはこけら葺き）の入母屋造で、正面中央の向拝付近や、周囲の欄間などに多くの彫刻が施され、柱・組物などは鮮やかに色が塗られている。また天井にも絵が描かれ、装飾豊かな建物である。重厚感があり、江戸時代中期、元禄時代の仏堂の作風を明瞭に示す、県内でも数少ない貴重な建築物である。

(ウ) 湯元旭館（未指定）

西内地区の大塩集落に位置する。昭和54年（1979）に現在の共同浴場が建設されるまでは、大塩川沿いの斜面に湧き出る源泉のすぐ近くに共同浴場があって、旭館はその共同浴場と川を挟んだ向かいに建つ。明治期から共同浴場に隣接する湯治客の宿として営まれ、画家や大正天皇侍従などが遠方からも訪れる癒しの宿として親しまれてきた。

建物は大正期以降に増改築された木造3階建（一部2階建）で、戦前に撮影された写真や市の資料から昭和初期に形づくられたと思われる。内装の多くはリフォームされているが、外壁部の真壁にはかつての面影が感じられ、また、躯体部や浴槽には当時を物語る貴重な部材や施工技術の一端が見られる。



大塩温泉 湯元旭館

(エ) 温泉祖神（未指定）

鹿教湯温泉のメイン通りにあり、木造の祠のなかに大黒天の木彫りが安置されている。祭神は恵比寿大黒で、日本最古の湯とされる道後温泉の大国主大神の逸話にちなんで温泉祖神に大黒天を祀ったと地元では言い伝えられている。大黒天の彫刻には寛文4年（1664）11月吉日と書かれている。文殊堂の守門神と共に山門に安置されていたが、明治の神仏分離令をうけ文殊の湯共同浴場の前に移り、その後現在の位置に置かれるようになった。祠の羽目板には文殊堂山門との墨書きがあるほか、石灯籠に明和7年（1770）と彫られている。



温泉祖神

毎年11月23日に祭礼が行われる。鹿教湯集落の役員が祠や大黒様を清掃し、お神酒や供物を供え有志とともに拝むという簡単な祭事であるが、古くからつづけられており、昭和10年（1935）の『西内時報』に記録が残されている。

(オ) 諏訪神社上社（未指定）

鹿教湯温泉の東隣の高梨集落の山裾に位置する。高梨神社とも呼ばれ、旧高梨村の産土神と諏訪明神が祀られている。明治時代に旧西内村の近隣の神社を合祀し、それを記念し、毎年7月27日前後に祇園祭が開催される。

本殿は石段を登った高い場所に建てられている。覆屋を兼ねた拝殿は、屋根と柱のみの切妻造、本殿は一間社流造で屋根はこけら葺、3方向に縁が廻されて彫刻の施された脇障子が立てられている。

神楽殿は江戸時代に建てられたとされ、茅葺（現在は鉄板葺）で寄棟造である。昔は廻り舞台が備わっていたが、現在では板が張り直され、地下の空間だけが残っている。昭和33年（1958）8月発行の『西内時報』には、祇園祭において奉納される三頭獅子の舞とともに現存する神楽殿の写真が掲載されている。



高梨諏訪神社の神楽殿

ウ. 歴史的風致を形成する活動

(ア) 湯治・保養温泉地としての営み

丸子温泉郷は、農村集落に湧出した温泉を、住民が源泉や共同浴場という地域資源を守りながら、湯治場を保養温泉地へと発展させてきた。

① 集落住民による共同浴場の運営

丸子温泉郷にある共同浴場は、時には観光客が外湯として楽しむが、主には集落住民の日常の浴場として利用されており、多くの住民が桶を片手に共同浴場を訪れる。各施設とも旧丸子町によって建替がなされたが、料金収納や日々の浴場の清掃といった業務は地元住民や地元旅館組合が行っている。

町・高梨共同浴場では、町及び高梨集落の自治組織に温泉部長・温泉係を設け、料金の収受・入金ならびに清掃、衛生管理を自治組織から選ばれた住民が行っている。この管理体系は、昭和46年（1971）の建設請願書に記載があり、長年にわたり続けられていることがわかる。また、住民総出で行われる春と秋の地域美化活動の際には、毎晩の清掃ではできない天井のカビ取りやクモの巣払い、その周辺美化作業を一斉に行うのが開館当時の恒例行事となっている。このほかにも、閉館間際まで入浴していた地元常連客が、閉館後に浴槽を清掃する仲間のことを気遣い、誰言うとなく「風呂の栓を抜くぞー」と声をかけ湯船のお湯をはらうことや、最後になった人が浴室の照明を消して帰るといった慣例がある。使う人と管理する人とが隔てなく、共同浴場を営んできたことの一部を感じさせる。



共同浴場を後にする常連の住民

鹿教湯温泉文殊の湯は、文殊堂に近い鹿教湯温泉の中心地に立地し、観光客の利用者が最も多い共同浴場である。明治期から共同浴場として発展した湯治場・鹿教湯温泉の発祥地として、幾度も改築され、今も住民や旅館事業者による管理運営が継続されている。

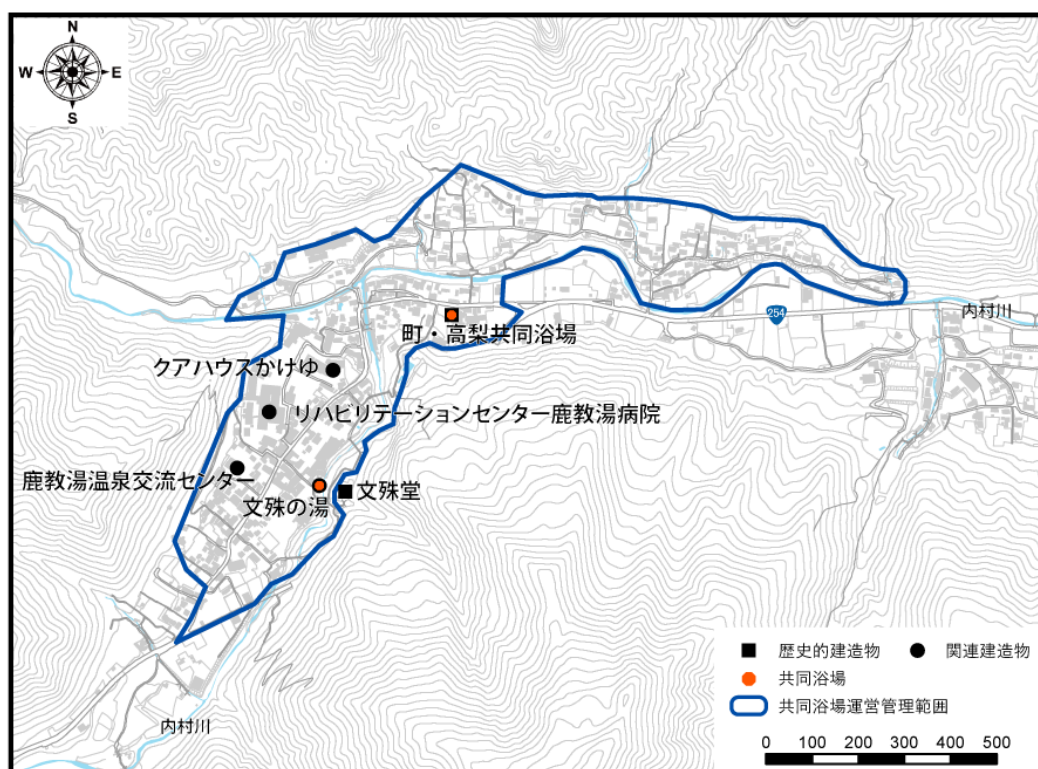
大塩温泉共同浴場においても、管理清掃、利用料入金といったことを住民が行い、温泉地が守られてきた。かつては当番制で自主運営され、施設の移転・改築を経て旧丸子町から大塩集落に業務委託されて以降も住民の中から互選された係によって管理が行われている。

霊泉寺温泉共同浴場は、営業時間は午前7時から午後9時までと長く、また昭和45年（1970）の改築以前より定休日を設けないなど、利用する住民の生活にあわせ長年運営されてきた。集落が暗く静まる夜には、遅くまで清掃する共同浴場や公民館となっている建物2階会議室から光が漏れ、共同浴場周辺が地域の核となっていることが見てわかる。

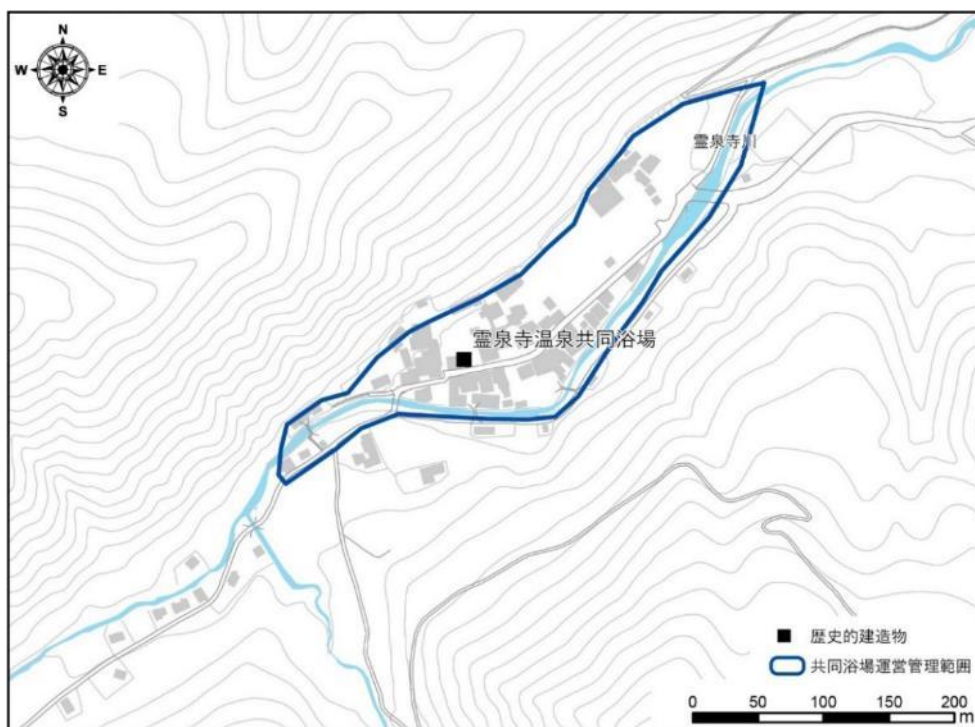
このように、自治会や旅館組合といった関係団体によって共同浴場が管理され、保養温泉地のルーツでありコミュニティの場でもある浴場を生かす活動が続けられてきている。

共同浴場の所在地と関係団体

	鹿教湯温泉文殊の湯	町・高梨共同浴場	大塩温泉共同浴場	霊泉寺温泉共同浴場
所在地	鹿教湯集落	町集落	大塩集落	霊泉寺集落
所有者	上田市	上田市	上田市	上田市
管理運営	鹿教湯温泉旅館協同組合	西内自治会（町・高梨）	西内自治会（大塩）	霊泉寺温泉旅館組合



鹿教湯温泉共同浴場の維持管理



霊泉寺温泉共同浴場の維持管理

② 市民協働による保養温泉地づくり

鹿教湯温泉では、住民と病院や観光協会といった関係機関、行政が連携した保養温泉地としての活動が続けられている。内村温泉郷（現在の丸子温泉郷）が昭和31年（1956）に国民保養温泉地の指定を受けると、旧丸子町は『内村温泉郷温泉地計画』に基づき、温泉地を周る遊歩道、歩行者用の橋、駐車場といった整備を行う。一方で、地域住民や旅館事業者は、「内村温泉郷温泉地計画」に盛り込まれた国民保養温泉地にふさわしい環境衛生の保持に力を入れることになる。さらに、昭和30年代後半から、鹿教湯温泉療養所を訪れる宿泊保養者が急増し、鹿教湯の旅館の分宿するようになると、地域全体で集団保養客を受け入れていこうとする機運が高まり、歩行運動のために設けられた遊歩道や溪谷に架かる橋の周辺環境美化を重点的に取り組むこととなる。今も続けられる観光協会や地域住民による定期的な活動においても、草刈りやごみ拾いなどの一般的な作業に加え、歩道の段差の有無やベンチの傷み具合といった、リハビリ患者や観光客の目線に立った確認作業を行う。その際、忘れ去られた歩行補助用の杖を見つけることがたびたびある。



内村温泉郷温泉地計画書



整備された遊歩道と五台橋

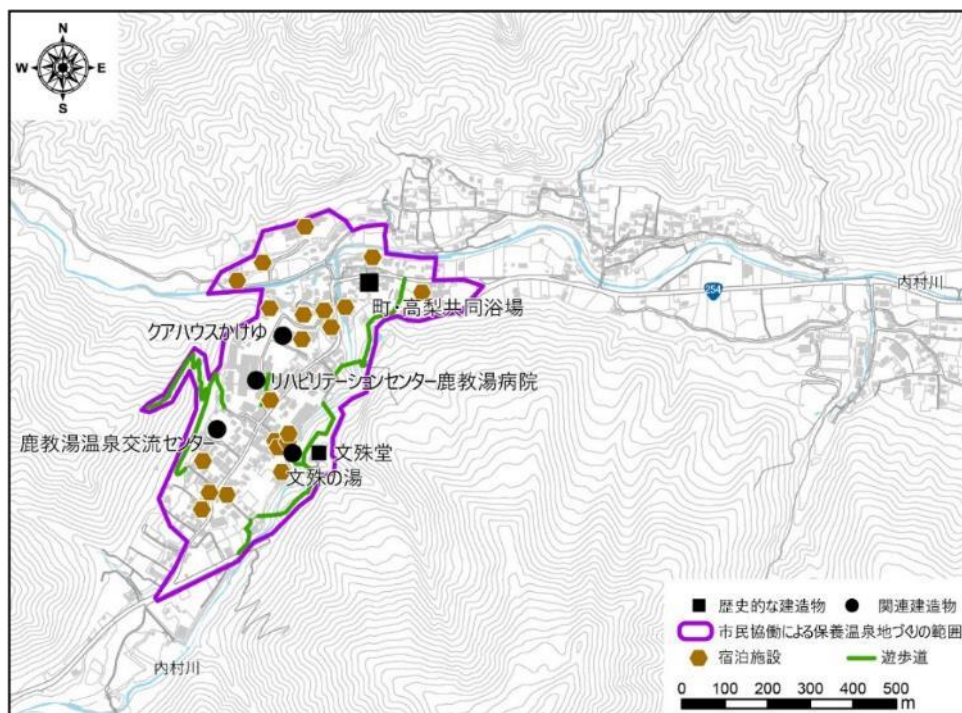
また、健康増進をテーマとする様々な活動が行われている。鹿教湯三才山リハビリテーションセンター鹿教湯病院では、脳卒中の回復期リハビリ患者のためのレクリエーション事業を行うようになり、昭和 47 年（1972）には病院の「運動会」が始まり、旅館事業者や地域住民との交流もかねた鹿教湯病院祭は今も継続して行われている。これらの病院の地域交流行事のあるこの日は、普段は静かな温泉街も賑やかな雰囲気に包まれる。さらに昭和 53 年（1978）には、鹿教湯病院の健康づくり取組を拡大するかたちで、鹿教湯病院、観光協会、旧丸子町が一体となった「健康の郷づくり」の推進体制が築かれ、その活動の 1 つとして「朝の健康体操」が始められた。地域住民、観光客、病院関係者など誰でも気軽に参加できる体をほぐすためのストレッチ体操で、現在も毎日 9 時から文殊堂境内で行われている。体操の指導には上田市の健康増進施設（クアハウスかけゆ）のトレーナーがあたっている。朝の 9 時前になると文殊堂に向かうまでの温泉街や遊歩道を通る参加者の姿を見ることができる。



病院祭での地元小学生の演奏



「健康広場」での朝の健康体操
(文殊堂境内)



市民協働による保養温泉地づくり

③ 温泉地を支える旅館組合と地域住民の営み

大塩温泉では、地域住民と旅館組合により温泉を核とした地域づくりが進められてきている。昭和28年(1953)の旧大塩温泉共同浴場(湯元旭館の東向い)の改築は地域住民の強い要望によって、また、昭和29年(1954)の新規ボーリングは大塩温泉旅館組合長(湯元旭館の代表)の呼びかけにより実施された。

昭和31年(1956)の国民保養温泉地の指定に際して策定された『内村温泉郷温泉地計画書』には、地域住民による清掃美化活動が謳われており、これを契機に地域住民と旅館組合による自主的な環境保全活動が活発となる。住居周辺の身近な場所の環境衛生に加え、旧大塩温泉共同浴場周辺に整備された湯治客のための駐車場や観光客がよく利用する沿道などの美化活動も行われた。昭和45年(1970)の自治会資料に、美化活動の実施が記録されている。

現在は4月29日の祝日、6月中旬、7月末の年3回、住民総出で作業を行う。4月29日は午後1時に、6月と7月は午前7時に現在の共同浴場に集まり、その年の役員指示のもと、共同浴場の駐車場、国道から旅館組合が管理する源泉施設までの道、集落道路といったそれぞれの持ち場へ行き、草刈りやごみ拾い、河川清掃などを2時間程度行う。参加者は、最近の共同浴場の混み具合や農作物の生育といった世間話を交えながら作業を進める。定期的に草刈りが行われた北斜面の土手には多年草の「アズマイチゲ」が群生し、雪解け後の3月に小さい白い花が一斉に咲く様子は散策する人々の目を和ませている。



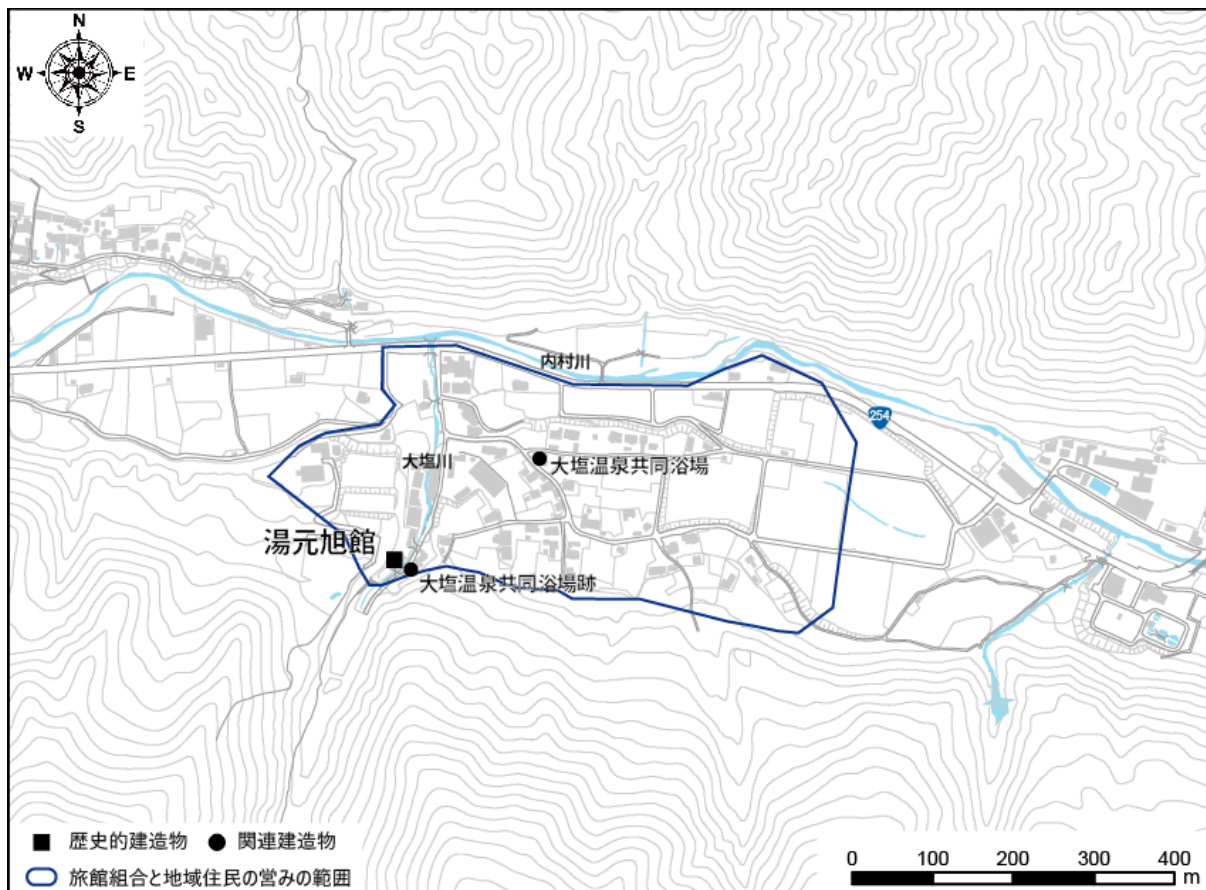
大塩温泉共同浴場跡
(湯元旭館の東向い)



環境美化作業



土手に群生するアズマイチゲ



旅館組合を中心とした大塩温泉を支える地域の営み

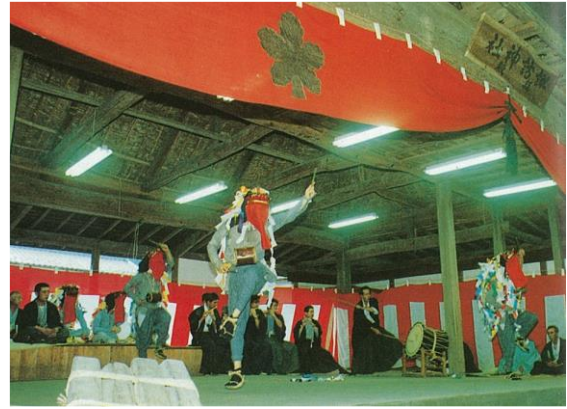
(イ) 西内地区の祇園祭と諏訪神社上社の三頭獅子舞・ささら神事

西内地区では、毎年7月27日（最近では第4日曜日）に高梨集落にある諏訪神社上社で夏の無病息災と五穀豊穰を祈念した祇園祭が開催され、集落内から神社までを練り歩く行列のあと神楽殿で獅子舞の演舞が行われる。出発地となる鹿教湯温泉交流センターで衣装、^{のぼり}幟の準備を整えたのち、西内自治会役員、三頭獅子、^{かみしも}袴姿の多勢の警護とともに^{ほつれこ}初婿と呼ばれる、この1年間のうちに結婚した西内地区に住む男性が加わり、温泉祖神や町・高梨共同浴場の横を通り神社までを行列する。通過する温泉街のメイン通りは、普段は観光客やリハビリ患者が行き交うところであるが、この日ばかりは住民が主役となり地域の一体感を感じる厳かでにぎやかな祇園祭の雰囲気包まれる。



祇園祭での行列

神楽殿では、小型の獅子頭をかぶった一人立ち獅子が、腹に太鼓をつけ、笛とつけ太鼓に合わせて3人1組で踊る。雄2雌1の構成で地元では親獅子・中獅子・女獅子と呼ばれ、翌年の獅子役に当たるものが3人見習いとして手依りをつとめる。演舞は俗に「雌獅子隠し」といって、3頭が三角の形に踊っている間に雌獅子が抜け、雄獅子がこれを探して狂ったように踊り、再び雌獅子が登場して3頭揃って踊りを閉じる。

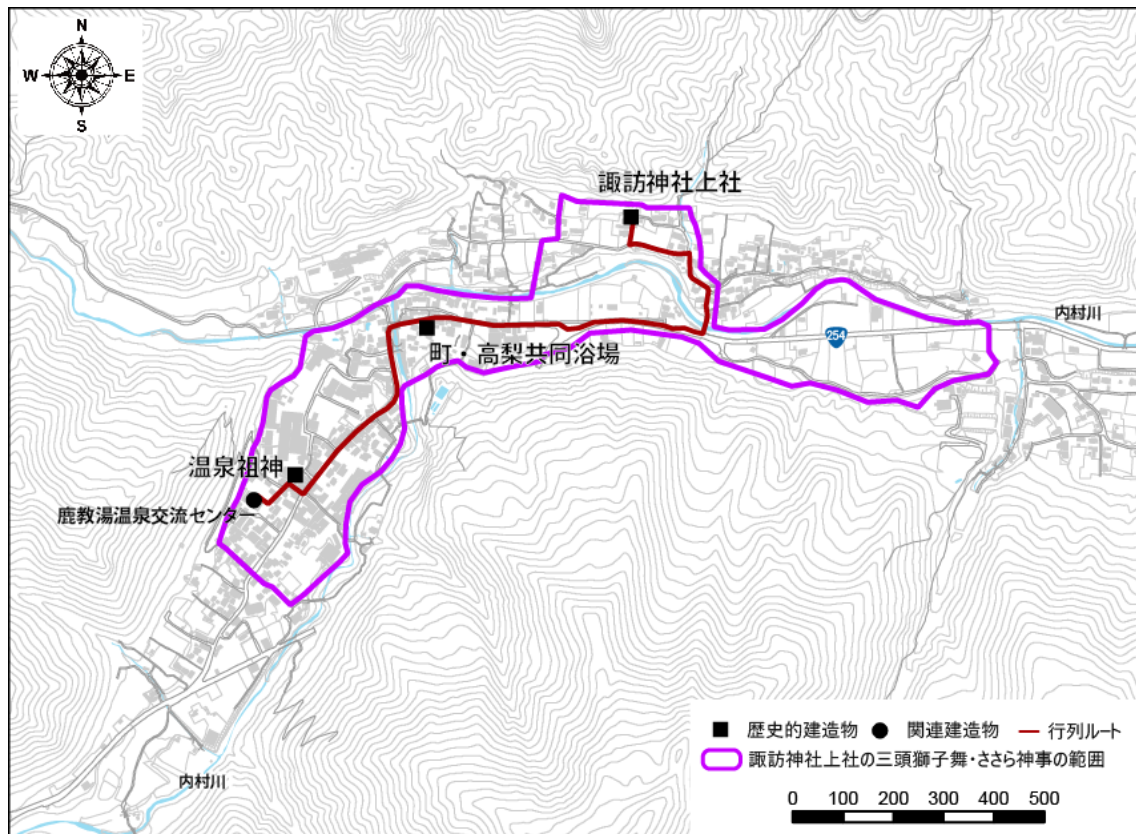


神楽殿での演舞

出典：丸子町誌

次に、この年生まれた子供を父親（祖父）が抱いて、獅子の先導で神楽殿の舞台に上がり、「ささら」と呼ばれる5色の短冊を結んだ笹竹を持ち、師匠と呼ばれる歌い手のささら歌にあわせ、神主を先頭に円を描くように舞台を歩いて回る。これは、産土神への宮参りの意味があるとされる。

高梨の三頭獅子の起源は定かではないが、昭和33年（1958）の『西内時報』には「田の草取りも一段落し、夏の避暑客が温泉地に集まっているときであるので休農慰安のためにも好適の行事と思う。」との記事が神楽殿の獅子舞の写真とともに紹介されている。



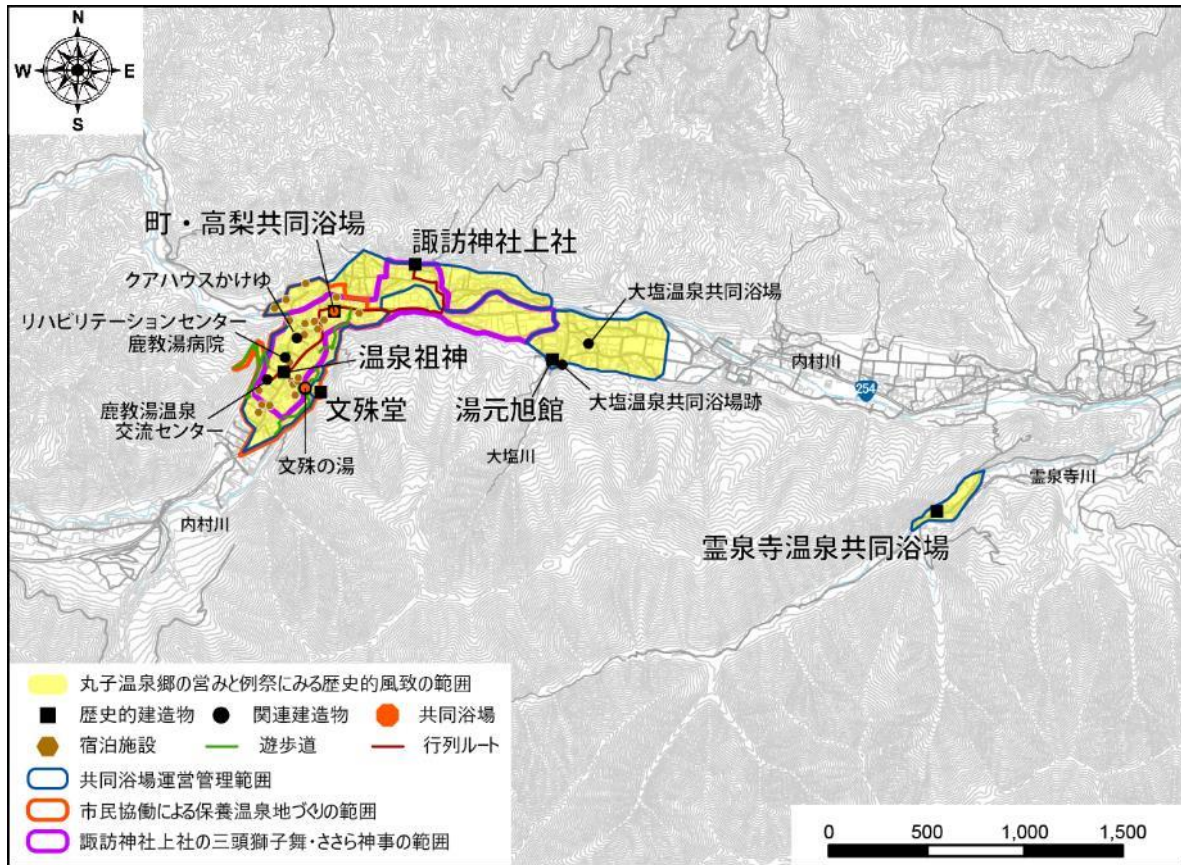
行列ルートと諏訪神社上社の祇園祭範囲

まとめ

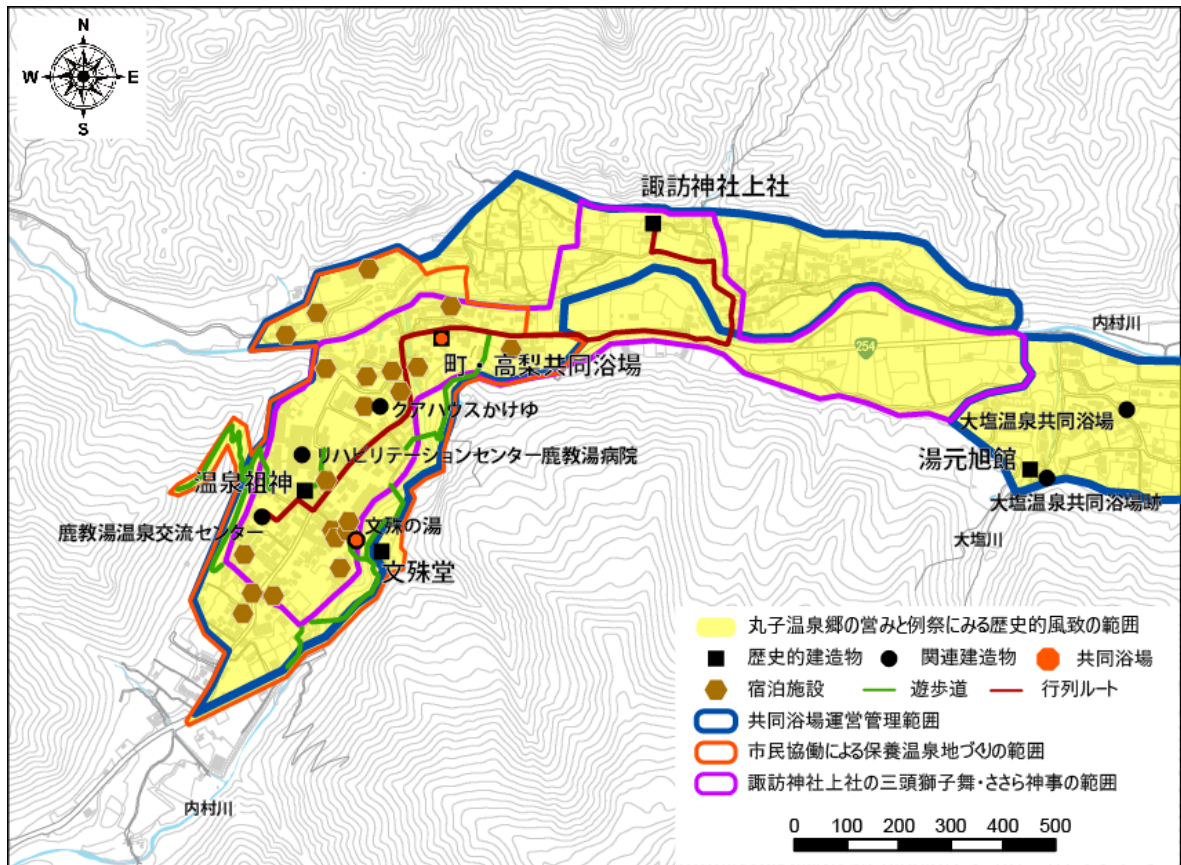
丸子温泉郷を構成する鹿教湯、大塩、霊泉寺にある共同浴場は、古くから住民の手で清掃や管理、運営がなされ、日々の浴場として住民らに利用されてきた。清掃する作業の音や人の声が漏れ聞こえ、湯けむりがたちのぼる共同浴場の風景や、住民が浴場へ通う様子は、古くから続く地域の光景である。旅館事業者や観光協会が牽引してリハビリ病院を誘致し、保養温泉地づくりが進められると、地域住民もこれに呼応し地域の環境美化がいたるところでみられるようになった。温泉街は賑わい、旅館と共同浴場とを往来する観光客だけでなく、リハビリに取り組む人々もみられるようになった。これだけでなく、温泉を核とする地域活性化の取組は今なお続けられており、温泉という共通する天然資源に恵まれた谷あいの集落にあって、それぞれの歴史と特色が感じられる温泉地が形成されている。

また、西内地区では、夏の無病息災・五穀豊穰を祈念する祇園祭が現在も受け継がれている。地縁を大切にしてきたこの地域の文化と伝統を象徴するもので、それを受け継ぐ西内地区全域の住民が集まり行列する光景は、観光客やリハビリ患者を癒すとともにこの地域特有の趣を感じさせる。

このように丸子温泉郷における温泉を核とした人々の営みと、例祭、それに関連した歴史的な建造物は将来にわたって残したい歴史的風致である。



丸子温泉郷の営みと祭礼にみる歴史的風致



丸子温泉郷の営みと祭礼にみる歴史的風致（鹿教湯温泉）

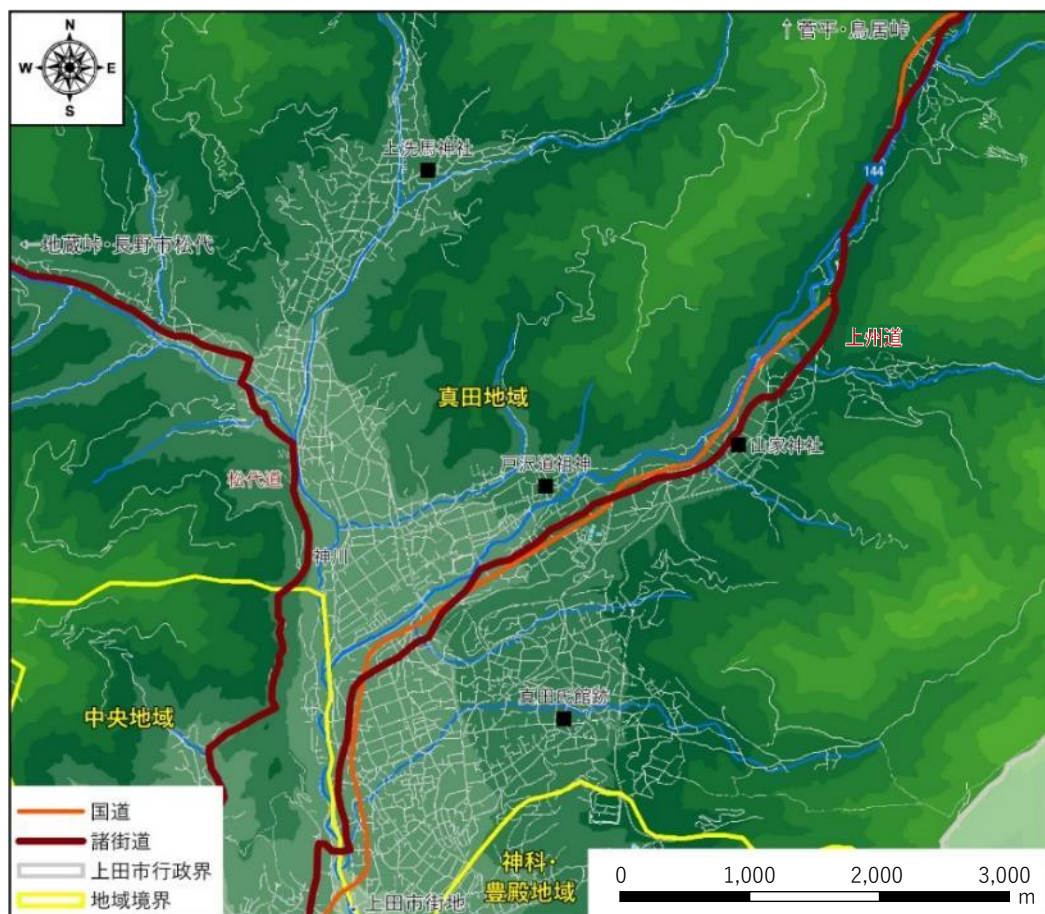
2-5. 真田地域の集落の祭礼にみる歴史的風致

はじめに

真田地域は、上田市街地から鳥居峠を越えて上州を経て江戸へ至る道として利用された上州道、地蔵峠を越えて長野市松代に至る松代道、また菅平を経て須坂市へ至る大笹街道の3つの主要な街道沿いに発達した地域である。人の往来が盛んであったことから、他地域から様々な文化や習俗が入ってきた。その文化の1つで今日まで守り伝えられてきた芸能に、獅子頭を使った三ツ頭獅子や大神楽と呼ばれる民俗芸能がある。これらの民俗芸能は地域の祭礼行事において神社等で奉納され、地域の人々が心を一つにして地域に幸を呼ぶ行事として大切に守り伝えられている。



真田地域の位置



真田地域周辺の地形

(1) 真田氏館跡で演舞される三ツ頭獅子

ア. 歴史的風致を形成する建造物

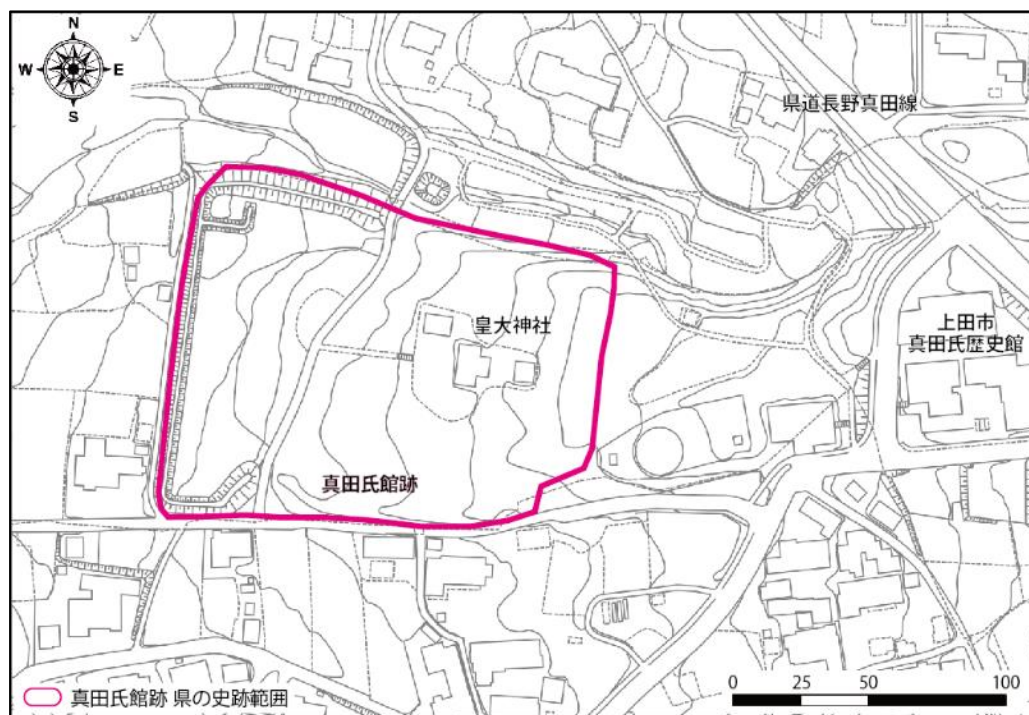
真田氏館跡（県の史跡 昭和42年（1967）指定）

真田地域南部の本原地区に位置する。真田氏の居館跡で地域の人々からは「お屋敷」と呼ばれる。敷地の周りには残る土塁は、西辺が130m、東辺が80m、北辺150m、南辺160mで、敷地は東側から西側にかけて緩やかに傾斜している。虎口（入口）の枳形などの遺構も残り、昭和42年（1967）に県の史跡に指定された。

北東に真田氏本城、東に天白城、北に神川を隔てて横尾城（尾引城）、西に砥石城が立地する。



真田氏館跡



真田氏館跡（県の史跡範囲）

真田昌幸が勧請したといわれる皇大神社が祀られており、三ツ頭獅子はこの境内を舞台として演舞される。

現在では、敷地全体は御屋敷公園として整備され、5月ごろには敷地内に植えられたツツジが見ごろとなり、観光客で賑わう。このツツジは、昭和初期に地元の青年会が真田地域の東側にそびえる烏帽子岳（標高2,066m）から採取し、植えたヤマツツジである。

平成4年(1992)の報告書『真田氏館跡－史跡整備に伴う発掘調査報告－』(真田町教育委員会)では、発掘調査からは年代決定となる資料が少ないために、館の構・改築年代は明らかにならなかったが、里伝や史実から、天文20年(1551)から天正11年(1583)の31年間あるいは天正元年(1573)から天正11年(1583)の11年間、真田氏の居館として利用されていたと推測されるとまとめている。



真田氏館跡のツツジ

イ. 歴史的風致を形成する活動

上原三ツ頭獅子(市指定無形民俗文化財 昭和54年(1979)指定)

真田地域の南部に位置する上原に伝わる獅子舞で、真田信綱が居館を築く際に、地固めの祭事に舞わせたと伝えられている。赤井・下塚・小玉上郷沢・下郷沢・上原の5区(旧上原区管理委員会)の住民で組織される上原三ツ頭獅子保存会で伝承されており、区ごとに当番家と呼ばれる役割を持ち回りで担当しながら運営されている。真田氏館跡内の皇大神社の境内で3年ごとに舞わ



上原三ツ頭獅子

れており、昭和11年(1936)の『本原時報』には、「三ツ頭獅子をお屋敷で行うことを決定した」との記述のほか、「本原村の古技として後々までも遺して置きたい」と記述されている。その後、昭和33年(1958)から10数年間休止したものの、昭和50年(1975)に再開し、昭和54年(1979)に市指定無形民俗文化財となった。

皇大神社の祭礼が明治以前は8月16日、明治以降は9月26日に開催され、三ツ頭獅子はその前後で、豊作の年のみ舞われていた。現在は5月の御屋敷公園のツツジ祭りにあわせて祭礼が行われることもあり、三ツ頭獅子も5月中旬に舞われることが多い。そのため3月に準備が始まると、赤井自治会集会場からは練習に励む声や笛の音が鳴り始める。週に1度の練習を数回行くと、皇大神社前へ練習場所を移す。祭礼の前日になると、集落の入り口や当番家を担う区の公民館へ二本の竹を立てて注連縄が張られ、集落に祭りの雰囲気漂い始める。

当日は、真田氏館跡に近い小玉上郷沢自治会の公民館に集まり、装いを整えるなど準備をし、真田氏館跡へと移動する。大手門の枡形で行列を整え、天狗面をつけた禰宜を先頭に3匹の獅子や笛や太鼓からなる獅子舞の行列が、鳥居前、拝殿前の広場へと進み、「玉ノスタレヲ巻キアゲテ」の歌で獅子が踊り始める。終われば社殿の周囲を一周し、笹持の竹を奉納し、裏参道から退出する。

以前は、皇大神社へ向かう前、庄屋の家で踊り検分を受けていたが、のちに区長宅や管理委員長宅へと変わり、現在は大手門を出発し、真田氏館跡内でのみ行列し、演舞している。近年では令和元年（2019）に舞われており、現在も続いている。



二本の竹で作られた注連縄



平成12年（2000）の上原三ツ頭獅子

出典：真田町誌



上原三ツ頭獅子の広がり

(2) 集落ごとに引き継がれる大神楽

真田地域では、獅子頭を使つての芸能を大神楽（または、大々神楽）と呼んでいる。大神楽は集落ごとに伝えられてきたが、担い手不足等で存続できなくなった集落も多い。そのようななかでも、いくつかの神社では地元集落の氏子による獅子舞が守られ、伝統の維持のみならず、世代間の交流も図られている。

ア. 歴史的風致を形成する建造物

(ア) 山家神社 里社（未指定）

山家神社は、真田地域東部の長地区に位置し、旧長村（現在の四日市・横尾・戸沢・つくし・石舟・十林寺・真田・横沢・角間・大日向自治会）の産土神である。祭神は大国主命・伊邪那美命・菊理媛命・日本武尊を祀る。上田城の鬼門にあたることから、上田藩主の信仰が厚かった神社で、四阿山頂にある奥社と真田集落にある里社からなる。延長5年(927)の『延喜式神名帳』に記載のある信濃国の式内社 46 社のうちの1社である。

里社は、天安元年(857)に現在の地に遷ったとされる。現在の社殿は、明治20年(1889)の大火で類焼し、翌21年(1890)に再建されたものである。近世の社殿は子安社のみが残り、その造営について、棟札から享保15年(1730)に上田藩主松平忠愛夫人が、

子安信仰のために修造したことがわかる。子安社は、間口1.3mの規模の一間社流造の社殿で、屋根は流板葺の上に鉄板を張っている。全体に朱の彩色が残り、木鼻や虹梁の絵様に18世紀前期の特徴が表れている。また、社叢は上田市の天然記念物に指定されている。

なお、四阿山頂の奥社は養老2年(718)四阿山に加賀国から白山社を勧請して白山大権現を祀ったとされている。山体を御神体として崇める白山信仰が盛んであり、「白山さま」とも呼ばれていた。奥社の扉には、永禄5年(1562)に真田氏三代の初代・幸隆が修築した記録が残されている。



山家神社 里社（上） / 子安社（下）

(イ) 上洗馬神社 (未指定)

真田地域北西部の傍陽地区にあり、旧上洗馬村(現在の^{かみせぼ}上横道・^{なかよこみち}中横道・^{しもよこみち}下横道・^{あなざわ}田中・^{みしまだいら}穴沢・三島平自治会)の産土神である。主祭神は大己貴命、天照皇大神、秋葉大神、大山祇命である。創立は応永元年(1394)とも、享禄4年(1531)とも言われ、諏訪神社を分祀したものとされる。元和6年(1620)に再建の記録がある。明治3年(1870)10月に現在の名称となった。本殿は上屋の中に立つ間口三尺の規模の一間社流造、こけら葺の社殿で、千鳥破風・軒唐破風をつけている。『真田町誌』作成時の建造物調査で全体に彫刻を施された様式から幕末期の建築とされた。主要な彫刻には、両側壁に鶴に乗る費長房仙人・亀に乗る蘆敖仙人などがあり、仙人や水に関連した題材を用いている。



上洗馬神社

本殿には、柱の表面に縦に並べた溝(胡麻殻^{ごまからじやく}決り)があり、縁を側面だけでなく背面まで廻すといった特徴があり、上州系の^{こうしよう}工匠の建築と考えられる。

イ. 歴史的風致を形成する活動

大神楽

獅子頭^{ししがしら}を使った民俗芸能で、集落にある神社の例大祭で舞われる。ここでは山家神社および上洗馬神社の例大祭と大神楽を紹介する。



大神楽 (山家神社)

① 山家神社の例大祭と大神楽

山家神社の例大祭は4月の第2または第3週目の週末、土曜日の夜(宵祭り)から日曜日の午前(本祭り)にかけて行われる。古くから地域のお祭りとして根付いており、昭和42年(1967)発行の『長村誌』にも記載がある。

真田自治会では、土曜日の午前に例大祭の準備がはじまる。旧真田集落の^{おさ}長小学校から山家神社までの道沿いの家では玄関先に^{ちやうちん}提灯を飾り明かり



宵祭りの様子

を灯し、それ以外は^{のぼり}幟を立てる。夜には、長小学校へと集まり、演奏とともに闇のなかで獅子が舞ったあと、各組の代表が十二灯籠^{とうろう}を掲げて山家神社まで練り歩く。山家神社から望む、十二灯籠の明かりが揺れ動く練り歩きの様子は、道沿いの家々に飾られた提灯と合わせ幻想的である。

また、横沢自治会^{よこさわ}の家々でも幟を立て、例大祭の準備を行う。かつては自治会で横沢公民館から灯籠を掲げて山家神社へ持ち込んだが、現在では真田自治会に組織された保存会である^{よんよんかい}四々会が持ち込んでいる。

練りこんだ山家神社では、社殿の前で獅子舞が舞われ、夜祭りは終了する。翌日の本祭りでは社殿の前庭で獅子舞が舞われた後、浦安の舞が行われる。

なお、大神楽は四々会が中心となり実施しており、月に1度、例大祭の1週間前からは毎日、真田公民館で練習している。

また、本祭りで行われる浦安の舞は集落の小学生全体へ声を掛けて担い手を集めており、真田自治会が一体となり取り組んでいる。



行列の様子



山家神社の例大祭の範囲と行列ルート

② 上洗馬神社の例大祭と大神楽

上洗馬神社の例大祭は、4月第2週と9月第2週の週末、土曜日の夜から日曜日にかけて行われ、3人立ちの獅子舞による大神楽が舞われる。例大祭は上横道、中横道、下横道、田中、穴沢の5自治会（かつては三島平を含めた6自治会）で、昭和21年（1946）の『傍陽時報』には、「横道区で4月14、15日の上洗馬神社春期例祭で神楽を出し盛大かつ有意義に終了した。」との記述がある。

大神楽は昭和56年（1983）に横道青年団を中心に設立された横道神楽保存会（以下、保存会）により演舞される。例大祭の準備は10日程前から始まる。そのころには練習会場となる横道公会堂から、笛や太鼓の賑やかな音が漏れ聞こえてくる。さらに例大祭が近づくと、上洗馬神社や、横道公会堂から上洗馬神社を繋ぐ道中に幟旗が掲げられ、例大祭の雰囲気が集落に一層漂う。

例大祭当日、土曜日の夜には、上横道、中横道、下横道の3自治会の代表や、白シャツに法被、紺色のズボンに統一した装いの保存会の会員などが、家々から横道公会堂へ集まり、上洗馬神社へむけた行列がはじまる。幟旗が掲げられた道中を笛と太鼓で賑やかしながら行列する様子や、道中で足を止めて演舞される大神楽、太鼓の演奏は参列者を盛り上げる。田中、穴沢の2自治会の代表は道中で合流し、午後8時30分ごろに鳥居をくぐり、境内へと練りこみ、拝殿・本殿を一回りして神事が行われた後、境内の広場で獅子舞が舞い、午後9時ごろ終了となる。笛や太鼓は帰り道でも演奏され、賑やかなまま横道公会堂まで、行列して戻る。日曜日にも同様に進み、境内へ練りこむ前に神主が合流し、午後2時30分に鳥居をくぐる。拝殿・本殿を一回りしたのち、神主による神事、つづいて浦安の舞が行われ、最後に獅子舞が舞い午後3時ごろには終わりとなる。



横道区大神楽（彫刻）

※一般家庭に貯蔵



横道神楽保存会の法被



上洗馬神社の境内で舞う獅子舞

古くからつづく例大祭や大神楽、幟旗が掲げられた道中を行列する様子など、集落中から人が集まるほか、県外からも見物客が訪れており、その週末は集落が大変賑やかとなる。

なお、ここで演舞される大神楽は長野市の赤野田地区^{あかのた}から伝来したとされ、地域住民により伝承されていた。演舞が5,6年ほど中止された時期もあったが、保存会の会員が経験ある住民から指導を受け、再開するに至った。横道神楽保存会による大神楽は地域に愛されており、獅子の舞手や笛・太鼓の演奏など、現在も若い世代へと受け継がれている。



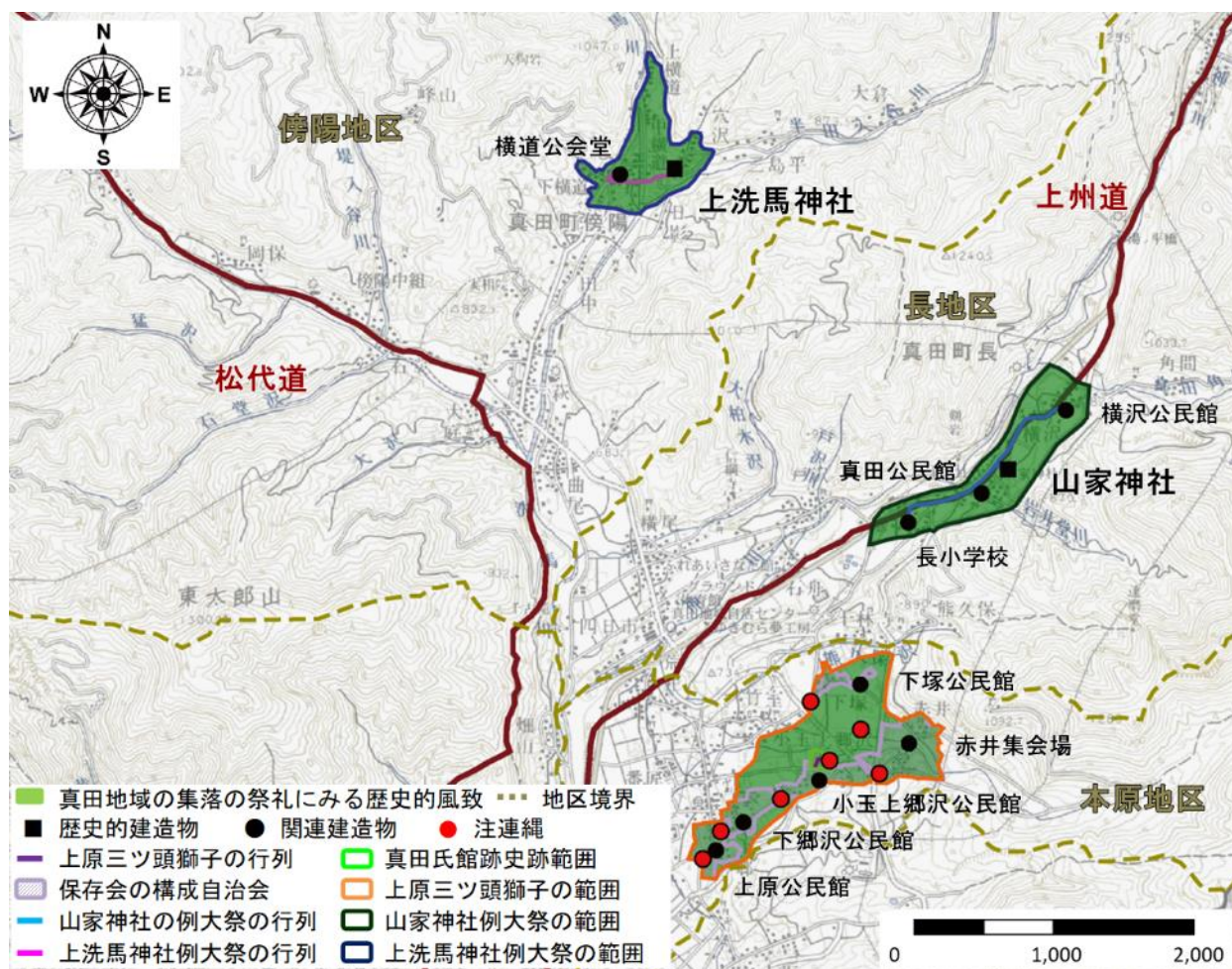
上洗馬神社の例大祭の範囲と行列のルート

まとめ

真田地域は、神川の河岸段丘に伸びる長地区、洗馬川、傍陽川の沿岸集落からなる傍陽地区、上田盆地を見渡せる大沢川扇状地に立地する本原地区の大きく3つの地区から構成され、それぞれに小学校を有するなど、まとまりのある市街地環境を形成している。

本原地区の真田氏館跡で舞われる上原三ツ頭獅子、長地区の山家神社の例大祭で演じられる大神楽、傍陽地区の上洗馬神社の例大祭で演じられる大神楽など、地区・集落ごとに民俗芸能が残されており、祭礼行事は地区の歴史的建造物において多くの地区住民の前で大人・子供による演舞が行われる。

祭礼運営や獅子舞や大神楽の演奏、舞の技術、地域の独自文化は自治会の中で人から人へと伝承され、特色ある風土と文化、郷土愛が育まれており、真田地域の様々な場所で触れることができるこれらの営みは、歴史的建造物とともに将来にわたり守り続けたい歴史的風致である。



真田地域の集落の祭礼にみる歴史的風致の範囲

2-6. 武石地域の祭礼にみる歴史的風致

はじめに

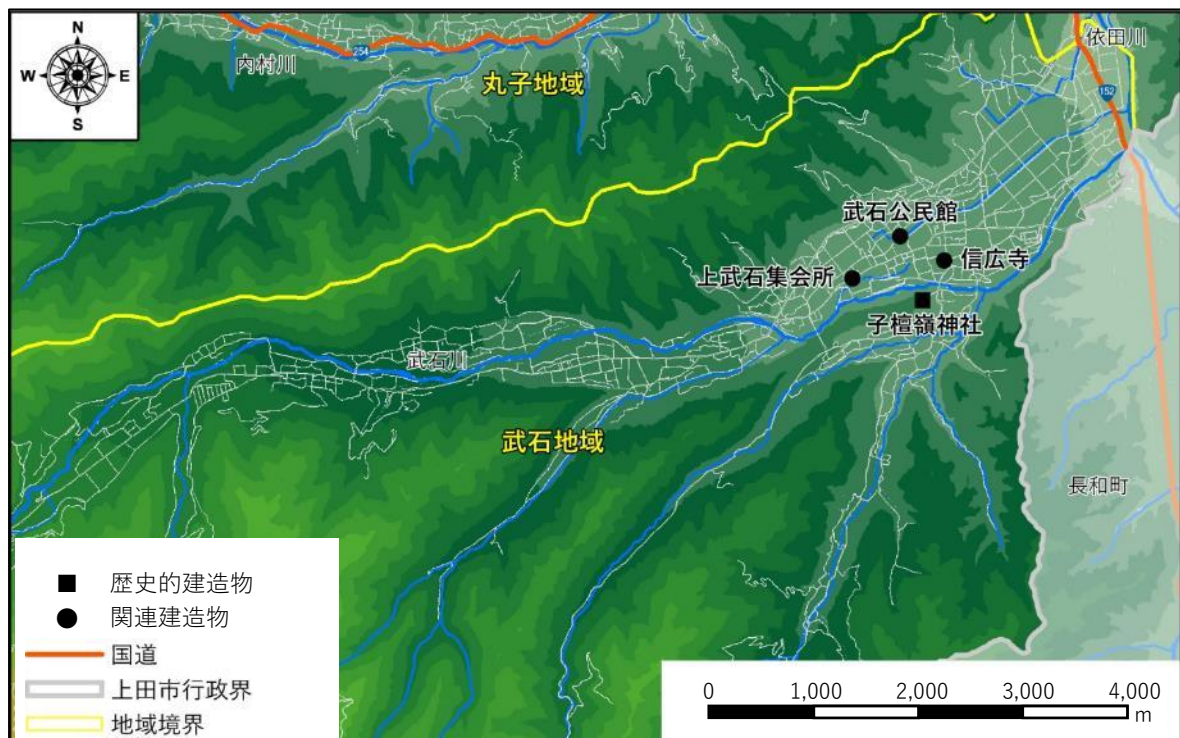
武石地域は、上田市の南部に位置し、中山道の長久保宿（長和町）から武石峠を越えて松本へ至る道沿いの、武石川やその支流の河岸段丘に発達した郷で、入り口が狭いため地勢的にまとまりがある。江戸期は一貫して上田藩領であったが僻地であった。武石峠を越えて松本へ至る道は正規の街道ではなかったものの、松本から江戸へ抜ける最短経路として利用されていた。山間の農村風景がよく残されている。



武石地域の概観



武石地域の位置



武石地域周辺の地形

ア. 歴史的風致を形成する建造物

子檀嶺神社（未指定）

小沢根地区にあり、武石郷総鎮守と崇敬される。社伝によると、和銅5年(712)に山城国紀伊郡稲荷神社(現在の伏見稲荷大社)より倉稲魂命の御分霊を仰ぎ、奥宮なる子檀倉宮を子檀倉岳山頂に、中社なる駒形神社を武石郷余里に、里宮として子檀嶺神社を武石郷沖五日町に遷し祀られたとされ、また、子檀嶺神社は大文4年(1535)に依田川の洪水で社殿が流失した際に、現在の場所へ移転したと伝えられる。

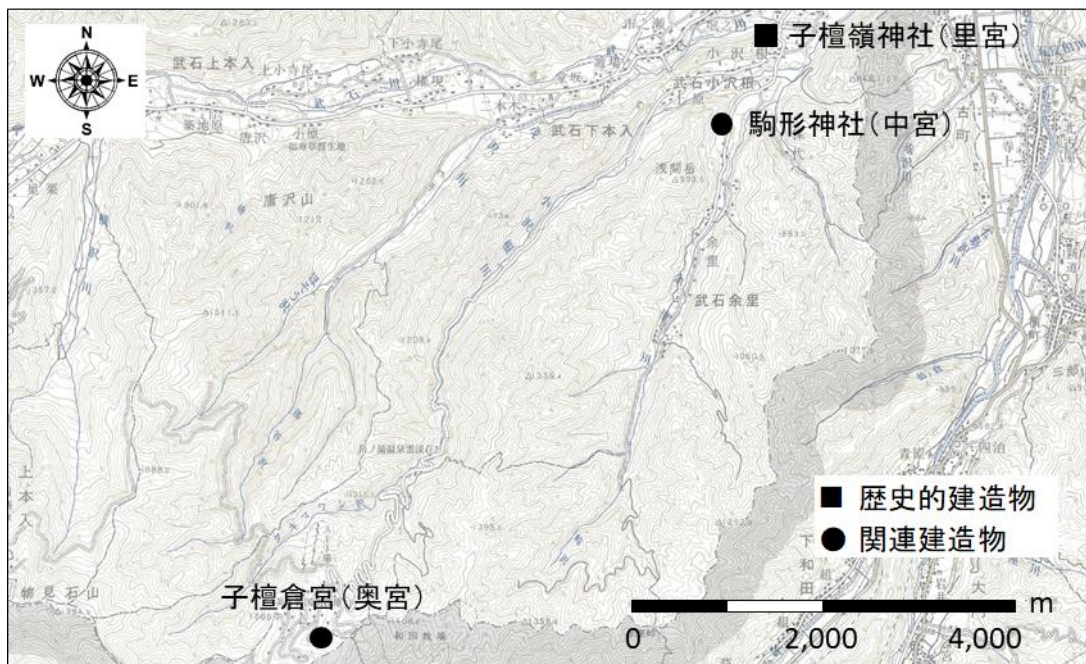
その後、老朽化した社殿の修築が行われたが、大正8年(1919)の屋根の葺き替えの際に失火のため焼失した。現在残る社殿はこの翌年に再建された社殿とされ、昭和12年(1937)の写真からは、現在と同様の様子が確認される。本殿、神楽殿、渡殿、鳥居から成っている。



子檀嶺神社



昭和12年の子檀嶺神社
(祭の写真)



子檀嶺神社関係3社位置図

イ. 歴史的風致を形成する活動

子檀嶺神社御柱祭行事（市指定無形民俗文化財 昭和46年(1971)指定）

① 概要

御柱行事は諏訪大社を総本社とする諏訪神社において、数えて7年ごとの申・寅の年に執り行われる神事である。

子檀嶺神社御柱祭行事（以下、御柱祭行事）の始まりや由来、目的は明らかでないが、元亀2年（1571）の『獄石大明神略縁起』に開催された旨の記載がある。

子檀嶺神社は里宮が小沢根地区、中宮が余里地区にあることから、過去2地区のみで行われていたが、昭和43年(1968)から旧武石村全域（現在の武石地域）を挙げて行われるようになった。

御柱祭行事は、注連張祭にはじまり、斧入式、山出し祭、里曳、本曳、御柱建てに終わる一連の行事で、切り出した大木を建立する行事である。現在は注連張祭から里曳までを本祭の前年に、本曳と御柱建てを本祭当日に行う。また、本祭

では「おねり行列」も奉納される。平成28年（2017）4月10日の本祭では、おねり行列に武石地域の住民はもちろんのこと、地域外からも参加し、総勢300名を超える人々が行事に関わり盛大に行われた。

当日は早朝におねり行列が武石公民館を出発し、子檀嶺神社へと向かう。おねり行列が御旅所を通過すると、曳き子（氏子）によって御柱が境内まで曳かれ、建立されて御柱行事は終わりとなる。

② おねり行列

御柱祭行事では、御柱と共に神社へ奉納される「おねり行列」が盛大に行われる。天狗面を付けた道祖をはじめ、御弓、御鉄砲や小長刀、金紋御先箱に御槍、赭熊など、古式豊かな装束に身を固め、迫力ある所作を演じながら練り歩く一大絵巻を展開する。

このおねり行列は、大名の本陣入りの様子を真似たものといわれ、奴の大鳥毛の振り方、先箱かつぎや少女たちの長刀振りの妙技、また、振瓢とおかめの余興が入っているのが特徴である。



子檀嶺神社御柱祭行事



おねり行列



おかめと振瓢

③ 御柱祭行事の内容

a. 注連張祭

本祭の前年3月に執り行われる。武石地域の山々から事前に選定した赤松をはじめとした常緑樹に注連縄を張り神事を行う。御柱の長さは3丈9尺(約11.8m)、4丈2尺、4丈5尺、4丈8尺(約14.5m、最長)と式年ごとに3尺(約0.9m)ずつ長くし、最長に至ると逆に3尺ずつ短くなり長短を繰り返す。

b. 斧入れ式・山出し祭

注連張祭につづく10月から11月にかけての佳日に、神職・氏子総代・地区内各代表が参列して早朝から行う。神職による祈祷を行ったあと、技の優れた斧方27人が、選定した御神木の候補を根のついた姿で伐採する。伐採された御柱は、上武石集会所まで運ばれ、根のほうに3箇所、うらと呼ぶ梢のほうに1箇所、それぞれ溝を掘り、赤身のある藤蔓を通して曳き綱のもとを結ぶ。この曳き綱には、前回の本曳で使用した曳き綱を使用する。



斧入れ式

c. 里曳

曳き綱を掛け声に合わせて大勢で引き、御柱を信広寺の南に位置する御旅所まで曳行する。道の曲がり角では、猿田木で作られた、直径5cm長さ2mのてこ棒を利用し、22名のてこ方が協力して御柱の向きを変える様子もみられる。



里曳き



御旅所の御柱

d. 本祭の準備

本祭の年になると、神社の鳥居に取り付ける注連縄作りが藪合地区で、里曳で使用する曳き綱を作成する「綱打ち」が小沢根地区と余里地区で行われる。

注連縄作りは藪合公民館に集まり行われる。住民が力を合わせて、束ねた藁を力強く撚り、長さや太さを整え作成する。完成した注連縄は、鳥居に取り付け、あわせて作成した「房」が吊るされる。

綱打ちは、1本 120m の縄 35 本を束ね、それを 3 本より合わせて1本の曳き綱とする。住民が真っすぐな道路に集まり、協力して曳き綱を作成する。過去には縄を各戸 50 尋 (約 90m) ずつ持ち寄り、より合わせて、太さ 5 寸 (約 15cm)、長さ 30 間 (約 54m) に及ぶ綱を編んでいた。

また、おねり行列の準備もはじまる。役柄や練習日を決定し、衣装の着付けや、化粧の打ち合わせなどが複数回行われる。1 週間前には総練習として、主要な役柄が集まる練習も行われる。



注連縄と房



総練習の様子

e. 本祭

4月の第二日曜日に行う。当日は朝4時から準備が始まり、7時30分ごろには参加者が全員集合する。8時に武石公民館で名前と役を紹介する読み立てを行ったのち、おねり行列は出立する。

行列は各所で迫力ある所作を演じながら、3時間ほどかけて子檀嶺神社へと進む。切れのある所作やおかめによって沿道にいる観客からは歓声が沸き、盛大な拍手が送られる。その後、おねり行列は子檀嶺神社の境内へと進み、おねりが奉納される。



おねり行列



子檀嶺神社と御神輿

一方、おねり行列の先頭が子檀嶺神社に到着する 11 時ごろ、本曳の準備がはじまる。御旅所に置かれた御柱木に曳き綱を取り付け前方へと伸ばす。参加者が曳き綱へと集まると、「さーさーみなさん お願いだー」の掛け声により信のぶ広寺の脇の道端から御柱を曳き始める。曳き子は引き綱に取り付き、時間をかけて神社境内まで引いていく。子檀嶺神社の拝殿は斜面上に位置しているため、長い綱をタイミングよく引き上げながら、少しずつ境内へ持ち上げる。



本曳き



出発

拝殿西側の御柱を建てる場所には事前に直径 4 尺(約 1.2m)深さ 3 尺(約 0.9m)ほどの穴を掘っておき、鹿角かのつと呼ぶヒノキの丸太 2 本に縄を結んだもので御柱木を支えながら引っ張り上げる。御柱が垂直に建立すると歓声が沸き、拍手が起こる。最後は先導の掛け声により会場全体で万歳を三唱し終わりとなる。



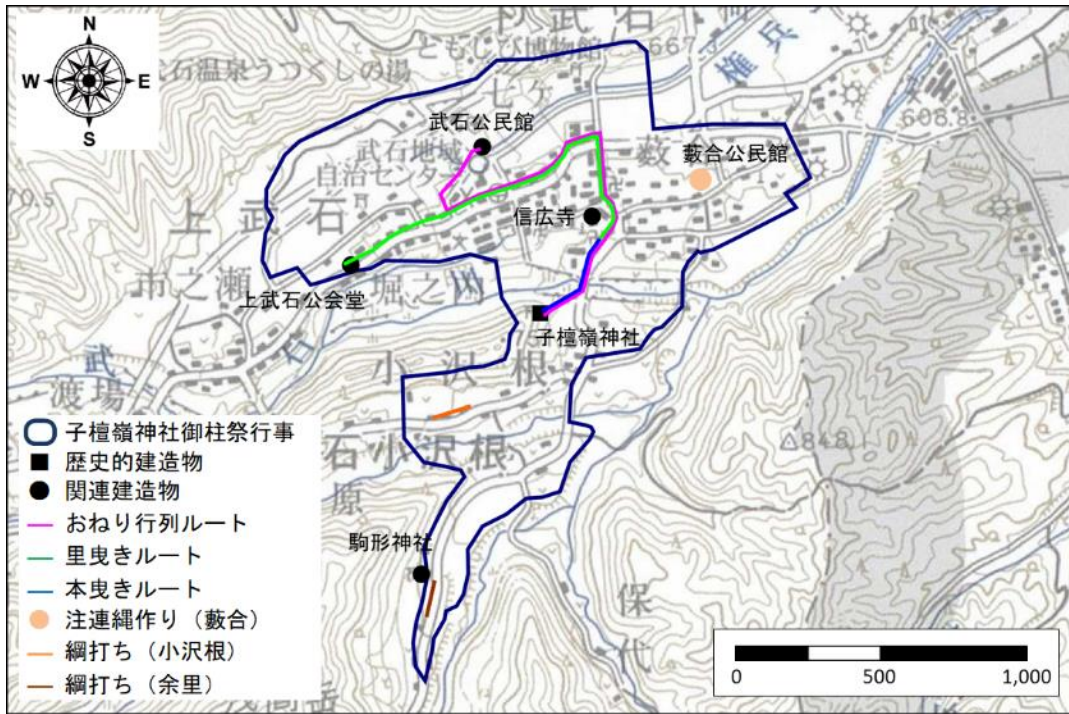
御柱の建立



鹿角



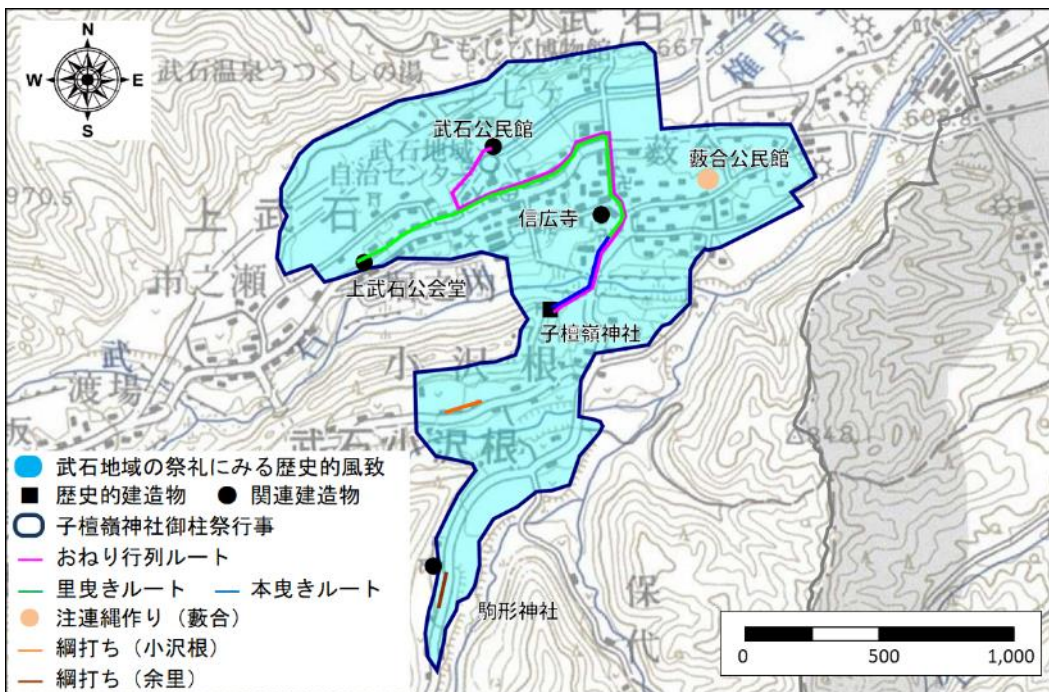
建立された御柱



子檀嶺神社御柱祭 関連行事位置図

まとめ

数えて7年に一度举行される御柱祭行事は、現在は武石地域全域を挙げての祭りとなり、多くの住民が携わる一大行事である。斧入れ式や里曳、綱打ちなどの準備は地域全体で行われ、祭り当日には地域の内外から多くの人々が集まり、大盛り上がりを見せる。子檀嶺神社にも大勢の人が集まり、おねり行列の奉納や御柱が建立される様子などがみられる。これらは武石地域に古くから受け継がれた伝統であり、今後も残したい歴史的風致である。



武石地域の祭礼にみる歴史的風致